

八尾市文化財調査報告39
平成9年度公共事業

八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅱ

1998.3

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は、生駒山地西麓から大阪平野東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。そして、ここには旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数の遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には、八尾市の公共事業に先立つ遺構確認調査の成果の一部を収めております。南久宝寺土地区画整理事業に先立つ試掘調査によって弥生時代から近世にかけての遺跡の広がりが明らかになった久宝寺遺跡、寺内町に関連する遺構が検出された久宝寺寺内町遺跡、心合寺跡関連の遺物が出土した心合寺山古墳西側の新池堤体の試掘調査、庄内式期の遺構・遺物が確認された西郡廃寺遺跡をはじめ、非常に貴重な成果が得られました。

しかしながら、これらの調査のほとんどが、記録保存のための発掘調査における事前の遺構確認調査であり、これらの成果は遺跡の破壊という大きな代償の上に得られた物であることは言うまでもありません。

今後、八尾市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる形で、保存・活用されていくことが、重要な課題となっていくことでしょう。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例 言

1. 本書は、平成9年度に八尾市教育委員会が公共事業に先立ち、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長 寺島正男）が実施した。
3. 調査にあたっては、八尾市教育委員会文化財課技師 米田敏幸、消斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、とくに成果のあった調査について、その概要を収録した。ただし、整理作業等の都合から、平成8年度の調査分についても一部収録している。
5. 現地調査・報告書の作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。（敬称略・五十音順）
明石信行・浅井紀己子・荒川和哉・池田茂樹・岡一雅・加茂靖通・木村典子・楠隆義・頃安敏雄
高橋尚子・灰藤秀樹・日高智隆・藤中貴子・松尾実・水谷貴之・山本陵子・横山妙子
6. 調査一覧表及び調査抄録の作成は、本課技師 吉田珠己が行った。
7. 本書の作成にあたっては、本課技師 消斎、吉田野乃、藤井淳弘が執筆を行い、文責はそれぞれ文末に記した。編集は藤井が行った。

本文目次

| | |
|---|----|
| 1. 久宝寺遺跡（97-186）の調査 ー南久宝寺地区埋蔵文化財試掘調査概要報告ー | 1 |
| 2. 久宝寺寺内町遺跡（97-129）の調査 | 23 |
| 3. 心合寺跡（96-576）の調査 | 33 |
| 4. 心合寺山古墳 新池堤体改修に伴う試掘調査（平成9年度） | 36 |
| 5. 太子堂遺跡（96-724）の調査 | 48 |
| 6. 高安古墳群（97-12）の調査 | 51 |
| 7. 西郡廃寺遺跡（96-446）の調査 | 53 |
| 8. 東弓削遺跡（97-188）の調査 | 64 |
| 調査一覧表 | 70 |

図版目次

| | | |
|-------|------------------------------|---|
| 図版 1 | 久宝寺遺跡 (97-186) | 調査風景その 1 (第 7 区) 調査風景その 2 (機械掘削) 調査風景その 3 (実測風景) |
| 図版 2 | 久宝寺遺跡 (97-186) | 遺構検出状況 (第 6 区) 調査風景その 4 (第 11 区) S X 1 1 0 1 瓦出土状況 (第 11 区) |
| 図版 3 | 久宝寺遺跡 (97-186) | 遺構検出状況 (第 14 区) 須恵器 器台・甕・出土状況 (第 14 区) 羽釜出土状況 (第 14 区) |
| 図版 4 | 久宝寺寺内町遺跡 (97-129) | 第 1 遺構面 (西より) 第 2 遺構面 (西より) 第 3 遺構面 土坑 2 軒丸瓦出土状況 |
| 図版 5 | 心合寺山古墳 (新池) 第 1 区 | 調査区より心合寺山古墳を望む 調査区 (南西より) 調査区北壁断面 (東より) |
| 図版 6 | 心合寺山古墳 (新池) 第 2 区 | 調査風景 (西より) 調査区 (北より) 調査区土層断面 (南より) |
| 図版 7 | 西郡廃寺遺跡 (96-446) | 調査風景 (機械掘削) S D 1 0 1 器台出土状況 (第 1 調査区) S K 1 0 1 土器出土状況 (第 1 調査区) |
| 図版 8 | 西郡廃寺遺跡 (96-446) | S D 1 0 2 土錘出土状況 (第 1 調査区) S D 1 0 2 小型壺出土状況 (第 1 調査区) S D 2 0 1 検出状況 (第 2 調査区) |
| 図版 9 | 久宝寺遺跡 (97-186) | 出土遺物 |
| 図版 10 | 久宝寺寺内町遺跡 (97-129) | 出土遺物 |
| 図版 11 | 久宝寺寺内町遺跡 (97-129) | 出土遺物 |
| 図版 12 | 久宝寺寺内町遺跡 (97-129) 他 | 出土遺物 |
| 図版 13 | 心合寺跡 (96-576) 心合寺山古墳 (新池) | 出土遺物 軒丸瓦 出土遺物 軒丸瓦 |
| 図版 14 | 心合寺山古墳 (新池) | 出土遺物 |
| 図版 15 | 太子堂遺跡 (96-724) | 出土遺物 |
| 図版 16 | 西郡廃寺遺跡 (96-446) | 第 1 調査区出土遺物 |
| 図版 17 | 東弓削遺跡 (97-188) | 出土遺物 |

1. 久宝寺遺跡 (97-186) の調査

—南久宝寺地区埋蔵文化財試掘調査概要報告—

- 1. 調査地 南久宝寺1丁目～3丁目・渋川町6丁目地内
- 2. 調査期間 平成9年7月1日～11月6日
- 3. 調査経緯と方法 都市整備部南久宝寺地区整備事務所の依頼に基づいて、南久宝寺土地区画整理事業に先立ち、事業地内の埋蔵文化財の試掘調査を行うこととなった。

今回の事業地内は、「久宝寺遺跡」に属しており、JR久宝寺駅と竜華操車場跡地の北側に広がる東西約0.5km、南北約0.5kmの約23.4haを対象としている。

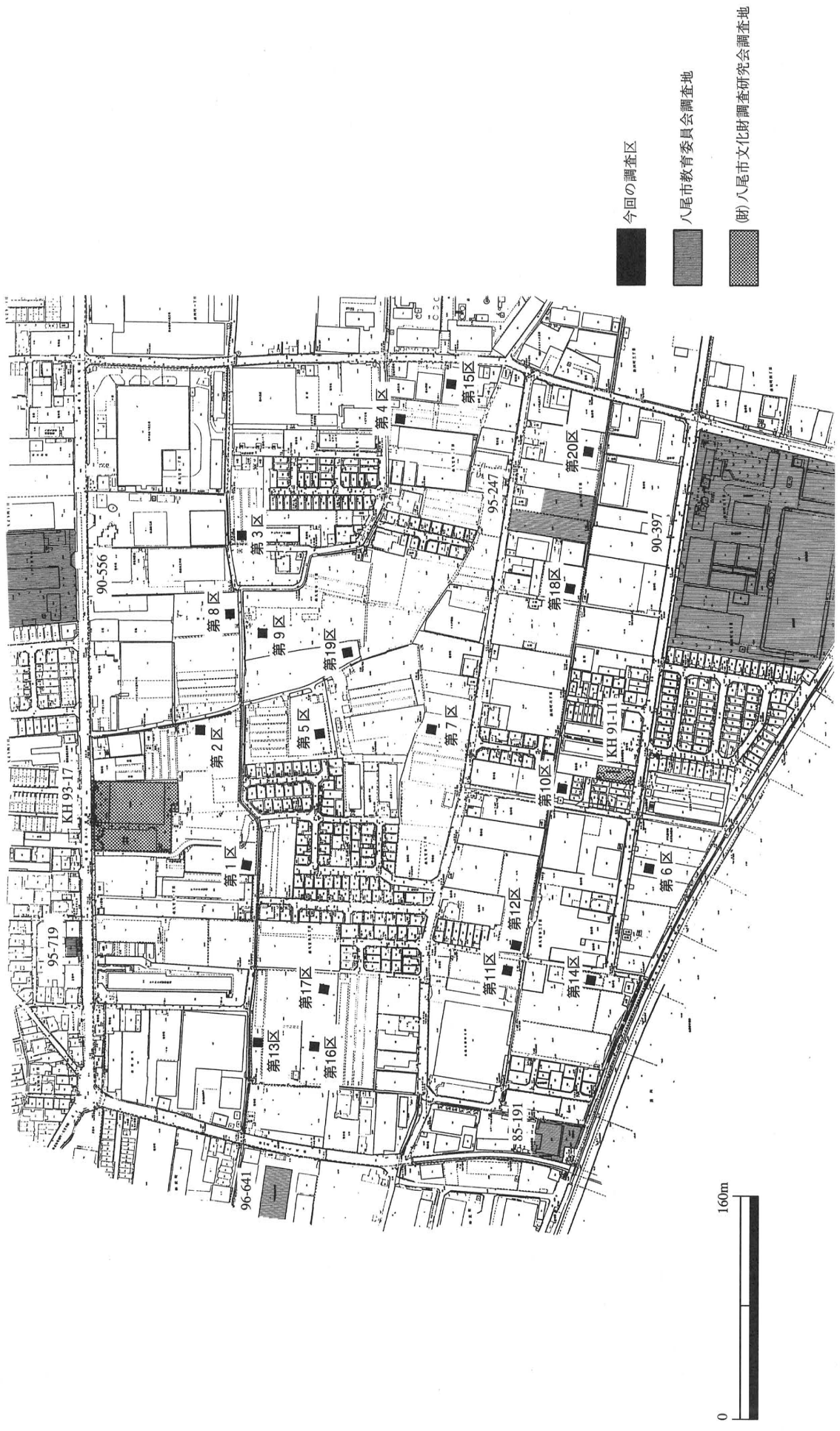
事業地北側には、中世末から近世にかけて形成された「久宝寺寺内町」があり、南東側のJR関西本線沿い付近には、飛鳥時代の創建と考えられる「渋川廃寺」がある。さらには、竜華操車場跡地内では、都市基盤整備に伴って発掘調査が進められており、貴重な調査成果が挙がりつつある。そして、近隣周辺の発掘調査においても弥生時代から近世にかけての集落跡等が確認されている。このことから、今回の事業地内でも該期の遺跡の存在が予想されていた。

そのため、この広範囲にわたる事業地内の遺跡の性格・遺物の包蔵状況を把握するために、区画整理道路建設予定地及びその周辺に20ヶ所の調査区を設定（第2図調査区設定図 参照）し、遺構確認調査を実施した。

調査区は、一辺5m×5mで設定した。表土から地表下約1mまでを掘削用重機を使用して掘削し、以下人力掘削によって1mの掘削深ごとに段掘りを行い、地表下約3mまで、調査を行った。なお、調査区の名称は、調査を行った順に第1区～第20区とした。

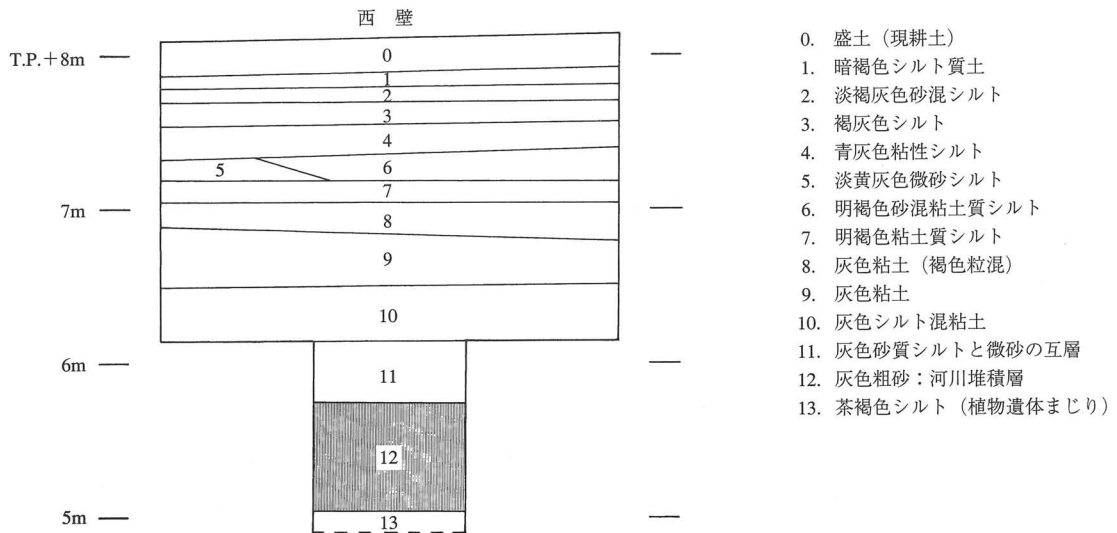


第1図 調査地周辺図 (1/5,000)

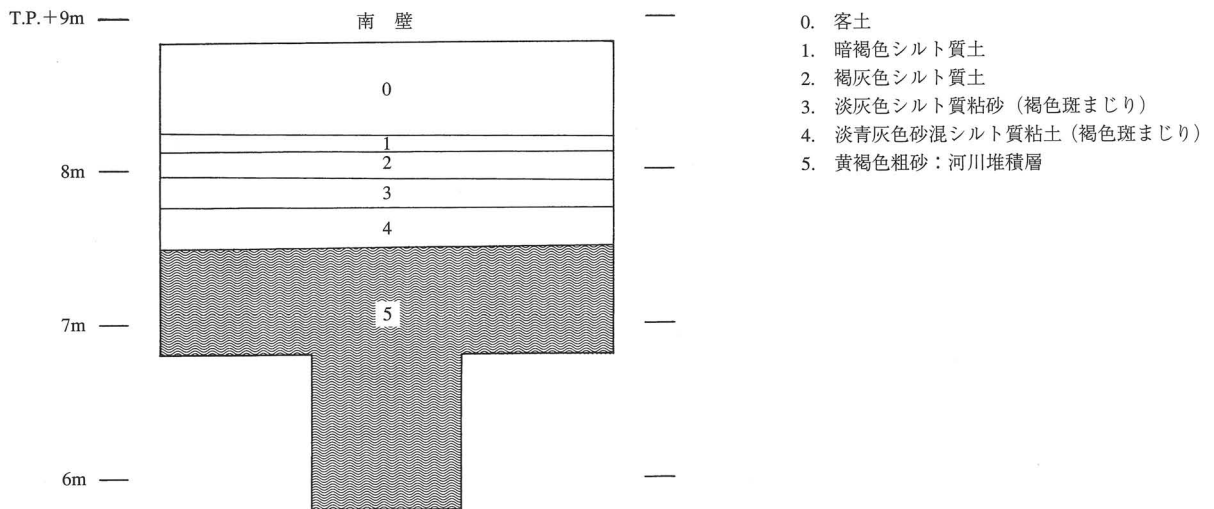


第2図 調査区設定図 (1/4,000)

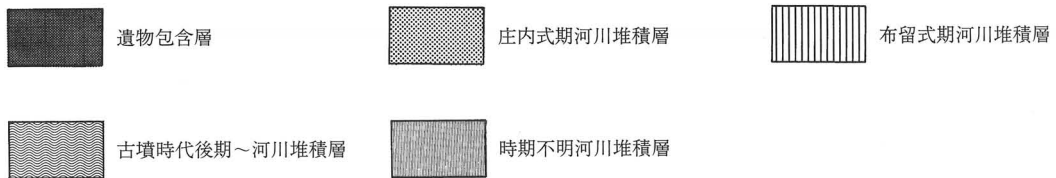
[第1区]



[第2区]



<層位の時期区分>



第3図 土層模式図（第1区・第2区） S=1/50

4. 調査概要

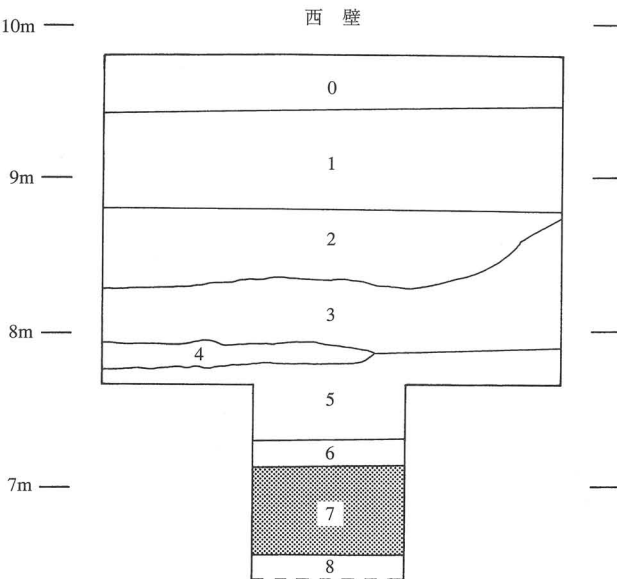
[第1区]
 (第3図参照)

以下、第1区から第20区までの調査概要について述べていくことにする。

本事業地内では、北半部西側よりほぼ中央の調査区で、(財)八尾市文化財調査研究会の久宝寺遺跡第17次調査（〔岡田1997〕）の南側約120mに位置している。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.1mを測る。

層厚約0.2mの現耕土層以下、地表下0.55m～0.75m（T.P.+7.55m～7.35m）の青灰色粘性シルトからは、土師器・瓦器・瓦の細片が少量出土しているものの、顕

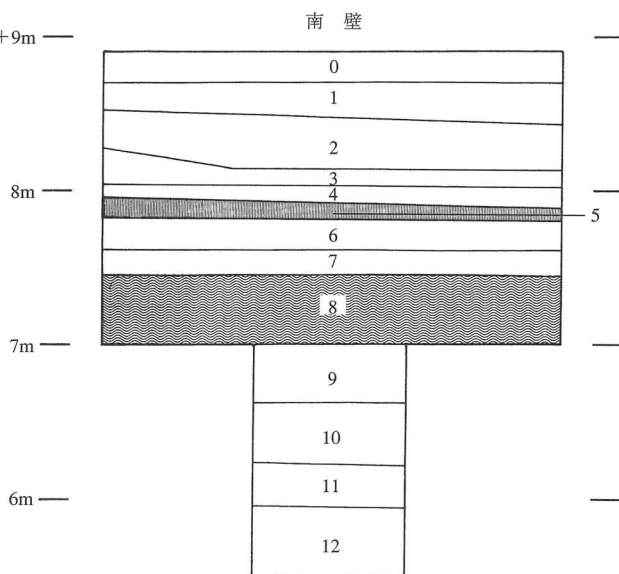
[第3区] T.P.+10m



- 0. 耕土
- 1. 盛土
- 2. 黄褐色細砂
- 3. 暗灰色粘土ブロックと黄褐色粗砂
- 4. 青灰色シルト質粘土
- 5. 褐色シルト混粘土
- 6. 灰色粘土 (褐色粒混)
- 7. 灰色粗砂：河川堆積層
- 8. 暗灰褐色シルト

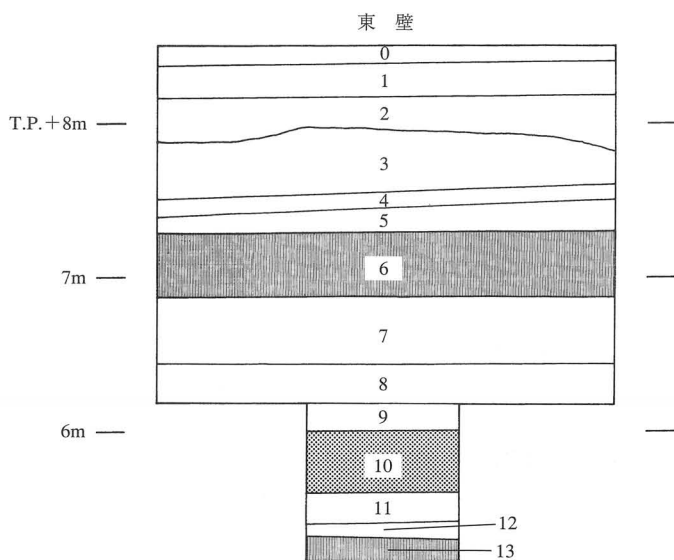
[第4区]

T.P.+9m



- 0. 耕土 (暗褐色土)
- 1. 褐色粘性シルト
- 2. 褐灰色シルト
- 3. 明褐灰色微砂混シルト
- 4. 褐灰色微砂混シルト
- 5. 灰色微砂：河川堆積層
- 6. 灰色シルト混微砂 (Fe混)
- 7. 灰色微砂混シルト
- 8. 灰白色粗砂：河川堆積層
- 9. 暗青灰色シルト質粘土
- 10. 灰色粘土
- 11. 暗灰色粘土
- 12. 淡青灰色シルト

[第5区]



- 0. 耕土 (暗褐色土)
- 1. 明黄褐色粘性シルト
- 2. 淡褐灰色シルト
- 3. 淡褐灰色微砂混シルト
- 4. 明灰色微砂混粘性シルト
- 5. 灰色微砂混粘土質シルト (褐色粒混)
- 6. 明灰色細砂：河川堆積層
- 7. 灰色粘土 (少量白色粒混)
- 8. 暗灰色小レキ混粘砂
- 9. 淡青灰色小レキ混粘砂
- 10. 灰色細砂：河川堆積層
- 11. 灰色粘土
- 12. 暗灰色小レキ混シルト (植物遺体まじり)
- 13. 暗灰色粗砂：河川堆積層

第4図 土層模式図 (第3区・第4区・第5区) S=1/50

著な遺構等は確認できなかった。

そして、地表下1.65m (T.P.+6.45m) の灰色シルト混粘土より、弥生土器の甕の破片が1点出土している。

以下、地表下2.4m～3.15m (T.P.+5.7m～4.95m) に河川堆積層 (灰色粗砂) があるものの、時期を特定できる遺物は出土しなかった。上層の時期から考えて、弥生時代後期以前のものと考えられる。

[第2区]
(第3図参照)

第1区の東約120mの調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.85mを測る。

畑地による層厚約0.6mの客土層以下、地表下1.1m (T.P.+7.75m) の淡青灰色砂混シルト質粘土層より、陶磁器・土師器・瓦の破片が若干出土している。

そして、地表下1.35m以下、地表下3.1m (T.P.+7.5m～5.75m) までの掘削限界までは、河川堆積層 (黄褐色～灰色粗砂) が続く。この河川堆積層より、須恵器・瓦器・瓦・土師器・弥生土器が多数出土している。すべて摩滅した小片で、図化できるものはなかった。時期については、出土遺物から古墳時代後期～近世の自然流路であった可能性が高い。

[第3区]
(第4図参照)

第1区と第2区のほぼ一直線上にあり、そのライン上では、東端に位置する調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+9.8mを測る。

その畑地の耕土層が層厚約0.3mで続き、さらにその直下も地表下1.95m (T.P.+7.85m) までブロック状の粘土が混じる層が続き、近年の客土及び攪乱層であった。

そして、地表下2.7m～3.3m (T.P.+7.1m～6.5m) の河川堆積層 (灰色粗砂) で微量の土器細片3点が出土している。時期については、弥生時代後期末～古墳時代初頭のものであると考えられる。

[第4区]
(第4図参照)

第3区から、南東約170mに位置する調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.9mを測る。

地表下1.5m (T.P.+7.4m) までは、少量の遺物は出土しているものの顕著な遺構等は確認できず、ややしまりのない層が続く。そして、地表下1.5m～1.95m (T.P.+7.4m～6.95m) に河川堆積層 (灰白色粗砂) があり、ローリングを受けた須恵器・土師器・弥生土器の小片が出土している。

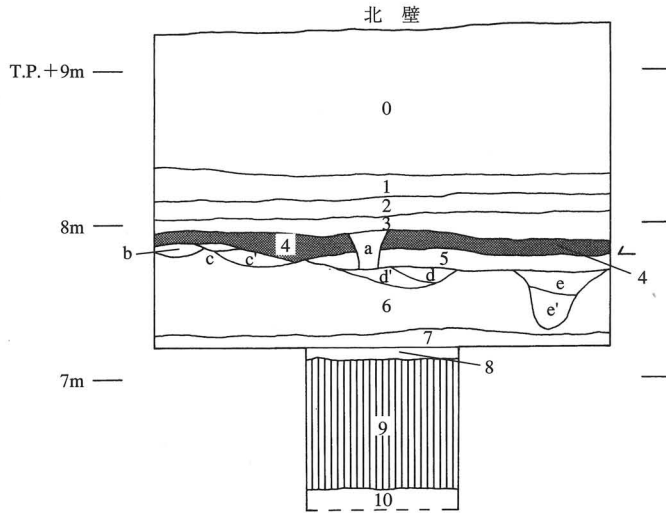
以下、地表下2.75m～3.0m (T.P.+6.15m～5.9m) の暗灰色粘土より、わずかではあるが、弥生土器小片5点が出土している。詳しい時期については、不明であるが、古墳時代前期以前と考えられる。

[第5区]
(第4図参照)

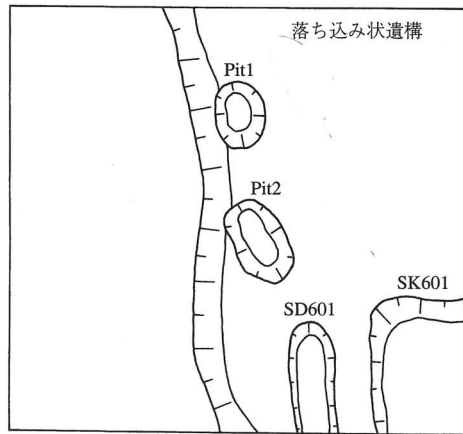
第2区の真南約100mに位置する調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.5mを測る。そして、地表下1.2mまでは、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

そして、地表下1.2m～1.5m (T.P.+7.3m～7.0m) に土師器細片等を含む灰色細砂があり、直下の灰色粘土より土師器皿・椀が出土している。おそらく、洪水砂で埋もれた鎌倉時代後期 (14世紀代) 以降の水田面の可能性が高い。この灰色粘土が地表下2.1m (T.P.+6.4m) まで続く。

[第6区]

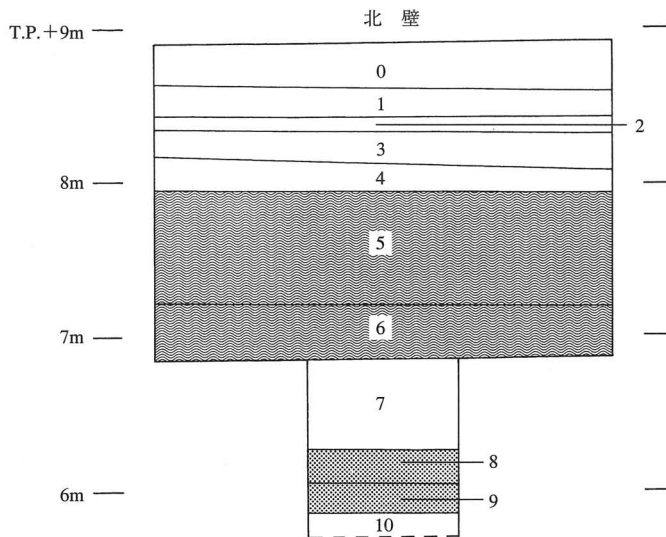


- 0. 盛土
 - 1. 暗灰色シルト質粘砂 (旧耕土)
 - 2. 青灰色砂混シルト (暗褐色粒混)
 - 3. 青灰色砂混シルト
 - 4. 褐灰色粘質シルト (褐色土混) : 遺物包含層
 - 5. 暗褐色粘質シルト (褐色土混)
 - 6. 明褐色シルト質粘土
 - 7. 黄褐色粘性シルト
 - 8. 灰色微砂混粘性シルト
 - 9. 灰白色細砂~粗砂 (植物遗体まじり) : 河川堆積層
 - 10. 灰色粘土質シルト
- a. 灰色粘性シルト
 - b. 暗褐色粘性シルト
 - c. 褐色シルト
 - c'. 褐色シルト (しまりあり)
 - d. 暗黄褐色粘性シルト
 - d'. 黄褐色粘性シルト
 - e. 淡褐色シルト
 - e'. 暗褐色粘性シルト
- <遺構埋土>



<遺構平面図> S=1/50

[第7区]



- 0. 旧耕土 (暗褐色土)
 - 1. 褐色粘質土
 - 2. 暗褐色粘質土
 - 3. 明褐色粘質シルト
 - 4. 褐灰色小レキ混粘土質シルト
 - 5. 茶褐色粗砂
 - 6. 灰褐色~灰白色細砂
 - 7. 青灰色粘土
 - 8. 暗灰色小レキ混シルト質細砂
 - 9. 淡褐色細砂~粗砂
 - 10. 灰色粘土
- : 5・6層・河川堆積層
- : 8・9層・河川堆積層

第5図 土層模式図 (第6区・第7区) S=1/50

以下、地表下2.55m～2.95m (T.P.+5.95 m～5.55m) と地表下3.25 (T.P.+5.25m) 以下に河川堆積層 (灰色細砂・暗灰色粗砂) を確認している。出土遺物は、土器小片1点のみである。時期については、上層の河川堆積が古墳時代前期以前であると考えられるが、両層とも詳しい時期は不明である。

[第6区]
(第5図参照)

J R 関西本線沿い北側の調査区で、今回の調査区では、南端に位置する。現地表面は、盛土がなされており、レベル高T.P.+9.25mを測る。盛土層以下、地表下0.9m (T.P.+8.35m) より旧耕土面が確認できる。

そして、旧耕土面直下の地表下1.1m～1.3m (T.P.+8.15m～7.95m) の青灰色砂混シルトより、土師器・須恵器・すり鉢・瓦の破片が出土している。おそらく、近世以降の遺物包含層と考えられる。

さらに、地表下1.3m～1.5m (T.P.+7.95m～7.75m: 層厚約0.2m) の褐灰色粘質シルトが、奈良時代の須恵器・土師器・瓦等を含む遺物包含層となる。そして、地表下1.5m (T.P.+7.75m) の明褐色シルト質粘土をベースとして、奈良時代の遺構面を検出しており、溝、土坑、ピット等を検出している。

さらに、地表下2.15m以下3.0m (T.P.+7.1m～6.25m) まだが布留式期の河川堆積層 (灰白色細砂～粗砂) と考えられ、ローリングを受けた弥生土器・庄内式土器・布留式土器の破片が多数出土している。

第6区の遺構 (第5図: 遺構平面図) 奈良時代の遺構面で検出した遺構は、溝 [SD601]・土坑 [SK601]・ピット2基 [Pit1・2]・落ち込み状遺構がある。ただし、落ち込み状遺構については、本来の遺構面を削平しており、その他の遺構が埋没した後に掘り込まれたものと考えられ、その他の遺構より時期は若干新しい。

[SD601]: 調査区南側中央部で検出した。幅約0.3m・検出長0.7m・深さ0.05mを測る。埋土は褐灰色粘性シルトである。出土遺物には、土師器細片3点・須恵器甕細片1点がある。

[SK601]: SD01西側で検出した方形状の土坑の一部である。深さは、約0.02mある。埋土は、褐灰色粘性シルトである。出土遺物には、土師器細片10点、平瓦細片1点、須恵器甕片1点がある。

[Pit1]: 直径約0.45mのピットで、深さ0.07mを測る。埋土は、褐灰色粘性シルトである。出土遺物には、土師器細片2点、須恵器甕細片1点がある。

[Pit2]: 長辺約0.6mの楕円形のピットで、深さ約0.05mを測る。埋土は、褐灰色粘性シルトである。遺物は、出土していない。

[落ち込み状遺構]: 調査区中央部から東側に落ち込んでいく深さ約0.1mの落ち込み状の遺構で、上記の奈良時代の遺構を削平している。埋土は、暗褐色粘質シルトである。遺物には、土師器、須恵器の破片がある。

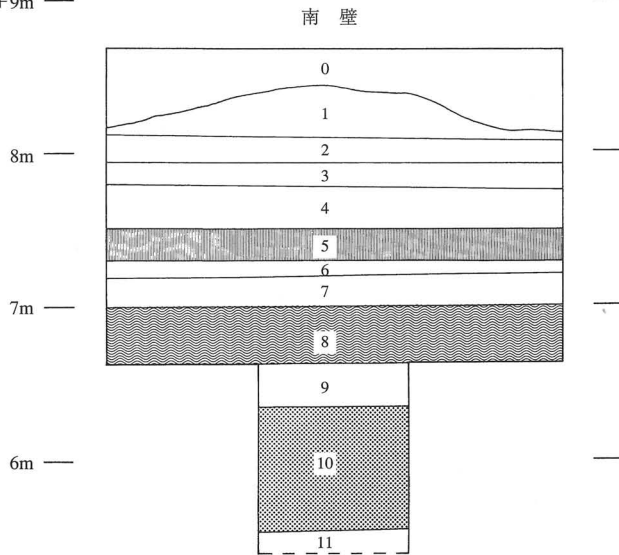
[第7区]
(第5図参照)

本事業地内ほぼ中央部の調査区で、第5区の真南約100mに位置する。現地表面は、調査直前まで畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.9mを測る。地表下0.6mにおいて、近世の溝・井戸を検出している。ただし、溝については近世以降に削平されており、北壁土層断面でのみ確認している。

以下、地表下1.0m～2.1m (T.P.+7.9m～6.8m) の河川堆積層 (茶褐色粗砂・灰

[第8区]

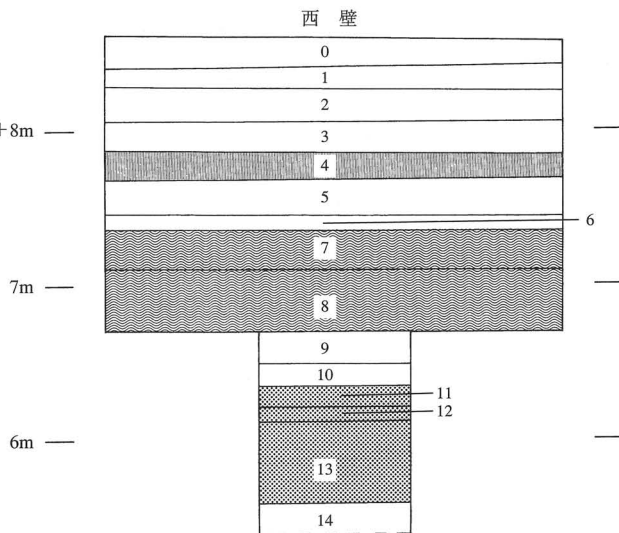
T.P.+9m



- 0. 盛土 (灰白色細砂)
- 1. 暗灰色粘砂 (褐色粒混)
- 2. 褐色粘質土
- 3. 灰褐色粘質土 (ややシルト混)
- 4. 淡褐色シルト混微砂
- 5. 淡褐色微砂：河川堆積層
- 6. 黄褐色微砂混シルト
- 7. 暗灰色シルト質粘土
- 8. 灰白色細砂：河川堆積層
- 9. 灰白色小レキ混シルト質粘土
- 10. 灰色粗砂：河川堆積層
- 11. 灰色シルト質粘土

[第9区]

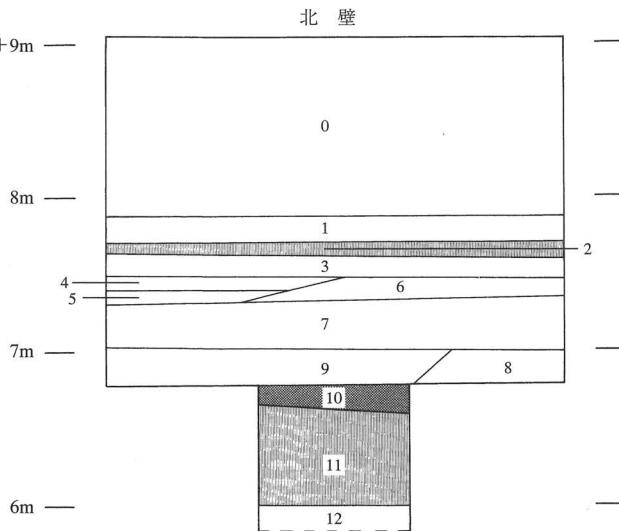
T.P.+8m



- 0. 耕土 (淡黒褐色)
- 1. 黄褐色土
- 2. 茶褐色土
- 3. 茶褐色小レキ混砂質土
- 4. 暗褐色粗砂：河川堆積層
- 5. 灰色粘性シルト (Fe混)
- 6. 灰色微砂混シルト
- 7. 明褐色粗砂
- 8. 灰白色粗砂
：7・8層・河川堆積層
- 9. 灰色シルト質粘土
- 10. 青灰色小レキ混粘土質シルト
- 11. 暗灰色シルト混粗砂
- 12. 灰色粗砂
- 13. 黄褐色細砂 (灰色粒砂混)
：11・12・13層・河川堆積層
- 14. 緑灰色シルト (植物遺体まじり)

[第10区]

T.P.+9m



- 0. 盛土
- 1. 緑灰色粘質土 (褐色粒混)
- 2. 褐色微砂：河川堆積層
- 3. 褐灰色微砂混粘性シルト (Fe粒多数混)
- 4. 褐灰色粘土質シルト (褐色粒混)
- 5. 褐灰色微砂
- 6. 灰色微砂混シルト質粘土 (褐色粒混)
- 7. 灰色粘土質シルト (やや淡色ざみ・褐色粒混・植物茎状のもの多数混)
- 8. 青灰色粘土 (褐色粒なし)
- 9. 灰色シルト質粘土 (暗灰色ざみ・7層よりは少ない褐色粒混・植物茎状のもの多数混)
- 10. 暗灰色粘土 (やや淡め)：遺物包含層
- 11. 灰色細砂：河川堆積層
- 12. オリーブ黒色シルト (植物遺体まじり)

第6図 土層模式図 (第8区・第9区・第10区) S=1/50

褐色～灰白細砂)より土師器片・須恵器片・弥生土器片が出土している。時期については、古墳時代後期以降の自然流路と考えられる。

以下、地表下2.7m～3.1m (T.P.+6.2m～5.8m)が河川堆積層となり、上層の暗灰色小レキ混シルト質細砂層直上より、V様式系甕の底部片1点や土器碎片2点が出土している。これら出土遺物から、庄内式期の自然流路になる可能性が高い。

[第8区]
(第6図参照)

第3区のほぼ真西約70mに位置する調査区である。現地表面は、休畑地となっており、レベル高T.P.+8.7mを測る。そして、層厚約0.5mの盛土層直下に、畝状の高まりを検出している。

以下は、河川堆積層が、互層に砂層と粘土層を挟みながら、続いている。まず、地表下1.15m～1.4m (T.P.+7.55m～7.3m)の淡褐灰色微砂からは、須恵器杯B底部片が1点のみ出土している。次に、地表下1.7m～2.1m (T.P.+7.0m～6.6m)の灰白色細砂には須恵器片・土師器片が出土している。そして、地表下2.35m～3.1m (T.P.+6.35m～5.6m)の灰色粗砂よりV様式系甕の体部片が出土している。それぞれの時期については、上層から、中世、古墳時代後期以降、庄内式期の河川堆積層(洪水砂)であると考えられる。

[第9区]
(第6図参照)

第8区の南約30mに位置する調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.6mを測る。

地表下0.7m～0.9m (T.P.+7.9m～7.7m)の暗褐色粗砂直下の地表下0.9m (T.P.+7.7m)の灰色粘性シルトにおいて東西方向の鋤溝を検出している。鋤溝からは、土師器細片が少量出土している。時期については、中世以降に洪水によって埋もれた耕作面と考えられる。そして、このベース層に少量の土師器細片・須恵器坏身小片が含まれていた。

以下、地表下1.25m～1.9m (T.P.+7.35m～6.7m)までの河川堆積層(明褐色粗砂・灰白色粗砂)から土師器片・須恵器片・布留式甕片などが多数出土している。

そして、地表下2.25m～3.0m (T.P.+6.35m～5.6m)において、庄内式期の河川堆積層と考えられる暗灰色シルト混粗砂～灰色粗砂・黄褐色細砂を確認している。この河川堆積層の上層より庄内式甕(11)と二重口縁壺(12)のそれぞれ口縁部が出土している。

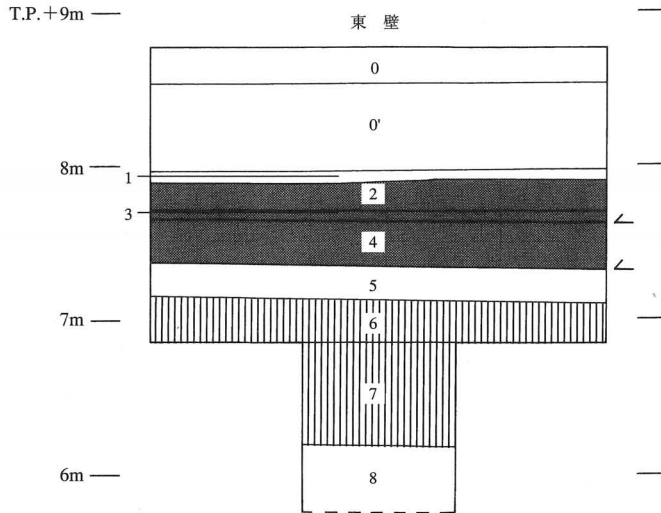
[第10区]
(第6図参照)

本事業地内の南半部ほぼ中央の調査区で、(財)八尾市文化財調査研究会の久宝寺遺跡第11次調査([西村1992])の北側約30mに位置している。現地表面は、更地となっており、レベル高T.P.+9.05mを測る。地表下1.2m (T.P.+7.85m)まではアスファルト等を含む盛土層であった。

地表下1.35m～1.45m (T.P.+7.7m～7.6m)の褐色微砂が褐灰色微砂混粘性シルトの直上に堆積していた。この洪水砂の時期については不明である。

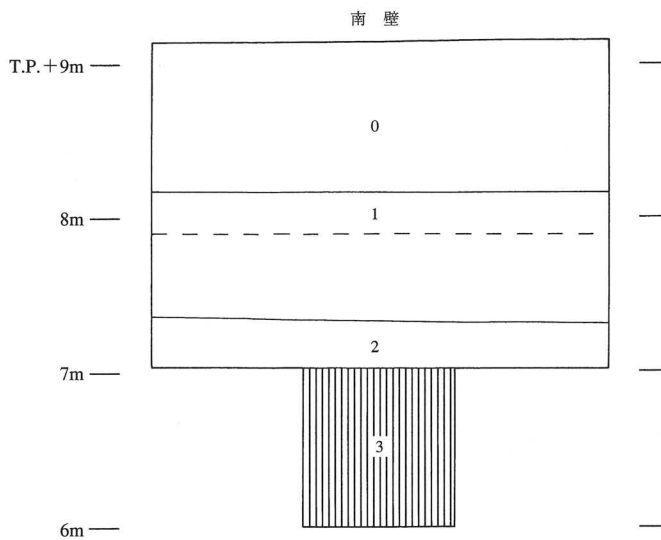
そして、地表下1.35mから2.3mの間 (T.P.+7.7m～6.75m)は、褐灰色～灰色シルト質粘土が続き、おそらく近世から中世にかけての水田面になると考えられる。遺物はほとんど出土していないが、土師皿・土師器・須恵器(杯蓋・甕)の破片がわずかに出土している。さらに、地表下2.05m (T.P.+7.0m)の灰色粘土直上の褐色粗砂(東壁側にのみ存在)において、奈良時代ごろの製塩土器の細片が1点出土している。

[第11区]



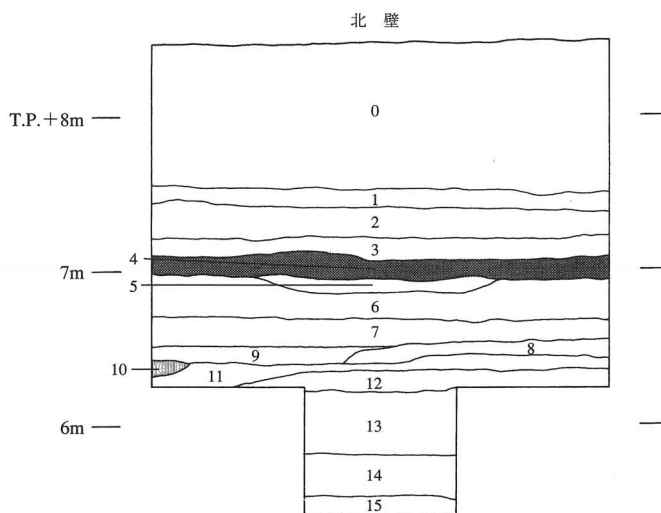
- 0. 耕土 (黄褐色細砂)
- 0'. 盛土
- 1. 暗青灰色粘砂
- 2. 青灰色粘質土：中世～近世遺物包含層
- 3. 褐色～暗褐色シルト質粘土：奈良時代遺物包含層
- 4. 茶褐色シルト混粘質土：奈良時代遺構面および古墳時代後期遺物包含層
- 5. 褐色シルト質粘土：古墳時代後期遺構面
- 6. 灰白色細砂
- 7. 灰白色砂レキ～粗砂
：6・7層・河川堆積層
- 8. 暗緑灰色シルト質粘土 (植物遺体まじり)

[第12区]



- 0. 盛土
- 1. 褐色粘質土 (攪乱のために層位不明)
- 2. 灰褐色シルト質土
- 3. 灰色粗砂 (互層状にシルトをはさむ)：河川堆積層

[第13区]



- 0. 盛土
- 1. 暗灰色粘性シルト (しまりなし)
- 2. 緑灰色シルト質土
- 3. 青灰色シルト質土 (褐色土混)
- 4. 褐色シルト質粘土：遺物包含層
- 5. 暗褐色シルト質粘土
- 6. 灰褐色シルト質粘土 (ややしまりなし)
- 7. 灰色粘土 (褐色粒混)
- 8. 灰褐色微砂混シルト
- 9. 灰色粘性シルト (しまりなし)
- 10. 褐灰色微砂：河川堆積層
- 11. 青灰色粘土 (褐色粒混)
- 12. 緑灰色シルト質粘土
- 13. 緑灰色粘土質シルト (白色粒混)
- 14. 灰色粘土質シルト (植物遺体まじり)
- 15. 青灰色微砂混シルト

第7図 土層模式図 (第11区・第12区・第13区) S=1/50

地表下2.3m～2.45m (T.P.+6.75m～6.6m：層厚約0.15m) の暗灰色粘土より、須恵器甕片2点・土師器片3点が出土している。時期については、古墳時代後期頃であると考えられる。

以下、地表下2.45m～3.1m (T.P.+6.6m～5.95m) に河川堆積層 (灰色細砂) があるものの、遺物は出土しておらず、時期については不明である。

[第11区]
(第7図参照)

本事業地南半部西端の調査区で、第10区の西側約170 mのほぼ一直線上に位置する。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.78mを測る。地表下0.8m前後 (T.P.+8.0m) まで盛土層が続く。

地表下0.9m～1.05m (T.P.+7.88m～7.73m) の青灰色粘質土中に土師器・須恵器の破片が多数含まれている。この層は、奈良時代から近世にかけての遺物包含層である。さらに、地表下1.05m～1.15m (T.P.+7.73m～7.63m：層厚約0.1m) の褐色～暗褐色シルト質粘土にも奈良時代の遺物が含まれている。

そして、地表下1.15m (T.P.+7.63m) の茶褐色シルト混粘質土をベースとして、奈良時代の遺構面を検出した。同一遺構面に近世～中世の鋤溝やピット等があるものの、奈良時代を中心とした土坑や溝、ピットなどの遺構をいくつかとらえることができた。特に調査区中央部から北側にかけて検出した大きさ約2.5m大の不定形の土坑 (S X 1 1 0 1) からは、土師器・鏝付甕・須恵器・製塩土器・瓦などがコンテナにして約3箱分出土している。この土坑は、調査区外の北側に広がっているものと考えられる。

そして、この奈良時代の遺構面となる茶褐色シルト混粘質土中には、古墳時代後期の須恵器・土師器が含まれており、地表下1.45m (T.P.+7.33m：層厚約0.3m) まで続く。そして、地表下1.45m (T.P.+7.33m) の褐色シルト質粘土をベースとして、古墳時代後期の遺構面を検出した。検出した遺構は、南北方向の溝一条である。この溝からは、須恵器甕の破片を中心として、須恵器杯蓋・杯身・土師器甕、その他に桃種などが出土している。

以下、地表下1.55m～2.6m (T.P.+7.23m～6.18m) の河川堆積層 (灰白色細砂～砂礫) より、弥生土器・庄内式土器・布留式土器など摩滅した土器片が多数出土している。これら出土遺物から、布留式期頃に堆積した自然流路であると考えられる。

[第12区]
(第7図参照)

第11区の真東約20mと近接した調査区である。現地表面は、果樹園として使用されており、レベル高T.P.+9.15mを測る。地表下1.8m前後 (T.P.+7.35m) までは、盛土層及び攪乱層で、第11区で確認した奈良時代の遺構面及び遺物包含層は削平されていた。地表下1.8m前後に、第11区古墳時代後期の遺構面に対応する層がわずかに確認でき、須恵器甕片が出土している。

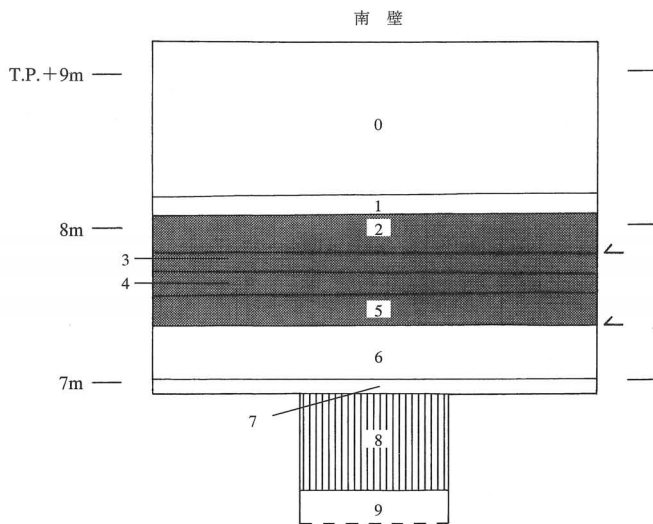
以下、地表下2.15m～3.2m (T.P.+7.0m～5.95m) において河川堆積層 (灰色粗砂) が続く。河床は確認できなかった。遺物は確認できなかったものの、これも第12区で確認した布留式期の河川堆積層に対応すると考えられる。

[第13区]
(第7図参照)

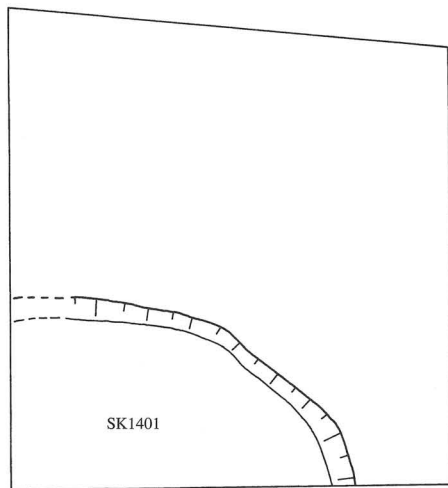
第1区の真西に約160mの調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+8.45mを測る。

地表下1.4m～1.55m (T.P.+7.05m～6.9m：層厚約0.15m) の褐色シルト質粘土より、円筒埴輪片 (V期) ・瓦・須恵器片 (杯B/甕/高杯) ・土師器片・砥石が出土

[第14区]



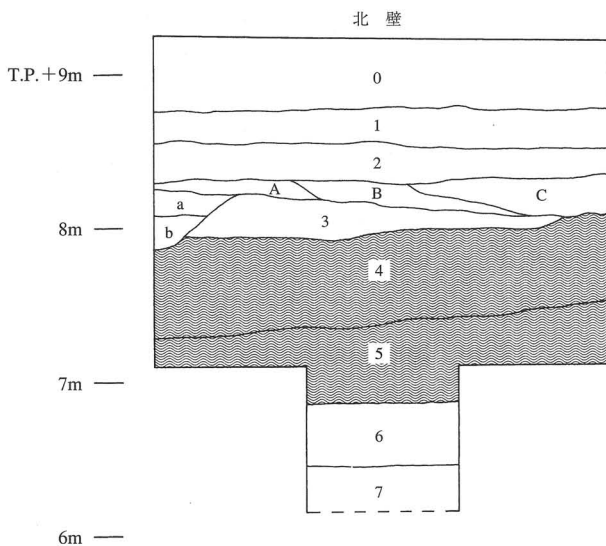
- 0. 盛土
- 1. 暗灰色シルト質土
- 2. 淡灰褐色粘質シルト (褐色粒混) : 中世遺物包含層
- 3. 黄褐色シルト混粘土 : 中世遺構面および奈良時代遺物包含層
- 4. 灰褐色粘質シルト (土壌化層)
- 5. 褐色粘質シルト
: 4・5層・古墳時代後期遺物包含層
- 6. 暗褐色シルト混粘質土 : 古墳時代後期遺構面
- 7. 灰色微砂混シルト (Fe粒混)
- 8. 灰色細砂~粗砂 : 河川堆積層
- 9. 暗灰色微砂混シルト (上層部に植物堆積)



<遺構平面図> S=1/50



[第15区]



- 0. 盛土 (耕土)
- 1. 淡茶褐色砂質土
- 2. 暗茶灰色小レキ混砂質土
- 3. 暗茶褐色微砂質土
- 4. 明黄灰色微砂
- 5. 淡褐色細砂
: 4・5層・河川堆積層
- 6. 灰色粘土質シルト (白色粒混・植物遺体少量まじる)
- 7. 灰色砂混粘土質シルト (白色粒混・植物遺体少量まじる)
- 溝1
 - A. 茶褐色粗砂混土
 - B. 灰褐色粗砂混土
 - C. 灰色微砂混粘質土 (褐色土混)
- 溝2
 - a. 淡灰褐色粗砂
 - b. 青灰色粗砂

第8図 土層模式図 (第14区・第15区) S=1/50

している。出土遺物から奈良時代頃の遺物包含層と考えられるが、明確な遺構は確認できなかった。しかし、この層から摩滅したV期の円筒埴輪片が出土していることから、古墳時代後期の古墳が周辺に存在していた可能性がある。周辺で該期の古墳が確認されていないことから、今後の調査でその痕跡等が明らかになることを期待したい。

以下、地表下2.1m (T.P.+6.35m)において、自然流路の東側肩部を確認した。そして、その河床を地表下2.35m (T.P.+6.1m)で確認している。検出した肩部の方向から、流路の向きは北東向きであったと考えられる。遺物は出土していないため、時期については不明である。

[第14区]
(第8図参照)

第11区の南約70mの調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+9.2mを測る。

地表下1.15m～1.4m (T.P.+8.05m～7.8m：層厚約0.25m)の淡灰褐色粘質シルトより、瓦器・須恵器・土師器・瓦の破片が出土しており、中世の遺物包含層と考えられる。そして、地表下1.4m (T.P.+7.8m)の黄褐色シルト混粘土をベースとして、遺構面となる。調査区西端で、溝(SD1401)の一部を検出している。出土遺物は、土師器皿細片や須恵器甕破片がある。

そして、この遺構面のベース層にも須恵器・土師器の破片が含まれており、地表下1.4m～1.5m (T.P.+7.8m～7.7m：層厚約0.1m)までが奈良時代の遺物包含層と考えられる。該期の遺構面は確認できなかったものの、何らかの遺構が周辺に存在すると考えられる。

さらに、この地表下1.5m～1.85m (T.P.+7.7m～7.35m：層厚約0.35m)の灰褐色～褐色粘質シルトが古墳時代後期の遺物包含層となり、須恵器を中心として、その他に土師器等が出土している。そして、地表下1.85m (T.P.+7.35m)の暗褐色シルト混粘質土が古墳時代後期の遺構面となり、調査区北側では、土坑状遺構(SK1401)の一部を検出している。出土遺物は、そのほとんどが須恵器で占められており、器種としては器台・甕・杯・高杯・甕などがある。その他に、鏝付甕(羽釜)・土師器高杯などがある。この古墳時代後期の遺構面は、第11区で検出した遺構面とほぼ同じレベル高(T.P.+7.3m前後)にある。

そして、この古墳時代後期のベース層には少量の土師器片(布留式甕細片)が含まれており、以下地表下2.3m～2.95m (T.P.+6.9m～6.25m)に布留式期の河川堆積層(灰色細砂～粗砂)が続く。この層からは、ローリングを受けた弥生土器、庄内式土器、布留式土器が出土している。出土遺物から、第6区・第11区で確認した河川堆積層と同時期のものと考えられる。

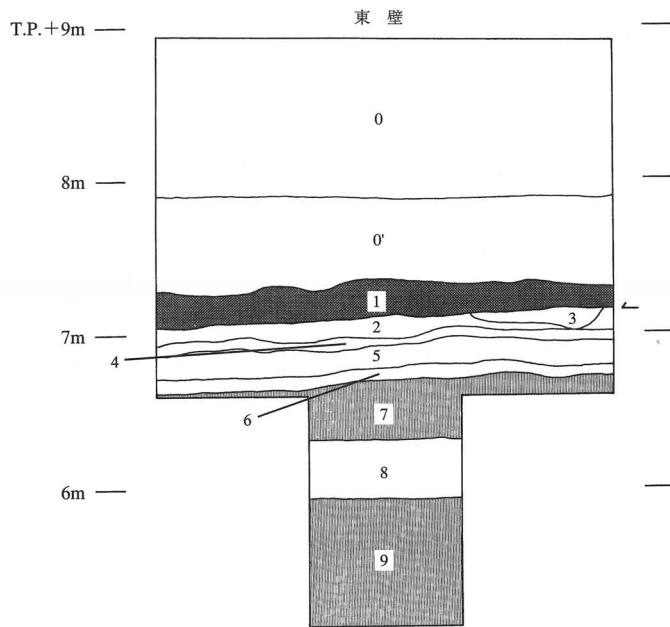
[第15区]
(第8図参照)

本事業地内中央部東端に位置し、第4区の南東約50mの調査区である。現地表面は、畑地として使用されており、レベル高T.P.+9.2mを測る。

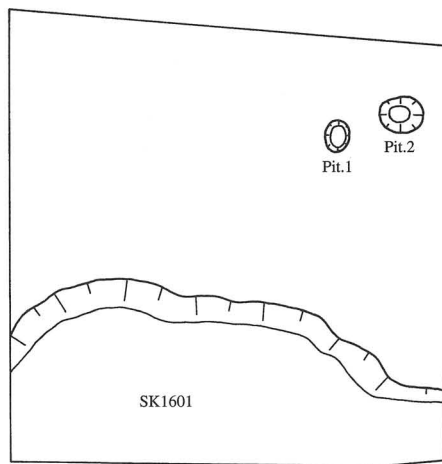
地表下0.9m (T.P.+8.3m)において、2時期の溝を確認しているが、出土遺物は少量で、時期については近世以降のものと考えられる。

地表下1.2m～2.4m (T.P.+8.0m～6.8m)が河川堆積層(明黄灰色微砂～淡褐色細砂)があり、ローリングを受けた須恵器・土師器・庄内式土器・V様式系甕・弥生土器の小片が出土している。時期については、古墳時代後期以降と考えられる。

[第16区]



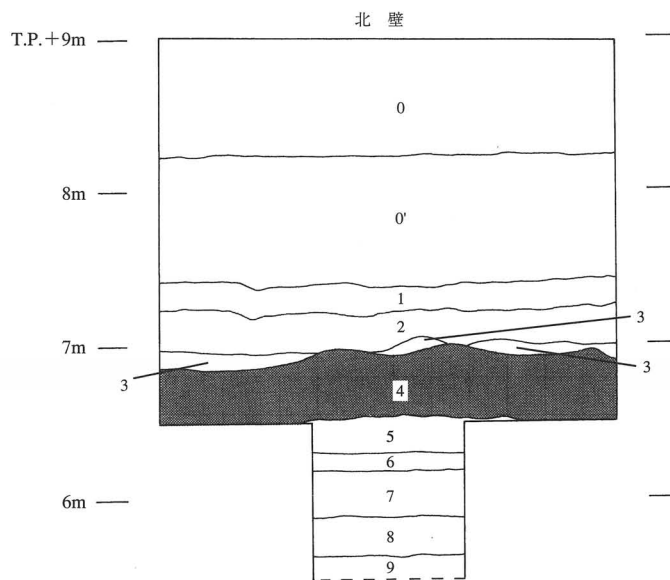
- 0. 盛土 I (褐色土)
- 0'. 盛土 II (青灰色粘砂 粘土ブロック少量まじる)
- 1. 淡茶褐色シルト質粘土：遺物包含層
- 2. 黄褐色シルト質粘土 (Fe混)
- 3. 褐灰色シルト質粘土 (Fe混)：SK1601埋土
- 4. 灰色シルト質粘土 (Fe多量混)
- 5. 淡灰色粘土 (Fe多量と炭混)
- 6. 灰色粘土 (Feと炭混)
- 7. 黄灰色～灰色微砂：河川堆積層
- 8. 暗灰色微砂混シルト (植物遺体まじり)
- 9. 灰色細砂～粗砂：河川堆積層



<遺構平面図> S=1/50



[第17区]



- 0. 盛土 I (暗褐色土)
- 0'. 盛土 II (暗青灰色粘砂)
- 1. 淡黄褐色粘質シルト (褐色粒少量混)
- 2. 褐灰色粘質土 (暗褐色粒多量に含む)
- 3. 灰色粘質シルト (黄褐色粒・Fe多量に含む)
- 4. 灰色粘土 (明褐色粒多量に含む)：遺物包含層
- 5. 灰色粘土 (炭化植物を含む)
- 6. 灰色微砂混粘土
- 7. 暗灰色粘土 (植物遺体まじり)
- 8. 暗灰色微砂混粘土質シルト (植物遺体まじり)
- 9. 灰色微砂混シルト

第9図 土層模式図 (第16区・第17区) S=1/50

【第16区】
(第9図参照)

第13区の真南約50mに位置する調査区である。現地表面は、果樹園として使用されており、レベル高T.P.+8.95mを測る。盛土・耕土層が地表下1.6m前後(T.P.+7.35m)まで続く。

盛土層直下の地表下1.6m～1.85m(T.P.+7.35m～7.1m:層厚約0.25m)の淡茶褐色シルト質粘土が遺物包含層となり、須恵器(甕・杯A/B・杯身・高杯など)・土師器・韓式土器・円筒埴輪・形象埴輪の破片が出土している。出土遺物から、第13区と同様の奈良時代頃までの遺物包含層と考えられる。そして、地表下1.85m(T.P.+7.1m)の黄褐色シルト質粘土が遺構面となり、落ち込み状遺構[SK1601]、ピット[Pit1・2]を検出している。

以下、地表下2.2m～2.6m(T.P.+6.75m～6.35m)に河川堆積層(黄灰色～灰色微砂)、さらに、その下層でも地表下3.0m～3.85m(T.P.+5.95m～5.1m)でも河川堆積層(灰色細砂～粗砂)が続く。いずれの層も時期を特定できる遺物は出土せず、微量の土器細片があるのみである。

検出した遺構は、黄褐色シルト質粘土上面で検出したもので、出土遺物はわずかであるが、遺物包含層の時期から古墳時代後期～奈良時代のものと考えられる。

[SK1601]:調査区南端で検出した。検出長東西2.8m・南北1.2mの不定形の土坑で、深さ0.1mを測る。調査区外南側に広がると考えられる。埋土は、褐灰色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

[Pit1]:検出した2基のピットのうちの、西側のピットで、直径約0.15m、深さ約0.25mを測る。埋土は暗灰色シルト質粘土である。出土遺物は、土師器細片2点がある。

[Pit2]:検出した2基のピットのうちの、東側の皿状のピットで、直径約0.3m、深さ約0.04mを測る。埋土は暗灰色シルト質粘土である。出土遺物は、土師器細片2点がある。

【第17区】
(第9図参照)

第16区の真東約50mに位置する調査区である。現地表面は、第16区と同じ果樹園の敷地内で、ほぼ同じレベル高T.P.+9.0mを測る。盛土層が地表下1.6m(T.P.+7.4m)まで続く。

そして、地表下2.0m～2.5m(T.P.+7.0m～6.5m:層厚約0.5m)の灰色粘土(Fe粒混)から、奈良時代の須恵器(杯A/B・甕等)・土師器・把手付鍋の破片が出土している。第13区・第16区で検出した遺物包含層に対応すると考えられる。遺構等は確認できなかったものの、この遺物包含層直下の灰色粘土層が、炭化した藁等を含むことから該期の生産域である可能性が高い。

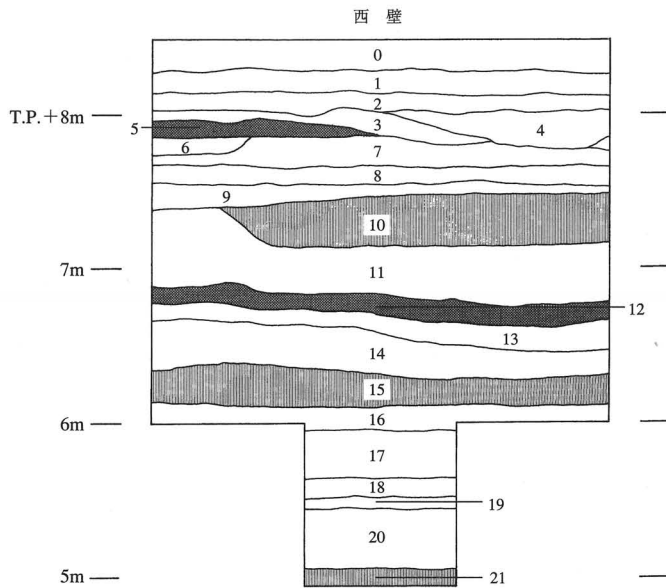
以下、地表下2.8m～3.1m(T.P.+6.2m～5.9m)の暗灰色粘土から、土器小片が2点ほど出土している。古墳時代前期のものと考えられるが、詳しい時期については、不明である。また、第13区・第16区で確認した下層の河川堆積層は確認できず、おそらくこの調査区は、自然流路の右岸部分に当たると考えられる。

【第18区】
(第10図参照)

第10区のほぼ真東約180mに位置する調査区である。現地表面は、水田として使用されており、レベル高T.P.+8.5mを測る。

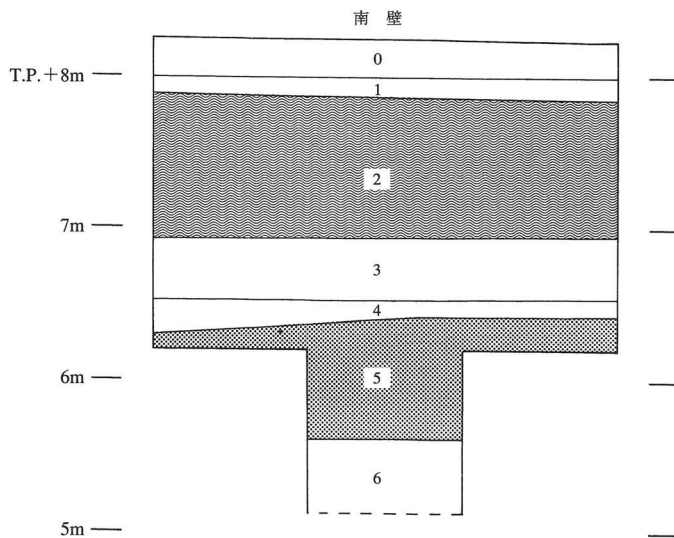
現水田面の直下、地表下0.5m(T.P.+8.0m)付近に近世の耕作等に伴う溝があり、中世の遺物包含層である地表下0.55m～0.65m(T.P.+7.95m～7.85m)の褐色シル

[第18区]



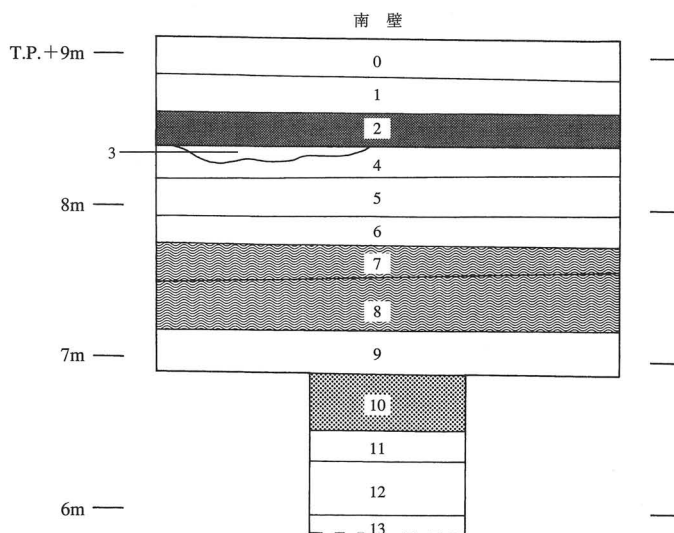
0. 耕土
1. 灰色粘質土 (褐色粒混)
2. 灰色粘質土 (1層よりは多い褐色粒混)
3. 黄褐色シルト混粘質土
4. 暗灰褐色粘質土：近世溝埋土
5. 褐色シルト混粘質土：遺物包含層
6. 灰色シルト混粘質土 (暗褐色粒混)：中世溝埋土
7. 灰褐色粘質シルト (明褐色粒混)：中世遺構面
8. 灰色シルト混微砂 (褐色粒混)
9. 灰色微砂混粘性シルト
10. 灰白色粗砂：河川堆積層
11. オリーブ灰色シルト混粘土 (白色粒混)
12. 暗灰色シルト混粘土：遺物包含層
13. 灰色粘土
14. 灰色シルトと微砂の互層
15. 灰色細砂～粗砂：河川堆積層
16. 暗オリーブ灰色粘質シルト (植物遺体まじり)
17. オリーブ灰色 (白色粒混)
18. 灰色粘土
19. 暗灰色粘土
20. 緑灰色粘土
21. 灰色細砂：河川堆積層

[第19区]



0. 耕土 (黒灰色粘砂)
1. 青灰色砂質土
2. 黄褐色粗砂：河川堆積層
3. 灰色シルト混粘土 (白色粒少量混)
4. 灰色砂混粘土 (やや明るめ)
5. 灰色細砂：河川堆積層
6. 暗灰色シルト質粘土 (植物遺体まじり)

[第20区]



0. 耕土
1. 褐色小レキ混砂質土
2. 茶褐色砂混粘質土：中世遺物包含層
3. 褐色粘質土：溝埋土
4. 淡茶褐色砂質土：中世遺構面
5. 褐色微砂質土
6. 褐灰色微砂混粘性シルト
7. 灰色シルトと細砂の互層
8. 灰白色粗砂
：7・8層・河川堆積層
9. 暗青灰色粘土質シルト
10. 灰色微砂 (ややしまりあり)：河川堆積層
11. 灰色シルト混粘土 (植物遺体まじり)
12. 暗灰色シルト混粘土 (植物遺体多数まじる)
13. 緑灰色粘質シルト

第10図 土層模式図 (第18区・第19区・第20区) S=1/50

ト混粘質土を一部削平している。そして、地表下0.65m (T.P.+7.85m) の灰褐色粘質シルトにおいて、溝1条を調査区南西部コーナー部の断面にて確認している。ここからは、黒色土器の底部が2点出土している。時期については、平安時代末の遺構となる可能性が高い。

地表下1.05m～1.35m (T.P.+7.45m～7.15m) 付近において、南東－北西方向の自然流路(灰白色粗砂)の肩部の一部を確認している。出土遺物は、土師器細片と加工痕を残した杭先がある。時期については、中世ごろの河川と考えられる。

そして、地表下1.65m～1.8m (T.P.+6.85m～6.7m:層厚約0.15m)の暗灰色シルト混粘土から須恵器・土師器片・挽物皿(木製皿)が出土している。挽物皿の時期から、奈良時代の遺物包含層になる可能性が高い。

以下、地表下2.2m～2.4m (T.P.+6.3m～6.1m)、地表下3.45m前後 (T.P.+5.05m)において河川堆積層(灰色細砂～粗砂・灰色細砂)があるものの、時期を特定できる遺物は出土していないため、それぞれ時期については不明である。

[第19区]

(第10図参照)

第9区の南約80mに位置する調査区である。現地表面は水田として使用されており、レベル高T.P.+8.25mを測る。

現耕土面直下、地表下0.4m (T.P.+7.85m)から河川堆積層(黄褐色粗砂)が続き、地表下1.4m (T.P.+6.85m)で河床を確認している。この河川堆積層からも、ローリングを受けた須恵器・布留式土器・庄内式土器・弥生土器の破片が多数出土している。これら出土遺物から、第2区で検出した河川堆積層に対応すると考えられ、第19区から第2区に向かって流れる自然流路を想定できよう。

以下、地表下1.85m (T.P.+6.4m)の暗灰色細砂から土師器・弥生土器の細片が出土している。出土遺物から、庄内式期の自然流路であると考えられる。そして、この河床を地表下2.65m (T.P.+5.6m)で確認している。さらに、この河床となる暗灰色シルト質粘土には、杭がささっていた。この杭がこの自然河川に伴うものであるなら、河川の利用を考える上で興味深い資料となろう。

[第20区]

(第10図参照)

第18区の真東約120mに位置する調査区である。現地表面は、水田として使用されており、レベル高T.P.+9.1mを測る。

現耕土面以下、地表下0.45m～0.7m (T.P.+8.65m～8.4m:層厚約0.25m)の茶褐色砂混粘質土から、瓦器・土師器の破片が出土している。そして、地表下0.7m (T.P.+8.4m)の淡茶褐色砂質土が遺構面となる。調査区内では、顕著な遺構は確認できず、南壁土層においてのみ溝状の遺構を確認しており、出土遺物には土師皿が出土している。これら出土遺物から中世から近世にかけての遺構面と考えられる。

また、今回設定した調査区に接する南側でこの遺構面に対応するほぼ同じレベル高で、近世の井戸を1基確認している。この井戸からは、土器に混じって、一石五輪塔が出土している。さらに、井戸枠に使用されていた可能性のある瓦がコンテナにして約4箱出土している。この瓦は、この井戸の時期の遺物ではなく、凸面に縄目のついた平瓦で、「渋川廃寺」の瓦を後世に転用した可能性がある。

以下、地表下1.45m～1.95m (T.P.+7.65m～7.15m)の河川堆積層(灰色シルトと細砂の互層・灰白色粗砂)が、先述の井戸の湧水層となる。この層からは、土師器小片・須恵器小片・弥生土器が出土していることから、古墳時代後期ごろの自然

流路と考えられる。

さらに、上記の河川堆積層の河床直下の地表下2.2m～2.6m (T.P.+6.9m～6.5m) にも河川堆積層 (灰色細砂) があり、土師器小片4点が出土している。そして、地表下2.8m～3.1m (T.P.+6.3m～6.0m) の暗灰色シルト混粘土より植物遺体に混じって土師器小片が4点出土している。古墳時代前期以前のものと考えられるが、それほど密ではなかった。

5. 出土遺物 (第11・12図)

第1区～第20区までの調査区の中で、特に顕著な遺構・遺物が確認できたのは、奈良時代の遺構を中心とした第11区と古墳時代後期の遺構を検出した第11区・第14区と第20区調査時に出土した平瓦を伴う井戸であるが、その内容等については後日その検討も含めて報告を行いたい。今回、図化できた出土遺物は、第5区～第20区の中で、35点ある。

土師器皿 (1～7) は、第5区の遺物で、水田面と考えられる地表下1.5 mの灰色粘土の出土である。(1～5) は椀型の土師皿、(6・7) は土師皿である。これらは、14～15世紀の遺物である。

土師器皿 (8) ・土師器小壺 (9) は、第6区の遺物で、奈良時代の遺物包含層である褐色粘質シルトの出土である。

V様式系甕底部 (10) は、第7区の遺物で、庄内式期の河川堆積層の暗灰色小レキ混シルト質細砂の出土である。脚台をもち、色調は暗褐色を呈す。

庄内式甕 (11) の口縁部と二重口縁壺 (12) の口縁部は、第9区の遺物で、第7区と同様に庄内式期の河川堆積層である暗灰色シルト混粗砂の出土である。2点ともやや摩滅している。(12) は、口縁がほぼ完周する。

土師器椀 (13) は、第10区の遺物で、中世の水田面と考えられる灰色シルト質粘土の出土である。

土師器杯 (14) ・須恵器皿 (15) は、第11区の遺物で、奈良時代の遺構の [S X 1 1 0 1] から出土した土器群の中の一部である。そして、庄内式甕 (16) ・布留傾向甕 (17) ・V様式系甕 (18) の口縁部は、同じく第11区の遺物で、3点とも布留式期の河川堆積層である灰色粗砂の出土である。

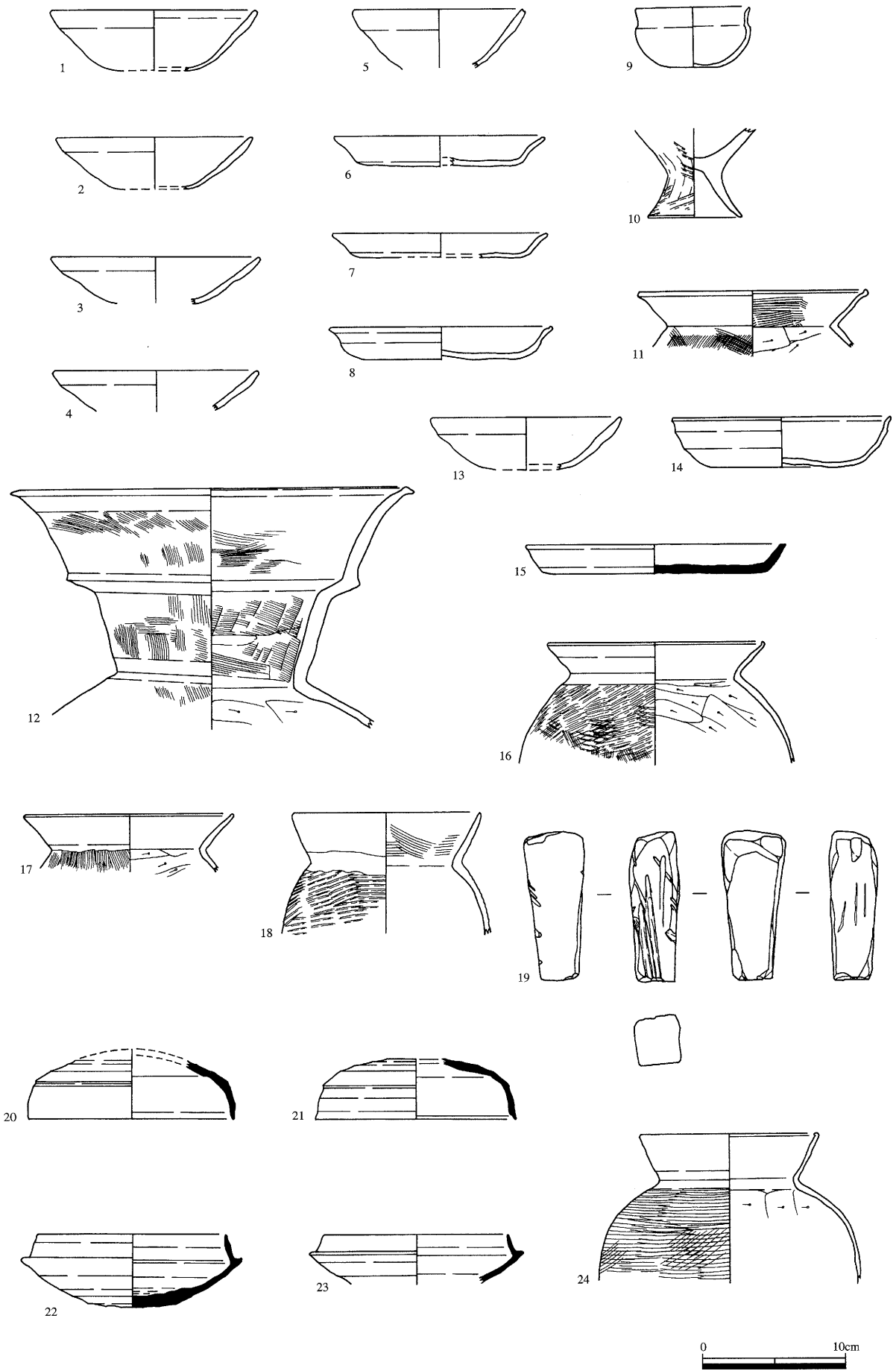
砥石 (19) は、第13区の遺物で、奈良時代の遺物包含層である褐色粘質土の出土である。4面及び先端部すべてを砥面として使用している。おそらく、玉類の製作に使用されたもので、古墳時代の遺物であると考えられる。

須恵器杯蓋類 (杯蓋：20・21, 杯身：22・23) は、第14区の遺物で、古墳時代後期の遺構である [S K 1 4 0 1] の出土土器の一部である。そして、布留式甕口縁～肩部 (24) ・器台 (25) ・高杯脚部 (26) は、同じく第14区の遺物で、布留式期の河川堆積層である灰色粗砂の出土である。

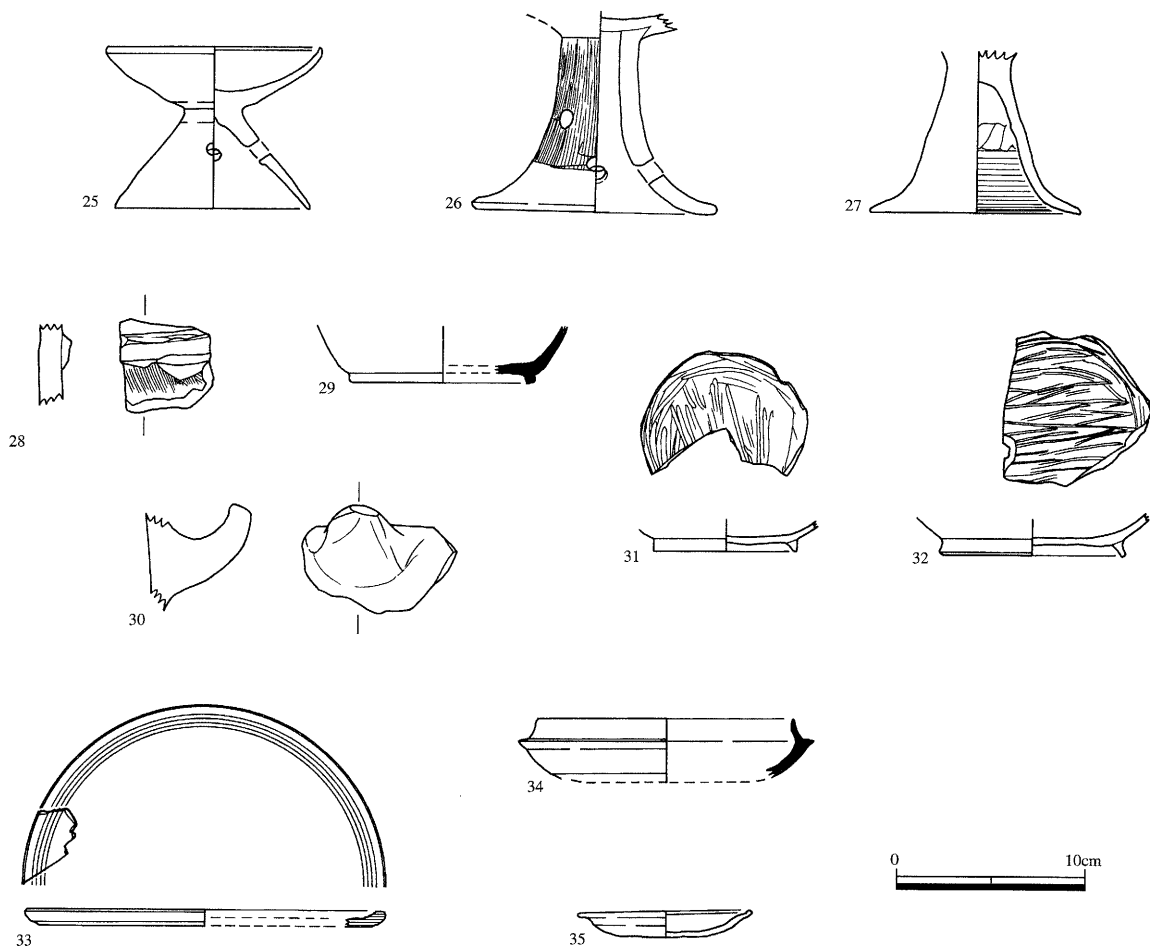
高杯脚部 (27) ・川西編年V期の円筒埴輪片 (28) は、第16区の遺物で、古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層である淡茶褐色シルト混粘土の出土である。

須恵器杯B底部片 (29) ・把手杯鍋の把手部分 (30) は、第17区の遺物で、奈良時代の遺物包含層である灰色粘土の出土である。

黒色土器底部 (31・32) は、第18区の遺物で、南壁土層断面において確認した平安時代の溝の遺物である。内面を一定方向のヘラミガキを施す。そして、木製食器



第11図 出土遺物実測図 (S=1/4)



第12図 出土遺物実測図 (S=1/4)

の挽物皿の破片(33)は、地表下1.7mの奈良時代の遺物包含層と考えられる暗灰色粘土からの出土である。

TK10型式の須恵器杯身の破片(34)は、第19区の遺物で、古墳時代後期～近世の河川堆積層である黄褐色粗砂の出土である。

「て」の字状口縁の土師皿(35)は、第20区の遺物で、地表下0.7 mで検出した中世の溝からの出土である。

6. 調査のまとめ 第1区～第20区までの試掘結果をもとに、南久宝寺地区内における弥生時代以降の各時期の概要について述べていくことにする。

[弥生時代]

顕著な遺構・遺物は確認できなかった。ただし、[第4区]・[第17区]・[第20区]の下層確認においてわずかに弥生土器小片を確認している。この時期に何らかの遺構等が存在していた可能性はあるものの、密な遺物包含層ではなく、遺跡の希薄な位置にあったと考えられる。あるいは、後世の洪水や自然流路の変化によって該期の遺構等が削平された結果であると考えられる。

しかし、今回の調査地北側で行われた(財)八尾市文化財調査研究会による発掘調査(岡田1997)においては、弥生時代後期末の遺構が検出されている。これら調査結果から、おそらく弥生時代後期に

は、集落域が北に広がっており、南域は、生産域もしくは集落の空白地であったと考えられる。

[弥生時代後期末～古墳時代前期（庄内式期～布留式期）]

弥生時代後期の遺構面の最上層に、庄内式期の遺構面が存在する可能性があったが、庄内式期の河川堆積層を確認するにとどまった。この河川堆積層を確認した調査区は、[第3区・5区・7区・8区・9区・19区・20区]である。今回の調査地内では、中央部東側の範囲にあたる。検出した河川堆積層の上面は、T.P.+6.0m前後にあり、その深さは0.4m～0.9mである。ただし、古墳時代後期以降の自然流路によって、河道が変えられた可能性があるため、その方向・幅等は不明である。おそらく、次代の河川と同様に南東～北西方向の河川であったと考えられる。

そして、布留式期においても、該期の遺構は確認できず、河川堆積層を確認したのみである。確認した調査区は、[第6区・11区・12区・14区]である。これらは、調査地内の南西部に位置している。河川堆積層の上面は、T.P.+7.0m前後にあり、その深さは0.6m～1.0mである。この河川堆積層と同様の時期の河川が、竜華操車場跡地内の調査（(財)大阪府文化財調査研究センター1996・八尾市教育委員会1997・(財)八尾市文化財調査研究会1997）でも確認されている。今回の調査で確認したのは、この河道の右岸部に当たる部分と考えられる。

[古墳時代後期～飛鳥時代]

古墳時代後期（6世紀前半）の遺構面は、[第11区・14区]で検出している。多数の遺物が遺構に伴って出土しており、調査地南域に集落域が広がっていると考えられる。T.P.+7.4m付近が遺構検出面となる。遺物包含層の層厚は、約0.35mある。また、[第10区]南東約30mにおける久宝寺遺跡第11次調査（西村1992）においても、該期の遺構面が検出されている。

古墳時代後期～飛鳥時代の遺物包含層・遺構面は、[第13区・16区・17区]で確認している。この周辺において、集落域及び生産域が存在していた可能性が高い。ほぼT.P.+7.0mにおいて、遺構面が存在しているようで、遺物包含層の層厚も約0.2m前後になる。出土遺物の中に、埴輪・砥石等が存在していることから、周辺に古墳時代後期の古墳が存在していた可能性もある。

今回の調査地南域では、古墳時代後期以後、前代までの不安定な河川堆積層に変わって、上層の安定した土地に遺跡が形成され始めたと考えられる。ただし、調査地北域の[第2～4区・7区～9区・15区・18区～20区]において確認した河床をT.P.+7.0m前後とする古墳時代後期以降の河川堆積層の存在から、今回の調査地内中央を南東から北西へと流れる河川が想定できる。（第13図 久宝寺遺跡南域流路想定図参照）。その幅は、少なくとも100m以上はある。

[奈良時代]

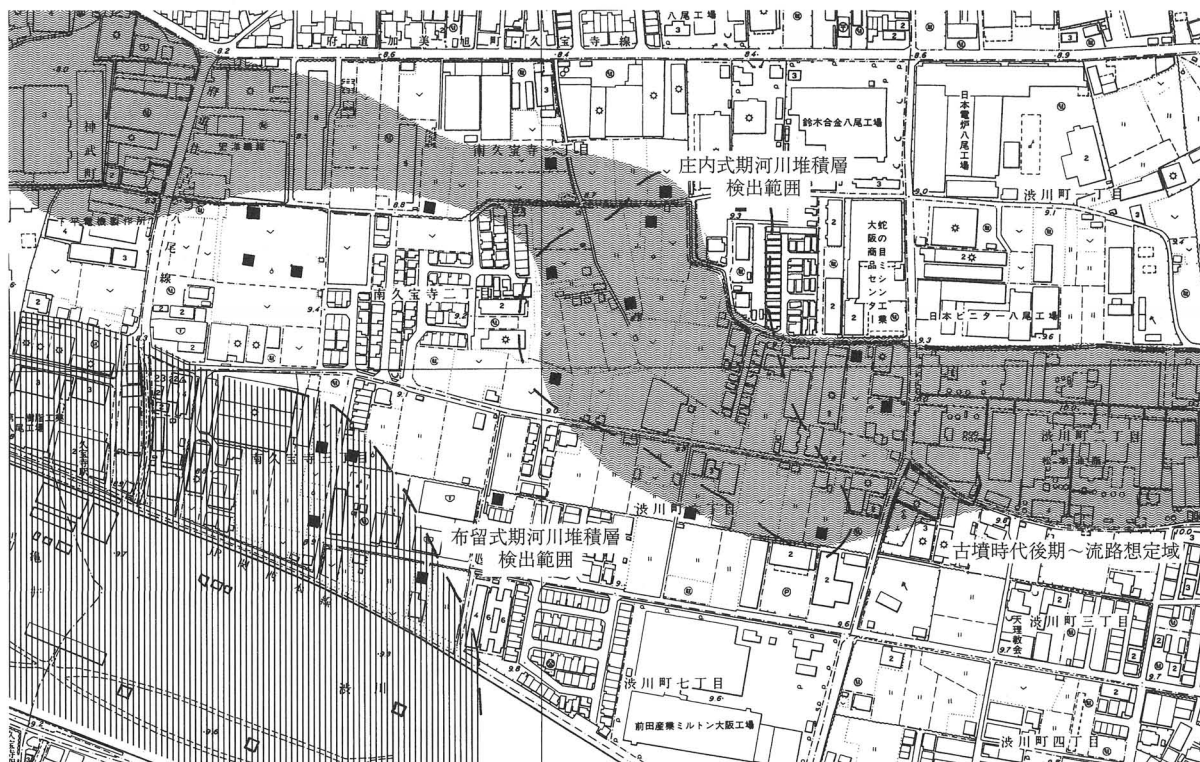
奈良時代の遺構面は、[第6区・11区・14区]で、検出している。古墳時代後期の遺構面と同様に南域に奈良時代の集落域が広がっていると考えられ、特に[第11区]では土坑状遺構から多数の土器が出土している。そして、旧耕土直下のT.P.+7.7m付近に遺構面が存在しており、遺物包含層の層厚は、約0.1～0.2mである。

また、[第10区]・[第18区]のT.P.+6.9m付近においても少量ではあるが、奈良時代の遺物（製塩土器・挽物皿）を含む層がある。

古墳時代後期に引き続き、該期の集落は、調査地南域を中心とする安定した土地に形成されていたと考えられ、おそらく調査地南東に位置する「渋川廃寺」の発展に関連して、集落が発展していったと考えられる。

[中世～近世]

中世～近世の遺構面は、[第11区・14区・18区・20区]のT.P.+7.8m前後（20区はT.P.+8.3m付近）に



第13図 久宝寺遺跡南域 流路想定図

において、確認している。南域において何らかの遺構が存在していると考えられる。特に、[第20区]では、「浪川廃寺」のものと考えられる平瓦の出土した近世の井戸を確認しており、寺院廃絶後の集落の変遷について貴重な資料となるだろう。

また、調査地中央部を流れる南西－北東方向の河川は、古墳時代後期以降においても、河道の基本的な方向を、変えていないと考えられる。

そして、近世以降、「久宝寺寺内町」の南側に位置する今回の調査地内では、そのほとんどが生産域（水田面）として利用され、現在に至ると考えられる。

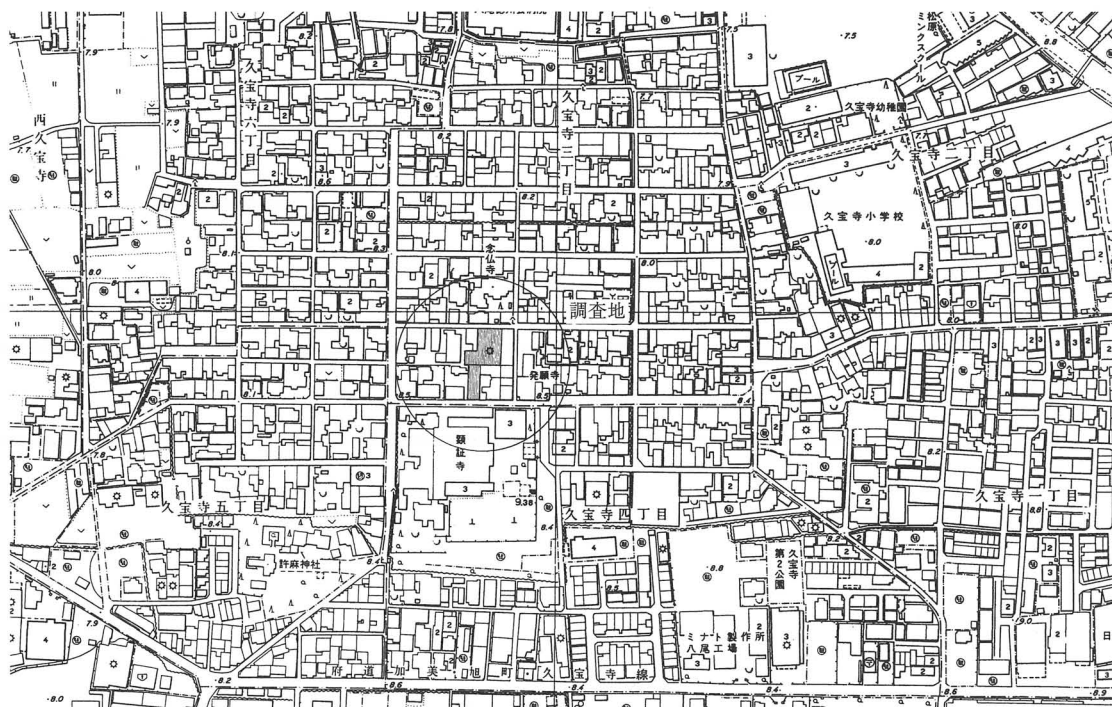
(藤井)

【参考文献】

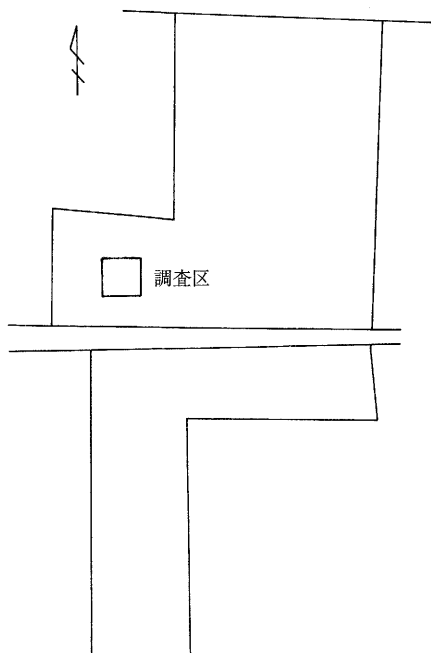
- 阪田育功 1984「河内平野における古墳時代前期集落の成立と変遷」『佐堂（その2）－I』
 1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』
 西村公助 1992「久宝寺遺跡第11次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』
 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告第3集』
 大野薫 1995「庄内式期遺跡群の立地に関する覚書」『庄内式土器研究X』
 (財)大阪府埋蔵文化財調査研究センター 1996『久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書』
 岡田清一 1997「久宝寺遺跡第17次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告55』
 八尾市教育委員会 1997『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ』
 (財)八尾市文化財調査研究会 1997『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

2. 久宝寺寺内町遺跡の調査（97-129）の調査

1. 調査地 久宝寺3丁目269-1他4筆
2. 調査期間 平成9年6月2日
3. 調査方法 久宝寺寺内町は戦国時代末期に浄土真宗寺院である久宝寺御坊顕証寺を中心に作られた町であり、堀や土塁による防御機能をもっていた。今回その中心である顕正寺の南側道路をはさんだ対面に（仮称）町なみセンターが建設されることになり、事前の遺構確認調査を行った。調査区は約3m×3mで設定し、人力と機械を用いて地表下3m前後まで確認した。
4. 調査概要 調査は、地表下3.2mまでの土層を確認した。このうち遺構のベースとなる土層を中心に基本となる層序について述べる。
 - I層 表土（層厚13cm）…盛土と攪乱であり、T.P +8.88mを測る。
 - II層 淡黄褐色微砂質土（層厚14cm）…ガラスや炭の混じる掘り込みがみられる。
 - III層 淡オリーブ灰色微砂質土（層厚25cm前後）…第1遺構面の包含層であり、陶磁器片が出土する。
 - IV層 淡オリーブ灰色粘砂（層厚45cm）…第1遺構面のベースであり、第2遺構面の包含層となる。瓦や陶器、へそ皿が出土する。
 - V層 淡灰黄色粘質シルト（層厚50cm）…層中にマンガンを含む。第2遺構面のベースあり、第3遺構面の包含層となる。瓦、須恵器、土師器などが出土する。
 - VI層 淡灰色砂粒混粘砂（層厚33cm）…第3遺構面のベースである。
 - VII層 灰褐色砂質土（層厚18cm）…平瓦が出土しており、整地層の可能性はある。
 - VIII層 褐灰色粘砂+灰白色細砂（層厚50cm）…細砂がラミナ状に含まれる。



第14図 調査地周辺図（1/5000）



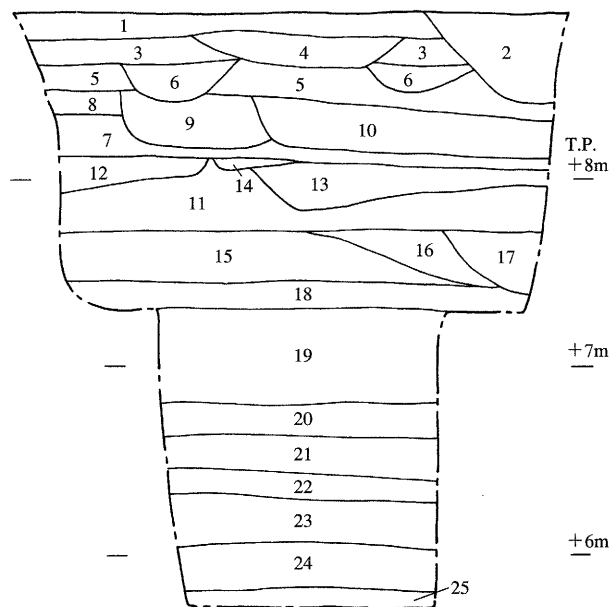
第15図 調査位置図 (1/600)

- IX層 青灰色粘質土 (層厚16~23cm)
- X層 青灰色粘土 (層厚20cm) ・ ・ マンガンを含む。
- XI層 暗青灰色粘土 (層厚13cm)
- XII層 暗灰色微砂シルト (層厚25~30cm) ・ ・ 土師器及び須恵器片を含む古墳時代中期~後期の包含層
- XIII層 灰黒色粘土 (層厚23cm) ・ ・ 炭化物を含み、古墳時代遺構面となる可能性をもつ。
- XIV層 灰黒色粘砂 (層厚 8 cm以上)

5. 遺構・遺物について

近世の遺構面3面と整地層の可能性をもつ土層及び古墳時代の包含層を確認した。このうち、近世遺構面については上面より第1遺構面以下、2面・3面とした。

つぎに各遺構面の検出遺構と出土遺物については概要を述べてゆきたい。



第16図 西壁土層断面図 (1/40)

- 1. 表土 [I層]
- 2. 攪乱
- 3. 淡黄褐色微砂質土 [II層]
- 4. 淡褐色微砂+炭化物
- 5. 淡オリーブ灰色微砂質土 [III層]
- 6. 暗オリーブ灰色粘砂+炭化物
- 7. 淡オリーブ灰色粘砂 [IV層]
- 8. オリーブ灰色粘砂+炭化物 (土坑1-4)
- 9. 淡灰黄色粘砂 (土坑1-2)
- 10. 淡オリーブ灰色粘質土+炭化物 (土坑1-1)
- 11. 淡灰黄色粘質シルト+Mg [V層]
- 12. オリーブ灰色砂粒混粘質土+焼け土 (土坑2-3)
- 13. 灰色粘砂+焼け土 (土坑?)
- 14. 灰色粘砂 (土坑2-1)
- 15. 淡灰色砂粒混粘砂 [VI層]
- 16. 茶褐色灰色粘砂 (土坑3-1)
- 17. 淡灰色粘質土+Mg (土坑3-3)
- 18. 灰褐色砂質土 [VII層]
- 19. 褐色灰色粘砂+灰白色細砂 [VIII層]
- 20. 青灰色粘質土 [IX層]
- 21. 青灰色粘土+Mg [X層]
- 22. 暗青灰色粘土 [XI層]
- 23. 暗灰色微砂シルト [XII層]
- 24. 灰黒色粘土+炭化物 [XIII層]
- 25. 灰黒色粘砂 [XIV層]

第1遺構面

地表下0.42m (T.P.+8.46m) の淡オリーブ灰色粘砂をベースとし、土坑6基とピット1基を検出した。

土坑1-1 調査区の北西で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑である。調査区外にのびるが、検出部分では南北辺1.35m、東西辺は1.05mで、深さ0.26mを測り、埋土は炭化物を含む淡オリーブ灰色粘質土である。埋土より1丹波系の徳利、2伊万里のコンニャク判による菊丸文の碗、3瓦質の火燈などが出土している。

土坑1-2 土坑1-1に北辺を切られているが、東西に長い楕円形を呈するとみられる。検出長辺1.06m、短辺0.7m以上、深さ0.28mを測る。埋土は淡灰黄色粘砂で4肥前系の碗や5伊万里青磁の香炉、6土師質の火鉢、瓦などが出土している。

土坑1-3 土坑1-2 に西端を切られている東西に長い楕円形を呈している。検出長辺は1 m、短辺は0.4m、深さ0.18mを測る。埋土は淡灰色班淡オリブ灰色粘質土で、平瓦片、すり鉢片、土師器片が出土している。

土坑1-4 南西隅で検出した。南側を土坑1-2 に切られており、大半が調査区外にのびるため全容は不明である。炭化物を含むオリブ灰色粘砂を埋土とし、7刷毛目碗、8・9土師質埴焙、10丸瓦片の他に軒丸瓦片などが出土している。

土坑1-5 南壁中央部分で検出した。一部、土坑1-3 に切られており、調査区外にのびるが、南北に長い楕円形を呈する。検出長辺0.6m、短辺0.47m、深さ0.2mを測る。埋土は淡灰黄色粘砂混灰色粘質土で、遺物は出土していない。

土坑1-6 南東付近で検出した不定形を呈する土坑で、大半が調査区外にのびる。検出長辺1.43m、短辺0.58m、深さ15cmである。埋土は淡灰色粘質土で、肥前系とみられる陶磁器の碗や鉢・重小鉢（11～22）や土師質羽釜23が出土している。

ピット1 調査区中央で検出した円形を呈する。長径0.42m、短径0.28mで深さ0.04mを測る。埋土は淡灰黄色粘砂で、遺物は出土していない。

また、包含層からは24のコンニャク判による菊文の伊万里碗などの陶磁器や27堺すり鉢、28土師質の五徳などが出土している。

第2 遺構面

地表下0.78m (T.P +8.10m) の淡灰黄色粘質シルトをベースとするが、一部に赤褐色の焼土が見られた。検出遺構は土坑3基である。包含層からは29小振りの巴文の軒丸瓦や30肥前系の碗、32丸瓦に混じって31埴輪片が見つかった。また図化していないが土師器へそ皿の口縁部と思われる部位もあった。こうしたことから、この層は整地層と推定される。

土坑2-1 調査区西側中央部で検出したが、土坑2-3 に一部を切られており、また調査区外にのびるため全容は不明だが、楕円形を呈するとみられる。検出長径は0.46mで、深さ0.06mを測る。埋土は灰色粘砂で、陶器片、瓦片が出土している。

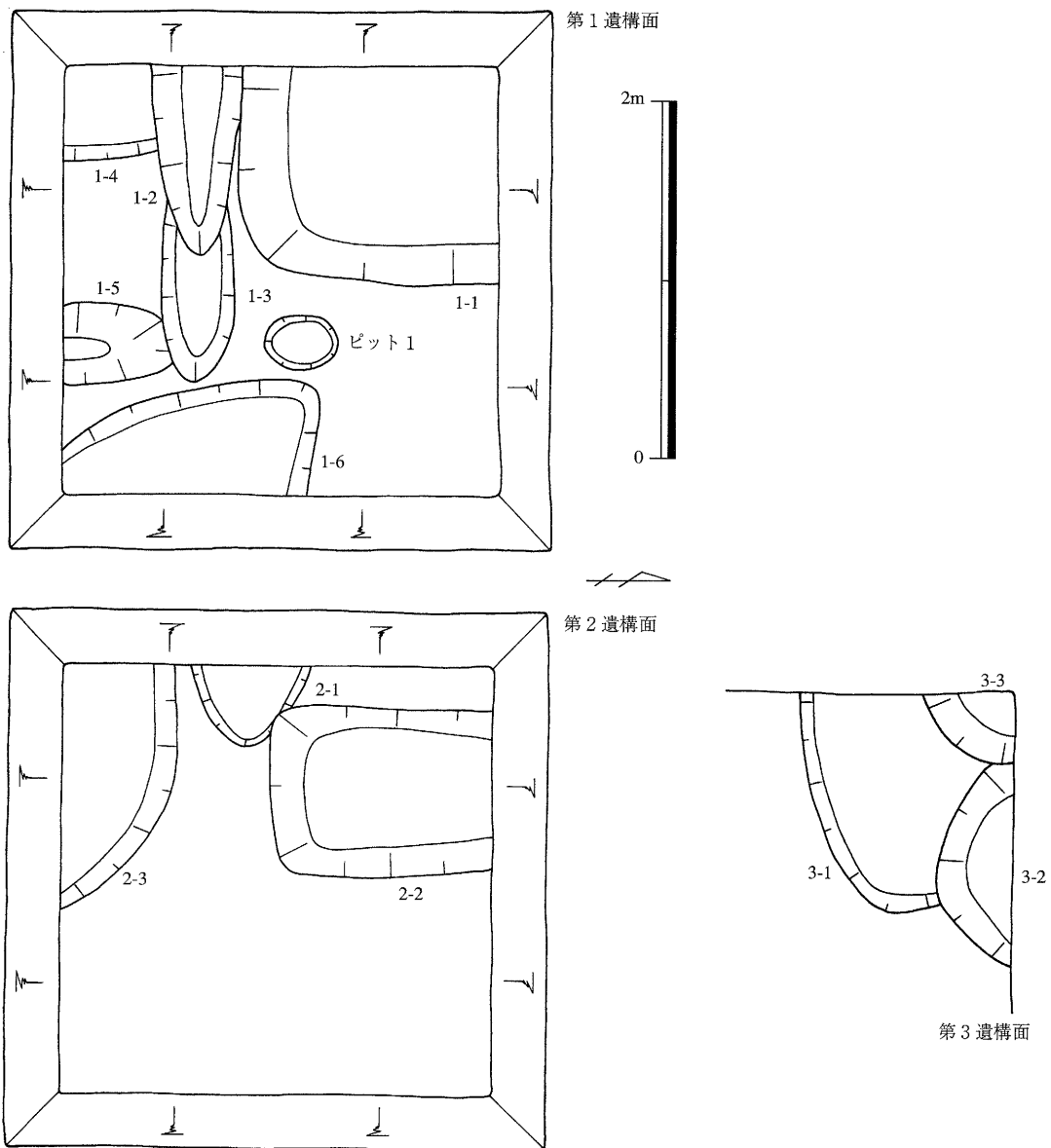
土坑2-2 調査区の南西部分で検出した。大半が調査区外にのびるため全容は不明であるが、円形に近い形態を呈するものとみられる。深さ0.2mを測り、埋土は暗灰色粘質土で、平瓦（凸面－縄目タタキ、凹面－布目ナデ消し）・（凸面－ナデ、凹面－粗い布目ナデ消し）や陶器片、土師質埴焙片が出土している。

土坑2-3 調査区北部分で検出した。一部調査区外にのびるが、隅丸長方形を呈するとみられ、検出長辺1.25m、短辺0.97m、深さ0.18mを測る。埋土は焼土を含むオリブ灰色砂粒混粘質土で、丸瓦、平瓦、練り鉢、へそ皿片が出土している。

また、平面では検出できなかったが、西壁断面で土坑と推定される13層を確認した。埋土は焼土を含む灰色粘砂である。

第3 遺構面

地表下約1.2 m (T.P+7.68m) の淡灰色砂粒混粘砂をベースとする。検出遺構は



第17図 遺構平面図 (1/40)

土坑3基である。これらはすべて調査区北西隅にかたまっている。

土坑3-1

不整円形あるいは隅丸方形を呈すると思われるが、調査区外にのびるうえに、土坑3-1と3-2に切られているため全容は不明である。深さは約0.3mを測り、埋土は茶褐灰色粘砂である。33備前の有耳壺や34三巴文軒丸瓦、35・36 燻し丸瓦、37 淡灰褐色を呈する丸瓦、38～40平瓦などが出土している。

土坑3-2

不整円形を呈すると思われるが、大半が調査区外にのびるため全容は不明である。遺構は土坑3-1を切っており、また、土坑3-3に一部を切られている。深さは約0.15mで、埋土は淡灰色粘質土である。41円形の透かしをもつ瓦質の火鉢や42平瓦、43燻し丸瓦、44雁振瓦などが出土している。

土坑3-3

調査区北西角にあり、大半が調査区外にのびる。不整円形を呈するとみられる

が、全容は不明である。深さは約0.33mを測り、埋土はマグネシウムを含む淡灰色粘質土である。陶器片や道具瓦片などが出土している。

この第3遺構面のベースとなっている淡灰色砂粒混粘砂層からは瓦片や須恵器片、土師器皿口縁の細片などが出土しており、整地層の可能性をもつ。

古墳時代包含層

地表下約2.6m (T.P +6.3m) の21層暗灰色微砂シルト中から土師器及び須恵器が細片ではあるが見つかっており、古墳時代包含層と考えられる。また下部層である21層灰黒色粘土には炭化物が含まれている状況を確認した。こうしたことから21層上面あるいは22の灰黒色粘砂が遺構面となることが推定される。

4. 遺構の時期について

第1遺構面では陶磁器が日常生活で普通に使用されている。なかでも最も多くの遺物が出土した土坑1-6は15のよろけ縞文の伊万里などがみられるが、大半はそれよりも新しいものであり、18世紀後半から明治にかけてのものとみられる。また、土坑1-1でもコンニャク印判による菊丸文や見込み五弁花を施した伊万里碗の存在などから18世紀中葉から後半、そして土坑1-4でも土師質の焙烙の形態から18世紀中葉頃と推定される。以上から第1遺構面は18世紀中頃以降の生活面と考えられる。

第2遺構面は整地されたと考えられる包含層中に1点だけ陶磁器片があったが、これ以外は確認できなかった。検出遺構から凶化できる遺物はないが、瓦、陶器の甕片やねり鉢片、土師器へそ皿と思われる細片が出土している。これらから下限は陶磁器の流通が活発になる17世紀後半以前であることが推定される。そして上限は、備前焼と思われる陶器の存在から、その日常雑器が広く流通する15世紀末と推定される。すなわち、第2遺構面の時期は16世紀～17世紀前半と考えられるのである。また、焼け土の存在からも時期を追っていきたいが、それはまともに譲りたい。

第3遺構面からは瓦類の他に瓦質火鉢と備前の有耳壺が出土している。瓦は焼成の異なる2種類のものがみられ、燻された暗灰色を呈するものと暗茶褐色～淡灰褐色を呈するものがある。軒丸瓦の外縁は幅が大きい、高さは低い。珠文は小さく、約26個と推定され、珠文帯の外側圏線はみられない等の特徴から室町時代後期以降のものと考えられる。また、備前焼の四耳壺は15世紀後半以降に出現し、また口縁が玉縁状ではなく、直立させた中型壺もこの段階に出現するとされている。土坑3-1で出土した有耳壺もその造りの丁寧さから、これを大きく下がることはないと考えられ、15世紀末から16世紀前半に置くことができよう。時期を推定する材料は少ないが、現状での出土遺物から16世紀前半を下限とするものとしておきたい。

最後に古墳時代の遺物包含層である23層についてであるが、これはT.P+6.3m前後から約0.25～0.3mの厚さで堆積しており、前述しているように土師器片と須恵器片が出土した。遺構面は下部のT.P+5.95m前後の24層上面とみられる。これまで周辺では幾度かの調査が実施されているが、とくに(財)八尾市文化財調査研究会による第8次及び17次調査ではT.P+6.0m前後で古墳時代前期の遺構を検出しており、調査地でも古墳時代前期まで溯る遺構が検出される可能性がある。

7. まとめ ここでは今回の成果を久宝寺寺内町の成立・発展との関係から考えてみたい。寺内町とは浄土真宗の寺院を中心とした村であり、周囲には堀や土居、木戸門を築く環濠的な防御機能を有していた。町内には商人や職人が居住し、寺院や住民は領主に対して緒役及び徳政令適用等の免除や安全保障などの寺院特権を要求し、宗教政策の下での自治的自立を目指した中世の都市である。

久宝寺寺内町の場合は慈願寺と顕証寺の2カ寺を中心に形成されていた。慈願寺についてはその前身となった道場に応永年間にはすでに真宗が伝えられていたことを示す文書が残されている。蓮如はここに多くの免物を下付しており、長禄二年(1458)には寺号を称していることから、拠点寺院としての位置づけがあったものといえる。ただし、慶長十一年(1606)に百姓森本氏他と下代安井氏との間に訴訟が起こり、これに敗れた森本氏に同調して慈願寺は八尾に移転している。

さらに蓮如は顕証寺の前身である西証寺を明応年間(1492~1500)に建立し、第二一子である実順を初代住職とした。次に実順の子供である実真が嗣ぐが、早世し、天文四年(1535)には蓮如の第十三子であり、近江国近松山顕証寺の住職であった蓮淳が寺に入った。この頃を前後して顕証寺と名を改め、近江顕証寺を兼帯とし、触頭寺院として河内国十一郡の真宗寺院を統括するようになった。

この時期の河内の様子を見ておくと、細川晴元とその配下である木沢長政が台頭しており、これに加えて三好長慶が現れて、河内を舞台に多くの争乱が繰り返されていた。さらに、一向宗による一揆と武将との争いも頻繁に行われており、多くの村が被害にあったことが文書からも伺われる。

こうした時代を背景に慈願寺と顕証寺のまわりに村が形作されていったものと考えられるが、その発展過程や成立時期については異説が存在する。久宝寺の代表的な絵図は元禄二年(1689)の久宝寺村屋敷総絵図と享保八年(1723)の新検分間正絵図があり、この2点の資料から検討されている。発展過程については久宝寺の北西にある「城土居」と呼ばれる城郭跡と推定される地域と南側の環濠集落が最初に存在し、この間を繋ぐように間に町が作られ、さらに東側にのびていったものとする見解と両方の突出部の間の南側を天文九年~十四年に、北側を天文末年~永禄年間に建設されたとする見解がある。

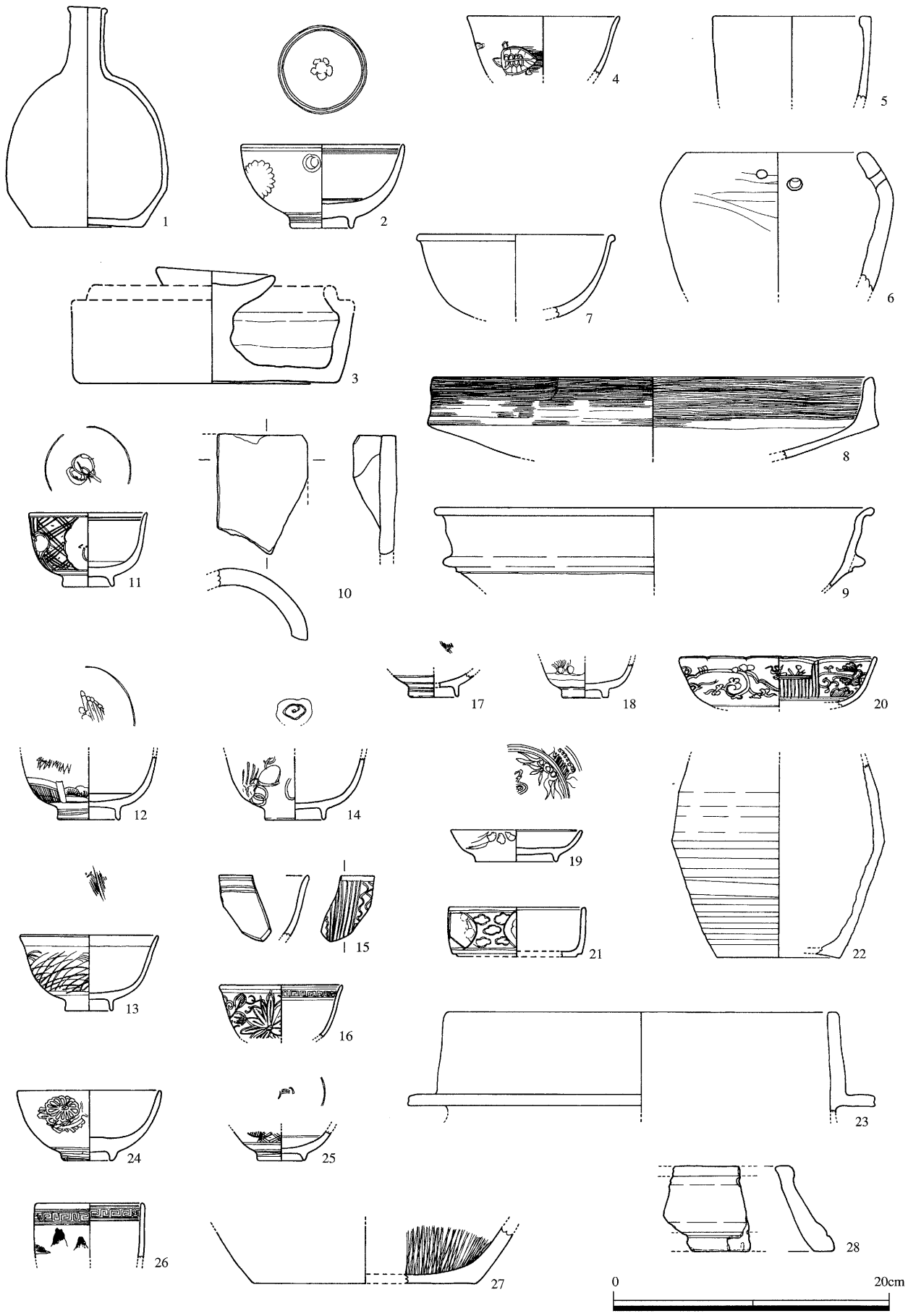
成立時期については一時荒れていた顕証寺が再興された天文十四年(1545)に環濠や町割りが成されたとする説と天正五年(1577)に土豪の安井氏が織田信長と手を結び、本願寺と敵対し、攻撃を受けた以降とする説があり、いずれの時期も寺内特権が認められている。前者は天文十年(1541)に細川晴元から制札が出されており、後者についても天正九年(1581)に信長から安井氏に対して屋敷地の支配を任せるとい禁制が出されている。また、後者については虎口部分の検討から天正四年(1576)以降の織豊系城郭技術によって元々の町割りを大改築したとする説も近年提出され、これを補強するものとなっている。

近世になると先述したように、後に慈願寺が久宝寺から離れ、顕証寺と安井氏による2重の支配構造が続き、経済的機能が発達した在郷町となっていった。

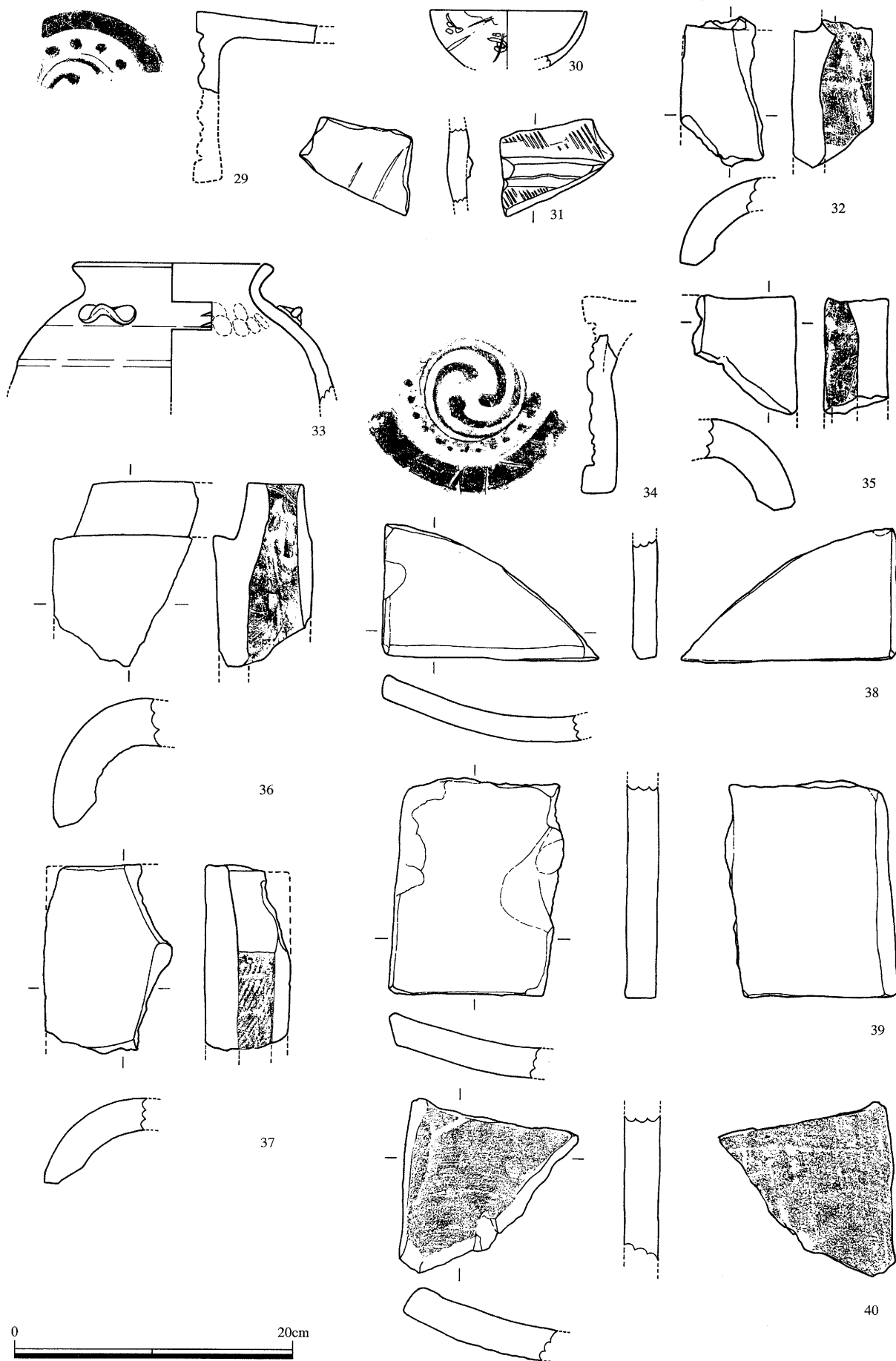
以上が寺内町の形成と発展の概略であるが、これを発掘成果からみてみたい。第1遺構面についてはすでに在郷町となっていた頃であることに異論はないと思われる。出土遺物からもわかるように肥前系陶磁器や羽釜、火鉢など当時の多くの日常雑器からその生活を窺い知ることができる。

第2遺構面は16世紀~17世紀前半、第3遺構面は15世紀末~16世紀前半と時期幅があったが、これを絞っていく上で問題となるのが第2遺構面の赤褐色の焼け土や遺構中に含まれた炭化物と焼土である。

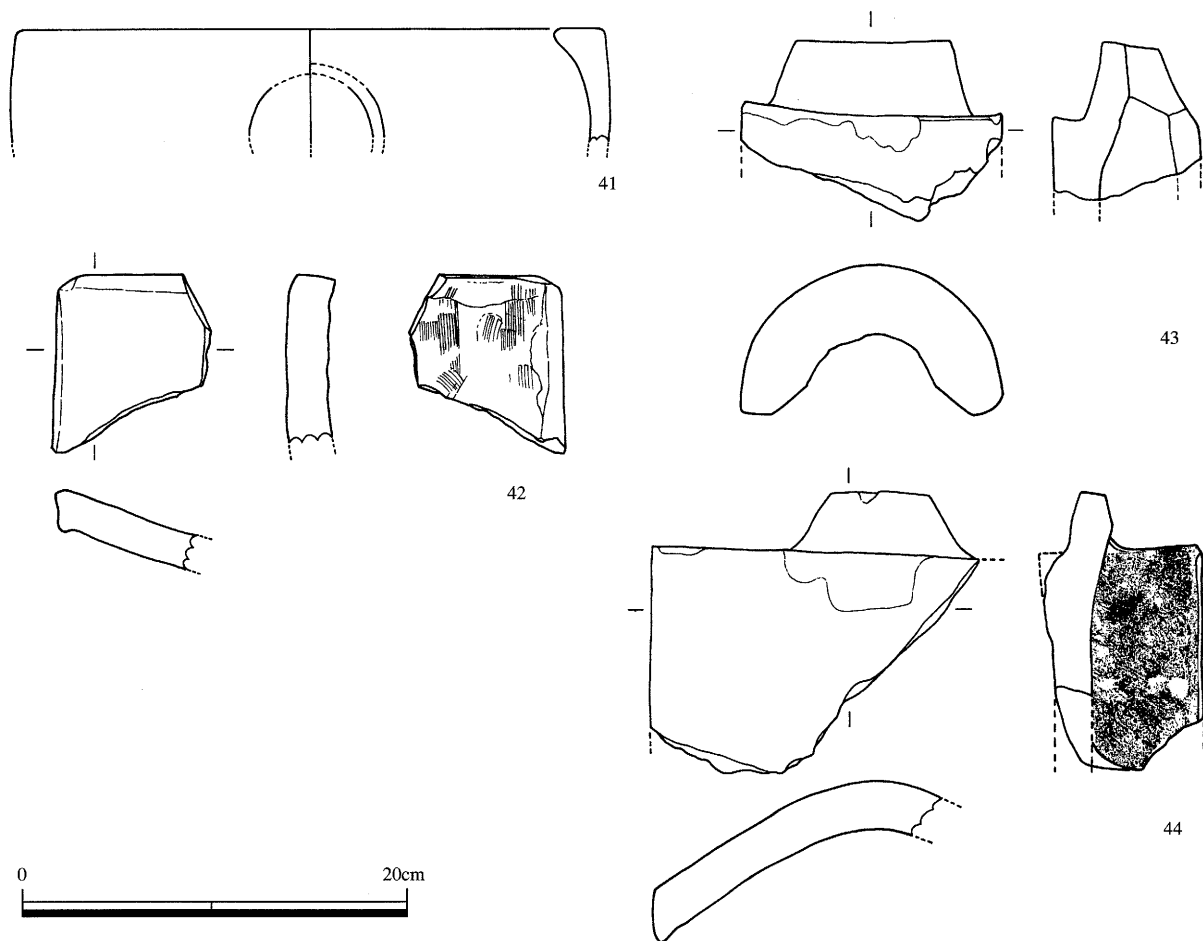
寺内町は3度の戦火に巻き込まれた可能性がある。第1に天文三年(1534)のに木沢長政と本願寺との戦があり『私心記』に「河内へ勢遣候 備中被立候 八尾カヤホリ焼候」とある。そして『証如上人日記』天文九年(1540)の条には「・・・、久宝寺草坊事可再興候、・・・」とあることから、天文三年の天文一揆のさいに被害を被ったことが考えられる。第2に前述しているが、天正五年(1577)に本願寺が久宝寺寺内を囲み、安井氏主計が戦死しているが、この時の攻防で戦火が町を覆ったことが想定しうる。



第18図 出土遺物実測図 (1/4)



第19図 出土遺物実測図 (1/4)



第20図 出土遺物実測図 (1/4)

第3に慶長十九年(1614)の大坂冬の陣では『元和先鋒録-八尾三番合戦覚-』に「・・久宝寺口迄乗付候処、・・中略・・基儘築地ヲ飛越内ノ門を開候・・中略・・者共はけしく相働敵を追崩し候・・北の方ニ火手あかり申候付・・」と久宝寺寺内が戦場になり、焼けたことが記載されている。

そして、これに加味する資料としては第2・3面の出土遺物である。第2遺構面では瓦片、陶器片やねり鉢片、へそ皿などの細片のみで生活を感じられるものはない。また、第3遺構面は陶器片、土師器片、須恵器片が極少量あるが大半は瓦で、なかでも雁振瓦を含んでいることから大きな建物、つまり寺院等の施設があったことが考えられる。すなわち、第3遺構面は寺院関係の建物が存在していた時期、そして第2遺構面は町家としての体裁が十分に整えられなかった時期といえる。

以上から、第3遺構面は天文九年頃に当てることができ、天文十四年(1545)に再興される以前の顕証寺の寺域であったことが推察される。次に、第2遺構面に相当するとみられるものは第2の天正五年(1577)と第3の慶長十九年(1614)である。この2つの間には37年しかなく、多くの戦闘が繰り返され、生活が不安定な時期でもある。こうしたことから、第2遺構面はこの時期に当たるものとしておきたい。

この推察が正しければ、天文十四年以前の寺内町は現状とは異なっており、この時期を境として現状に近い形態になり、慈願寺が慶長十一年に移転し、さらに大坂冬の陣が終了して平和を取り戻した時期以降に第2遺構面に盛土をして新たに築かれた第1遺構面こそが現在の久宝寺寺内町といえよう。

家の建て替えが進むなかで、寺内町の考古学的成果は上がっていない。今回、小調査区から考察を行ったが誤謬も多いと思う。十分な体制のなかで調査が実施され、それが正されることを望む。

最後になりましたが、八尾市立歴史民俗資料館の小谷利明氏と(財)八尾市文化財調査研究会の坪田真一氏には本稿をまとめるにあたり、ご助言、ご指導を頂きました。記して感謝します。

久宝寺寺内町遺跡(97-129) 出土遺物観察表

| 番号 | 器 種 | 遺構・土層 | 法 量 (cm) [残存] | | | 図版 | 色調・文様 | 備 考 |
|----|---------|-------|---------------|--------|------|----|---------------|----------------|
| | | | 口 径 | 器 高 | 底 径 | | | |
| 1 | 丹波徳利 | 土坑1-1 | 2.8 | 16.2 | 7.8 | 12 | 暗茶灰色 | 回転ナデ、底部糸切り痕跡 |
| 2 | 伊万里碗 | 土坑1-1 | 11.8 | 6.1 | 4.6 | 12 | 菊丸文 | 五弁花、コンニャク印判 |
| 3 | 瓦質火燈 | 土坑1-1 | 16.5 | 8.4 | — | 12 | 淡黒灰色 | 口縁部分を削り落としている |
| 4 | 肥前系碗 | 土坑1-2 | 11.2 | [4.3] | — | 10 | 染付 | |
| 5 | 伊万里青磁香炉 | 土坑1-2 | 11.6 | [6.0] | — | 10 | 外-淡緑灰色・内-淡橙色 | |
| 6 | 土師質火鉢 | 土坑1-2 | 13.2 | [10.2] | — | 11 | 淡橙褐色 | 外面-ヘラミガキ |
| 7 | 産地不明碗 | 土坑1-4 | 14.5 | [6.0] | — | 10 | 刷毛目文様 | |
| 8 | 土師質焙烙 | 土坑1-4 | 32.4 | [5.9] | — | 10 | 暗茶褐色 | 外面-ハケメ |
| 9 | 土師質焙烙 | 土坑1-4 | 32.0 | [5.9] | — | 10 | 淡茶褐色 | |
| 10 | 丸瓦 | 土坑1-4 | | | | — | | |
| 11 | 肥前系碗 | 土坑1-6 | 8.6 | 5.35 | 3.8 | 10 | 色絵 | |
| 12 | 肥前系碗 | 土坑1-6 | — | [4.6] | 4.6 | 10 | 染付 | |
| 13 | 産地不明碗 | 土坑1-6 | 10.0 | 5.5 | 3.5 | 10 | 染付 | |
| 14 | 肥前系碗 | 土坑1-6 | — | [4.5] | 4.5 | 10 | 染付 | |
| 15 | 伊万里碗 | 土坑1-6 | — | [5.7] | — | — | よろけ縞文 | |
| 16 | 産地不明碗 | 土坑1-6 | 9.0 | [3.8] | — | — | 染付 | |
| 17 | 肥前系碗 | 土坑1-6 | — | [1.7] | 3.6 | — | | |
| 18 | 肥前系碗 | 土坑1-6 | — | [2.5] | 3.4 | — | 染付 | |
| 19 | 肥前系鉢 | 土坑1-6 | 9.6 | 2.3 | 6.1 | — | 色絵 | |
| 20 | 肥前系鉢 | 土坑1-6 | 14.4 | [3.7] | — | 10 | 色絵、染付 | |
| 21 | 肥前系重小鉢 | 土坑1-6 | 10.0 | 3.6 | 8.8 | 10 | 色絵 | |
| 22 | 産地不明壺 | 土坑1-6 | — | [14.2] | 9.0 | 10 | 釉-暗茶灰色、素地-赤褐色 | |
| 23 | 土師質羽釜 | 土坑1-6 | 28.6 | [7.3] | — | 10 | 暗茶褐色 | |
| 24 | 伊万里碗 | 6層 | 10.5 | 5.1 | 3.4 | — | 菊文 | コンニャク印判 |
| 25 | 肥前系碗 | 6層 | — | [2.1] | 3.6 | — | 染付 | |
| 26 | 産地不明碗 | 6層 | 8.0 | [4.0] | — | — | 染付 | |
| 27 | 堺すり鉢 | 6層 | — | [4.2] | 16.0 | 11 | 暗赤褐色 | |
| 28 | 土師質五徳 | 6層 | — | 6.2 | — | 11 | 橙褐色 | 内側に焼成痕跡 |
| 29 | 巴文軒丸瓦 | 9層 | 瓦当径12.2 | | | | 暗灰色 | 表面銀化、右巴 |
| 30 | 伊万里碗 | 9層 | 11.2 | [4.0] | — | — | 染付 | |
| 31 | 円筒埴輪 | 9層 | — | — | — | — | 暗褐色 | 川西編年V期 |
| 32 | 丸瓦 | 9層 | | | | 11 | 暗灰色 | 凸面ナデ |
| 33 | 備前有耳壺 | 土坑3-1 | 14.6 | [10.1] | — | — | 暗灰褐色 | ヘラ描き沈線有り |
| 34 | 巴文軒丸瓦 | 土坑3-1 | 瓦当径14.3 | | | 12 | 暗灰色 | 右三巴、尾の一部結合 |
| 35 | 丸瓦 | 土坑3-1 | | | | — | 暗灰色 | 凸面ナデ |
| 36 | 丸瓦 | 土坑3-1 | | | | 11 | 暗灰色 | |
| 37 | 丸瓦 | 土坑3-1 | | | | 11 | 淡灰褐色 | 43と同一か |
| 38 | 平瓦 | 土坑3-1 | | | | — | 暗灰色 | 側面ナデ |
| 39 | 平瓦 | 土坑3-1 | | | | — | 暗茶褐色 | 側面ヘラケズリ |
| 40 | 平瓦 | 土坑3-1 | | | | — | 灰褐色 | 凹面布目痕と横位ナデ、離れ砂 |
| 41 | 土師質火鉢 | 土坑3-2 | 31.0 | [6.0] | — | — | 乳褐色 | |
| 42 | 平瓦 | 土坑3-2 | | | | — | 暗橙褐色 | 側面ヘラケズリ |
| 43 | 丸瓦 | 土坑3-2 | | | | 11 | 淡茶褐色 | |
| 44 | 雁振瓦 | 土坑3-2 | | | | 11 | 淡灰褐色 | |

【参考文献】

- 櫻井敏夫『寺内町の基本計画に関する研究-久宝寺寺内を中心として-』八尾市教育委員会 昭和63年
 安井良三・水野恭一郎他『八尾市内寺院古文書調査報告書(目録)』八尾市教育委員会 平成3年
 大阪市立博物館 特別展図録『大阪の町と本願寺』 1996年
 岩永憲一郎『河内 久宝寺寺内』城と陣屋シリーズ157号 日本古城友の会 昭和59年
 内田九州男『久宝寺寺内町の町割りについて』『八尾市史紀要 第9号』八尾市教育委員会 昭和61年
 前川要『都市考古学の研究-中世から近世への展開-』柏書房 1991年
 八尾市役所『八尾市史(史料編)』昭和35年
 岡田清一・坪田真一『久宝寺遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告55 1997年

3. 心合寺跡 (96-576) の調査

1. 調査地 大竹4丁目地内
2. 調査期間 平成9年2月24日
3. 調査方法 「史跡心合寺山古墳」の墳丘くびれ部中央の西側の里道から「心合寺」跡付近を通り、東高野街道につながる東西の道路の南側路肩の整備(道路建設課施工)に先立ち、今回の工事区間約80mの間に、4ヶ所のトレンチ(西側から第1～4調査区と呼称)を設定した。それぞれ、重機と人力掘削を併用して遺構確認調査を行った。
4. 調査概要
 - 第1調査区— 南北1m×東西2mの範囲の調査区で、今回の調査区では、心合寺山古墳から最も離れた西端に位置している。地表下約0.5mまで調査を行った。すべて近年の暗褐色土の盛土層(客土)であった。
 - 第2調査区— 南北1m×東西3mの範囲の調査区で、地表下約0.7mまで調査を行った。この調査区では、現況道路面と周辺の水田面とは、ほぼ同一のレベル高にあった。すでに調査前からこの調査区周辺の表土上には、平瓦片が散布していた。これらの平瓦片は、「心合寺」跡に関連するものと考えられる。そして、この調査においても、表土層(地表下0.2mまで)から、凸面に縄目叩きを残す平瓦の破片が数点出土している。さらに、その下層の地表下0.2m～0.48mの淡灰色砂質土(褐色粒砂混)からも同様の平瓦片が出土している。
 - これら2層以下(地表下約0.5m以下)からは瓦等の遺物は出土していない。
 - 第3調査区— 南北1m×東西1.5mの範囲の調査区で、地表下約0.5mまで調査を行った。すべて近年の盛土層(客土)であった。
 - 第4調査区— 南北1m×東西2mの範囲の調査区で、地表下約0.5mまで調査を



第21図 調査地周辺図 (1/5000)

行った。この調査区は、心合寺山古墳の西側堤体を断ち割る形で道路が東西に走る場所で、今回の調査では東端に位置している。堤帯を断ち割る時に、すでに攪乱を受けており、すべて近年の盛土層（客土）であった。

5. 出土遺物

第2調査区のみ、遺物が出土している。そのほとんどが、縄目叩きの平瓦の細片及び土師器細片で、図化できるものはなかった。唯一、図化できたものとして、軒丸瓦の瓦当部の破片がある（第23図）。

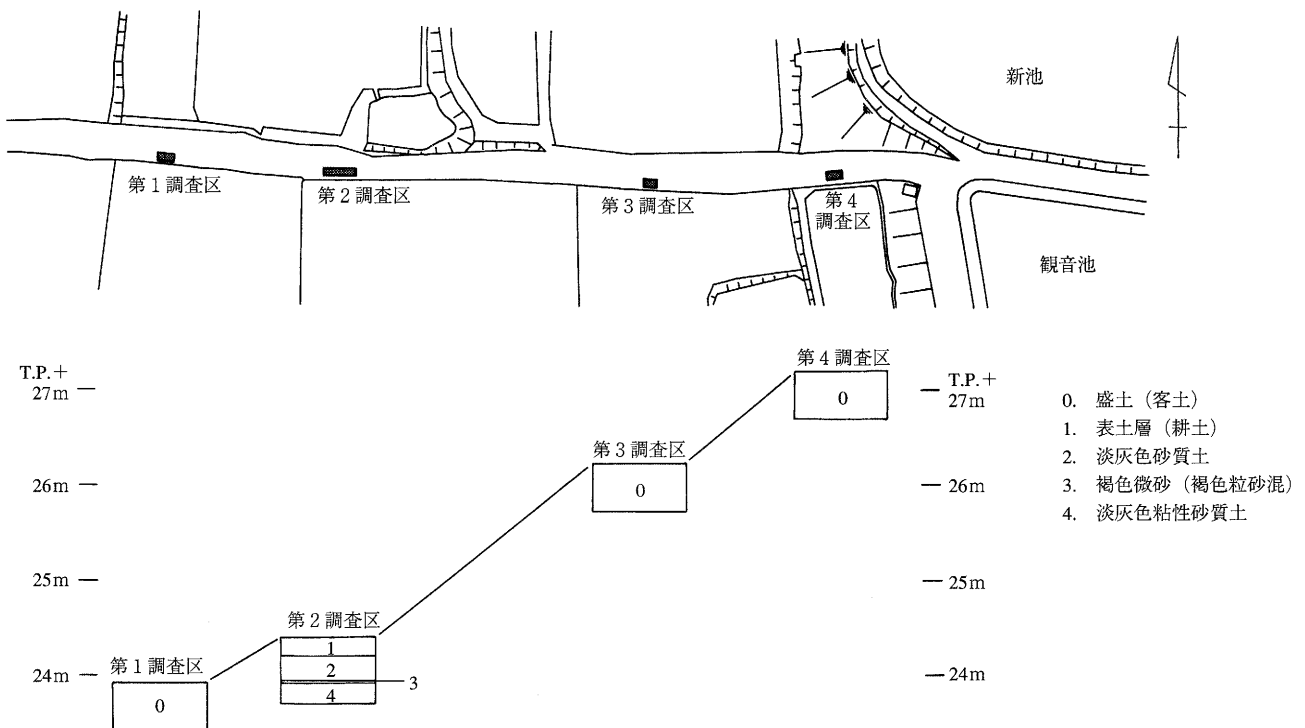
これは、内区が単弁の蓮華文の軒丸瓦で、やや摩滅しているものの、約1/3弱が残存しており、おそらく、八葉の蓮華文であったと考えられる。復元直径16.6cmを測る。これまで「心合寺」跡で出土した軒丸瓦と同様のもの（八尾市史編集委員会編 1988）で、創建時に使用されていたものと考えられる。

6. まとめ

今回の4ヶ所の調査区においては、そのほとんどが近年の客土層であった。その中で第2調査区では、唯一「心合寺」の創建時のものと考えられる軒丸瓦が出土した。この出土層は、表土層からの出土であって、おそらく後世の耕作等によって寺院の遺構が削平された結果によるものであるだろう。しかし、「心合寺」に直結するような遺構等が検出されておらず、またその寺域も推定の域を越えない現状では、その一端を知る上での貴重な資料の一つとなるだろう。

現在推定されている「心合寺」跡の周辺には、多数の瓦片が散布しており、さらに心合寺山古墳周辺でも瓦等が出土している。寺院造営後の古墳利用とその寺院との関係を知る上で、今後、周辺の調査を通じて、「心合寺」に関連する遺構の検出やその寺域の解明ができることを期待したい。

（藤井）



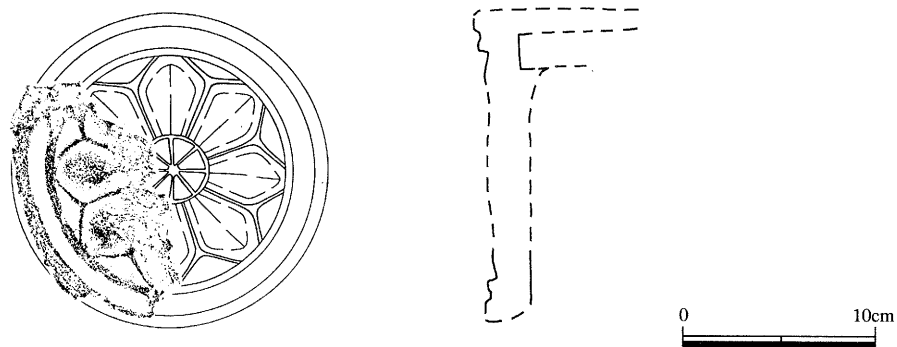
第22図 調査区設定図（1/800）及び土層模式図（1/80）

[参考文献]

(財)大阪文化財センター 1976『大阪文化誌』第6号

八尾市史編集委員会編 1988『八尾市史(前近代)本文編』

八尾市教育委員会 1997『史跡心合寺山古墳第5次発掘調査現地説明会資料』



第23図 出土軒丸瓦実測図(1/4)

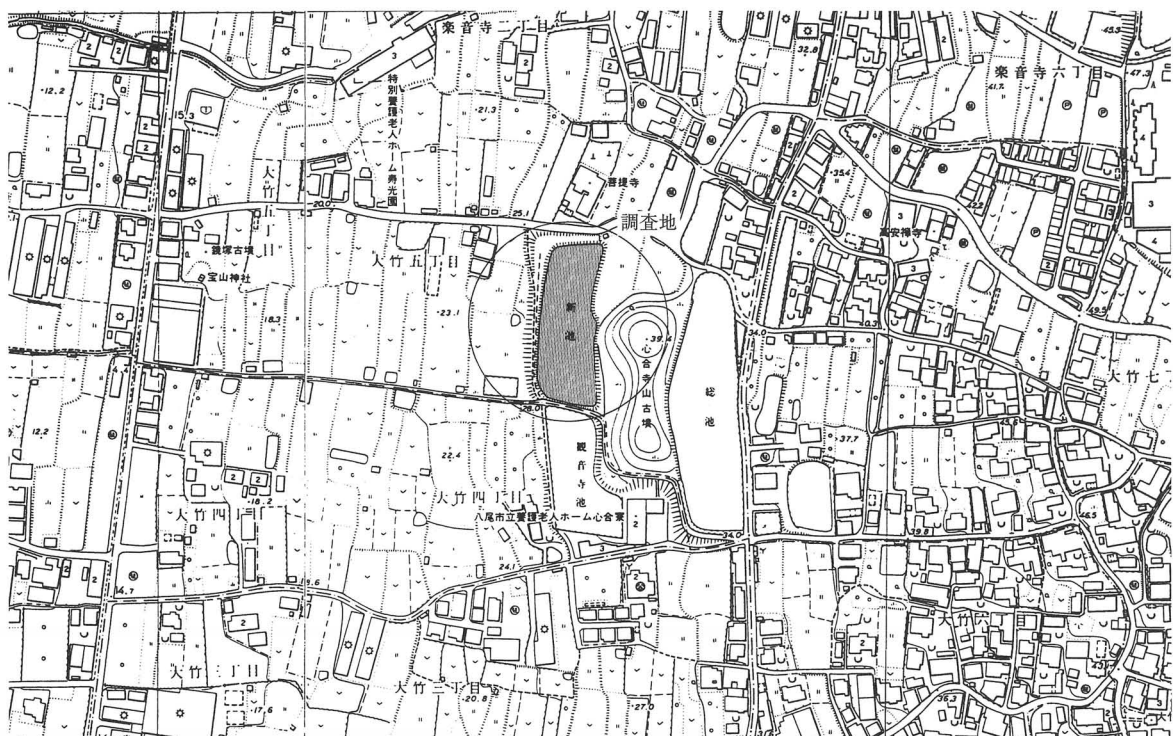
4. 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修に伴う試掘調査(平成9年度)

1. 調査経緯

平成8年の11月に八尾市下水道河川課より、来年度以降に行われる新池の堤体部分の改修工事についての協議の依頼があった。工事の内容は堤体の池側法面が浸食されているため、法面の表層の削平と擁壁の基礎部分の掘削を行い、刃金土を補填し表面をブロック張りにするというものであった。本工事予定地が国の史跡の指定範囲にあるため、文化財課は直ちに大阪府教育委員会、文化庁に報告を行い、その指導のもと河川課と協議を行い、下記の条件に基づいて工事設計を行うことで合意した。

- ・工事設計に先きだち試掘調査を行い、この結果に基づいた地下遺構に支障のない工事設計を行うこと。
- ・史跡の現況の景観をできるだけ損なわず、『史跡心合寺山古墳基本構想報告書』に示された整備構想に沿ったものとする。具体的には現況の樹木をできるだけ保存し、表面の仕上げは自然石積みに近い形にすること。
- ・工事に先きだち発掘調査を行い、重要な遺構が確認された場合は保存を計ること。

続いて、八尾市教育委員会から文化庁に試掘調査についての現状変更申請を平成9年2月3日付で行い、同年3月6日付で許可を得た。これにより新池南西側の一ヶ所について、3月10日から13日まで試掘調査を行った(第1区)。この結果、地表下0.4m以下で、平安時代以降の堤体が確認されたため、河川課に対し試掘調査結果を充分配慮したうえで、工事設計を行うよう再度に依頼した。平成9年3月24日付で本体工事の現状変更申請が河川課から文化財課を通してなされ、平成9年5月16日付で文化庁より許可がなされた。本工事は平成9年度から3ヶ年計画でなされるため、今年度の施工予定地の新池南側堤体の1箇所について、10月6日、7日に文化財課で試掘調査を行った(第2区)。この結果に基づいて、擁壁の基礎部分を対象に11月4日～13日まで発掘調査を行った。発掘調査について



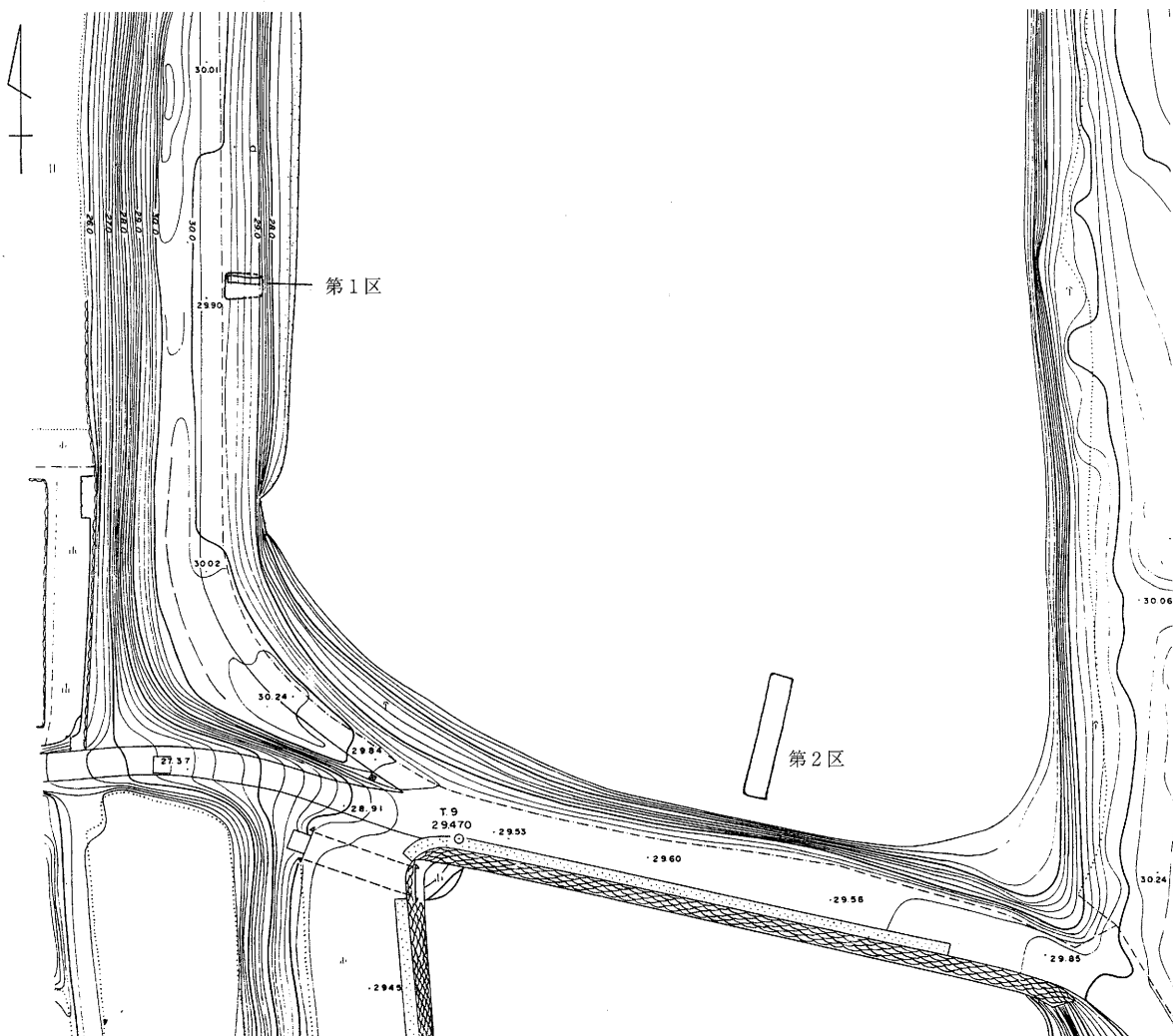
第24図 調査地周辺図 (1/5,000)

ては、文化財課の指導のもと、(財)八尾市文化財調査研究会が調査にあたった。また工事において、堤体法面の腐植土の除去が行われたため、平成10年1月27日、28日に文化財課で立会調査を行った。本調査報告は文化財課で行った2箇所を試掘調査の成果報告である。立会調査については、遺物整理が終了していないため、来年度の報告とする。調査地は、心合寺山古墳の推定西側外堤及び周濠内にあたるが、河内秦氏の氏寺とも考えられている心合寺の推定地とも重なっており、今回の調査ではこれに関する遺物等が確認された。なお本調査報告は吉田野々が担当したが、図版作成を含めた出土遺物の整理と本文中の「4、出土遺物〔第2区〕」の原稿執筆は、吉田の指導のもと仏教大学卒業生頃安敏雄が行った。

2、第1区の調査

新池堤体南西部分の池側法面で幅1.5m前後、長さ2m前後のトレンチを1箇所設定した。地元の水利の関係で大幅に池の水位を下げるができなかったため、堤体上端面の高さ(TP+30.0m)から地表下2.1m(TP+27.9m)まで調査を行った。今回の工事対象となる範囲がT.P.+26.2m~28.30mであるため、工事対象の高さ2.7mのうち下から1.7mが未調査である。

調査対象地の現況は法面が急傾斜をなして落ち込み、水際部近くでは法面が崩落しかかって軟弱になっている状態であった。さらに腐植土の除去を行ったところ、瓦等を含む土層がみられ、近世以前の堤体の残存している可能性が考えられたため、幅0.5mで断割を行い、土層断面の観察を行った。この結果、およそ3単位の区分を行うことができた。単位区分については、堤体の築造時期の区分であるのか、堤体の築造工程の区分であるのか判然としない。



第25図 調査区設定図 (1/400)

(第1単位) TP+29.43~28.78m。ブロック状をなす暗灰色粘土、黄褐色砂等による4つの層みられる。叩きしめが行われているようにみえる。瓦片を含む。平安時代以降とみられる。

(第2単位) TP+28.35~28.78m。灰褐色粘性砂質土を主体とする。明らかに人為的に積まれたとみられるものである。瓦片、平安時代とみられる土師器皿片1点、埴輪片を含む。

(第3単位) TP+29.35m以下。灰茶色粘性砂層を主体とし、比較的軟質な土である。瓦片、古墳時代後期の須恵器片1点を含む。

調査の結果、地表下0.4m以下、TP+29.4m以下で、平安時代以降の堤体を確認した。また第3単位については白鳳時代以降の土層である。遺構の保存状況については、TP+29.3m付近まで池の水による侵食を受けて軟弱化しており、平安時代以降とみられる堤体そのものが崩落している状況である。堤体の上方にも関わらず、平安時代以降の堤とみられる遺構が確認されたことから、堤体の下方の未調査の部分においても、さらに古い時期の堤が遺存している蓋然性が高い。

3、第2区の調査

新池南側中央付近の池内に幅1m、長さ6.7m前後の調査区を設定した。今回は池の水がかなり減少していたため、池内に調査区を設定することができた。現地表はTP+27.3~26.5m前後で北下がりになり緩やかに傾斜する。TP+25.8m前後まで調査した。平面的には遺構は捉えられなかった。

土層の堆積状況は全体に北下がりもしくは水平の堆積であり、砂混粘砂、粗砂層を主体とし、堤体構成層という印象をより、池内の堆積層という印象を受けた。大きく分けると下記ようになる。

(第1層) 灰白色粗砂層。最大厚0.4m前後。現代のゴミを含む。

(第2層) TP+26.5~27.2m前後。黄灰褐色粘砂、黄灰褐色微砂、灰紫褐色粘土層等よりなり、部分的にブロック状の堆積をなしており、人為的な積み上げとみられる土層である。

(第3層) TP+26.1~26.5m前後。淡灰褐色中礫混粘砂層。池内堆積層か。

(第4層) TP+26.1m以下。褐灰色砂層。池内堆積層か。

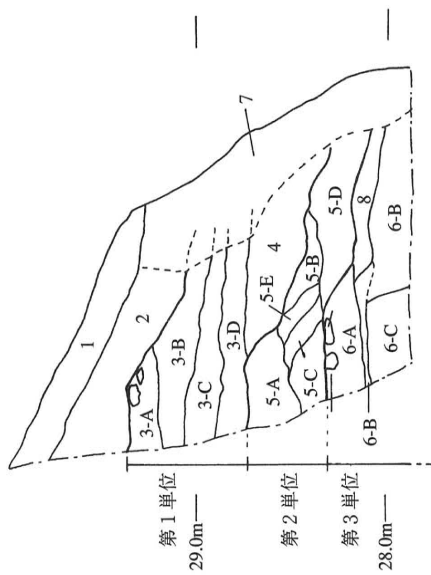
(第5~第7層) TP+25.9~26.9m前後。灰色~灰青色の粘砂、粘質土。有機物混りで、砂層をはさむ。

(第8層) TP+25.9m以下。灰青色~灰紫色粘土層。水平堆積であり、今回の調査では、遺物は確認されなかった。

以上の土層の堆積順序はおおよそ次のようになると思われる。第8層→第5~7層→第4層→第3層→第2層→第1層。第5~7層は北下がり堆積していることから南側の観音池との間を画する堤体が、池の水により浸食されることにより堆積した可能性がある。次に第4層、第3層が堆積する。第2層はブロック状の堆積をなしていることから、なんらかの理由で人為的に積まれたものとみられる。なお、今回の第2区の試掘調査後の本調査で、池の岸ともみられる肩状の遺構が確認されたが、この肩部を構成する土層は第7層及び第8層と対応するとみられる。第1層~第7層より、コンテナ二箱分の遺物が出土した。内容は平瓦、丸瓦が主体で、埴輪片が若干量、土師器片がごく少量である。瓦片の中には軒丸瓦1点が含まれていた。第8層では遺物は確認できなかったが、掘削量が僅かであるため、遺物包含層である可能性がある。土師器片は摩滅が著しく、時期は不明であるが、瓦片は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるものと、8世紀以降に位置づけられるものがある。今回確認した2層から7層までの堆積時期は判然としない。上限は出土瓦から奈良時代頃となるが、実際は心合寺廃絶後の平安時代以降であろう。新池南側堤体部分法面の立会調査では、一部法面の崩落の著しい部分で第1区の第2単位、第3単位と類似した瓦を含む土層を確認しており、平安時代以降の堤体となる可能性がある。今回確認した第5~7層はこの部分が浸食を受けたのちに堆積したものである可能性がある。

第1区

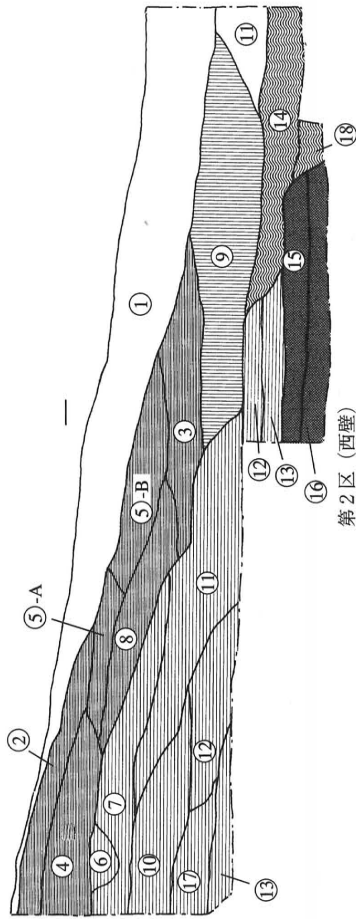
1. 腐植土層
2. 灰黄色小礫混粘性砂質土層 (流入土層)
- 3-A. 暗灰色粘土、灰黄色砂層 (ブロック状形成)
- 3-B. 黄褐色砂層 (花崗岩風化状)
- 3-C. 暗灰色粘土、黄褐色砂 (ブロック状形成)
4. 黄褐色粘性砂質土層 (花崗岩風化状砂ブロック)
- 5-A. 灰褐色粘性砂質土層
- 5-B. (同上) やや軟質
- 5-C. (同上) 粒度粗
- 5-D. (同上) 粒度やや粗
- 5-E. 灰黄色微砂層 (ブロック状)
6. 灰黄色微砂 (ブロック)
- 6-A. 灰茶色粘性砂層
- 6-B. (同上) 粘性少、軟質
- 6-C. (同上) 粘性少、硬質
7. 腐食土層 (層面崩落状)
8. 淡灰色砂層



第1区 (北壁)

第2区

- ①. 灰白色粗砂層 (現代)
- ②. 黄褐色粘砂ブロック混灰紫色粘土層
- ③. 灰紫褐色粘質土層+黄褐色粘砂ブロック混の土層
- ④. 灰紫色粘土ブロック混淡褐色粘砂層
- ⑤-A. 灰黄褐色微砂粘砂層
- ⑤-B. (同上) (淡褐色粘砂ブロック混)
- ⑥. 黄褐色砂
- ⑦. 褐色斑灰青色粘砂層
- ⑧. 黄褐色微砂層-第5層
- ⑨. 淡灰褐色中礫混粘砂層 (やや中礫含む) -第5層
- ⑩. 灰白色小礫混粘砂層 (灰白色微砂ブロック、有機物混) -第5層
- ⑪. 灰色粘質土 (灰白色微砂ブロック) -第5層
- ⑫. 灰色粘砂層
- ⑬. 灰色微砂粘砂層] -第6層
- ⑭. 褐色粗砂層
- ⑮. 灰青色粘土層-第7層
- ⑯. 灰青色粘土層
- ⑰. 灰白色微砂層-第5層
- ⑱. 褐色微砂層



第2区 (西壁)

- 2層
- 3層
- 4層
- 5~7層
- 8層
- (①層=1層)



第26図 調査区土層断面図 (1/40) 及び土層模式図 (1/80)

4、出土遺物

今回出土した遺物は瓦が中心であり、なかでも平瓦が多い。そこで平瓦について、凸面の調整技法により類型化を行い、類型別、層位別の点数を計数した(表1、2)。今回の類型化作業は出土資料がすべて破片資料であるため、精度に欠くものであるが、大要を掴む資料とするため敢えて試みた。第2区では類型化のできなかつたものも含めて119点出土している。現代の土層である第1層を除くと、第5層で最も多く出土している。類型化のできないものが全体の40%を占めるが、類型化できたものでは、格子目タタキを行うA・B類が21%、スリケシを行うE類が18%、縄目タタキを行うD類が13%、綾杉タタキを行うC類が6%、縄目タタキのうち綾杉タタキを行うF類が2%である。層位ごとには類型群ごとの明瞭な時期差はみだせなかつた。これは今回確認した土層が浸食等による二次堆積とみられることに起因するものであろう。

〔第1区〕平瓦、丸瓦、円筒埴輪、須恵器、土師器がコンテナ1/4箱分出土している。平瓦については、表1のとおりである。丸瓦は第6層から出土している。土師器は5-A層から1点出土している(第27図5)。平安時代前期の所産とみられる。また須恵器の甕もしくは壺の口縁部片が1点、6-A層から出土している(第27図4)。古墳時代後期頃の所産とみられる。6-A層に二次的に混入したものである。

〔第2区〕^(註1)平瓦、丸瓦、軒丸瓦、円筒埴輪、土師器、須恵器、瓦質土器、近世陶磁器がコンテナ2箱分出土している。このうち土器類及び埴輪は少量のうえに図化できたものは近世の瓦質土器1点(第29図14)のみであった。このため今回最も出土量の多かつた平瓦を中心に述べていきたい。なお平瓦は凸面の調整技法から以下の6類に分類した。

- ・ A類…斜格子タタキ(第28図1、第29図10、12、13)
- ・ B類…不整格子タタキ(第28図7、第29図9)
- ・ C類…無軸綾杉タタキ(第28図2)
- ・ D類…縄目タタキ(第1区、第27図1)
- ・ E類…スリケシ(第28図3)
- ・ F類…縄目タタキを擦り消した後綾杉タタキ(第28図4、第29図11)

さらに各類型の中で擦り消しの有無から、A1類(スリケシ有り)・A2類(スリケシ無し)といった様に細分した。また、平瓦の法量及び調整原体については、今回の資料がすべて細片であったため確認できなかつた。なお平瓦の製作技法は、桶巻作りか一枚作りかの判断が難しかつたが、以下のことを基準に可能性の高いものも含めて判断した。

- ・ 桶巻作り…分割痕が存在する。
曲率が強い円弧を描き、側端面の傾斜が円弧の中心に向く。
- ・ 一枚作り…平瓦の曲率が弱い円弧を描き、側端面の傾斜が円弧に対して鉛直である。

A～C類及びE類は確認できたものの大半が桶巻作りで、それぞれ1～2点一枚作りとみられるものが含まれていた。また凹面の布目痕も8本/cmが大半を占めており、一部に6本/cmや10本/cmのものもみられた。さらに桶枠幅も確認できたものでは2.4cm～3.0cmの幅に収まり、上記4類は同様の傾向を示していた。D類は一枚作りのものがその大半を占めているが、桶巻作りのものも少量ながら確認で

きた。また凹面の布目痕は8本/cmと6本/cmのものがほぼ半々の割合でみられた。桶枠幅は2.8cmと1.9cmのものが少量ながら確認できた。F類は2点のみであったが、今回観察した資料がすべて部分的な小片であり、D類としたものの中にもF類の含まれている可能性もある。製作技法はどちらも一枚作りであった。なお、図化することはできなかったが、凹面に粘土紐の痕跡の残るものがE類で1例、布と紐痕の残るものがB類で1例確認できた。

以上の点から、A～C類及びE類は桶巻作りが大半を占めること、叩き原体外の調整技法が共通することから、これら4類はほぼ同時期に共存していたと考えられる。また、D類は上記の4類と比べて新しい要素をもつ縄目タタキを使用することや、一枚作りがその多くを占めることから、これに後出するものと考えられる。なお、F類は今回確認したものが一枚作りのみであったが、D類に更に叩き調整を加えることや、擦り消し後の叩き原体に前代のC類の原体である無軸綾杉タタキを用いることから、D類に時期的に重なるものであるが、その中でも比較的古相に位置付けられる可能性がある。

以上の所見をもとに、類型ごとの所属時期を先学の研究成果から求めると以下のようになる。

A・B・C・E類…7世紀第3四半期～8世紀第1四半期

D・F類…7世紀第4四半期以降(8世紀第1四半期以降、D類が供給の主流)

〔丸瓦〕丸瓦は出土量が少なく、図化できたものは3点(第28図5、6、8)である。確認できたものは全て玉縁付き丸瓦で、凸面の縄目タタキを丁寧に擦り消し、肩部は粘土を補充して成形しているものであった。玉縁部の製作技法から7世紀後半から8世紀のものと考えられる。

〔軒丸瓦〕今回出土した軒丸瓦(第29図15)は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、外区及び内区が遺存するものである。中房部は欠損していたが、過去の心合寺出土例から中房は突線によって形成された車輪状を呈するものである。瓦当面の推定直径は16.6cm、最大瓦当厚は2.0cmである。外区はやや突出ぎみの扁平な素文の直立縁である。この内側にやや幅広な凹界線を介し、内区を区画する圈線を配する。花卉部分はやや肉薄な花卉であり、これをY字状の突線で区画している。弁幅は2.4cm、推定弁区径は12.2cmである。なお、製作技法について、本資料では確認できなかったため、これと同范とみられる平成9年度心合寺山古墳調査出土例^(註2)の観察結果を記しておく^(註3)。瓦当と丸瓦の接合方法はいわゆる印籠つぎ法であるが、丸瓦はやや下ぎみに取り付けられており、凸・凹面ともに多量の粘土を充填している。背面及び取り付け部分はナデによる調整が明瞭に確認でき、仕上げの粗雑な印象を受ける。胎土は、比較的大粒の長石・石英を多量に含み、雲母が目立つ。なおこの胎土の傾向は平瓦と丸瓦についてもみられる。この胎土構成は在地産の可能性を想定させるものである。瓦当文様及び製作技法から7世紀第3半期のものと考えられる。

〔まとめ〕今回の出土資料は各層位ごとの検討を行い得るものではなかったが、心合寺の平瓦についてのおおまかな素描が行うことができた。今後の調査の進展によって層位的な裏付けをもった瓦の分類と検討が行われることを期待したい。

なお、心合寺の軒丸瓦は既往の研究成果からおおまかにみて、単弁八葉蓮華文軒丸瓦、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、複弁七葉蓮華文軒丸瓦、三巴文軒丸瓦の4種類が確認されている。今回分類した平瓦との対応関係は、A～C及びE類は単弁八葉蓮華文軒丸瓦に、D類及びF類は複弁八葉蓮華文軒丸瓦と複弁七葉蓮華文軒丸瓦に想定しておきたい。

| 層名 | A類 | | B類 | | C類 | | D類 | | E類 | F類 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | A 1 | A 2 | B 1 | B 2 | C 1 | C 2 | D 1 | D 2 | | | |
| 第2層 | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 第3層 | | | | | | | 1 | | 1 | | 2 |
| 第5層 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 第7層 | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 合計 | | 1 | | | | | 1 | 2 | 1 | | 5 |

表1 第1区平瓦の叩き目類型別・層位別点数表

| 層名 | A類 | | B類 | | C類 | | D類 | | E類 | F類 | 不明 | 合計 |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|-----|
| | A 1 | A 2 | B 1 | B 2 | C 1 | C 2 | D 1 | D 2 | | | | |
| 第1層 | | 4 | | | 3 | | 4 | 1 | 13 | | 29 | 54 |
| 第2層 | 2 | | 1 | | | 2 | 3 | 1 | 1 | 2 | 4 | 16 |
| 第3層 | | | | 1 | | | | | 1 | | 3 | 5 |
| 第5層 | | 1 | | 15 | | | 4 | | 5 | | 10 | 35 |
| 第6層 | | | | | | | 1 | 2 | 1 | | 1 | 5 |
| 第7層 | | 1 | | | 2 | | | | 1 | | | 4 |
| 合計 | 2 | 6 | 1 | 16 | 5 | 2 | 12 | 4 | 22 | 2 | 47 | 119 |
| 比率 (%) | 7 | | 14 | | 6 | | 13 | | 18 | 2 | 40 | 100 |

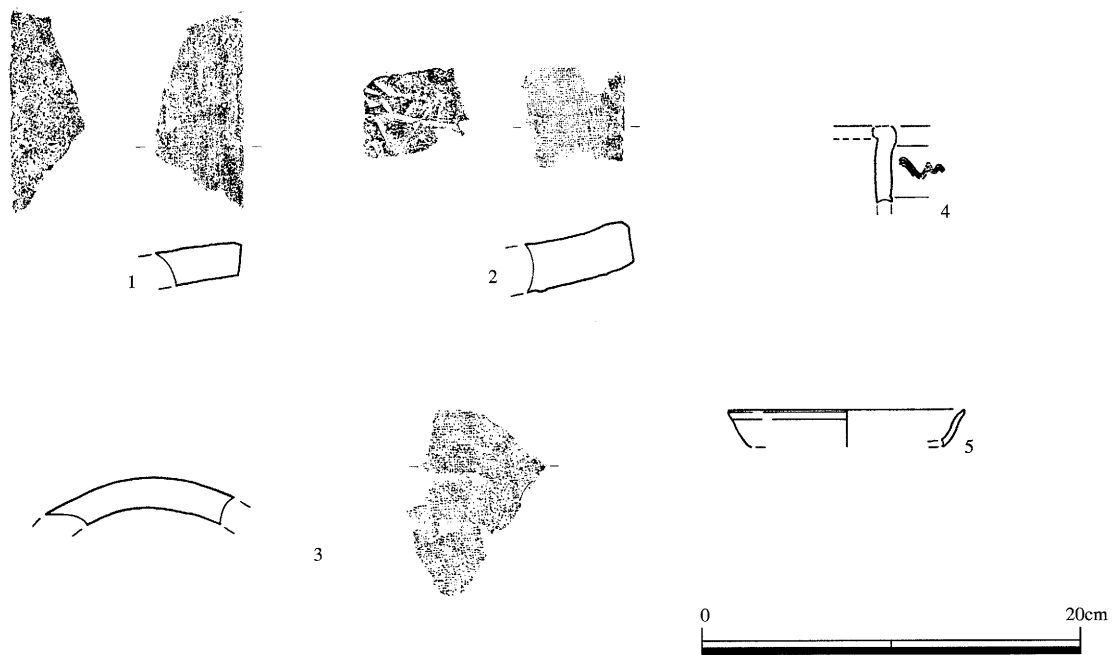
表2 第2区平瓦の叩き目類型別・層位別点数表

| | A類 | B類 | C類 | D類 | E類 |
|-------|----|----|----|----|----|
| 桶巻き作り | ○ | ○ | ○ | △ | ○ |
| 一枚作り | △ | △ | △ | ○ | △ |

表3 第2区出土平瓦の類型別の製作技法

略号注○…今回出土平瓦の大半を占める。

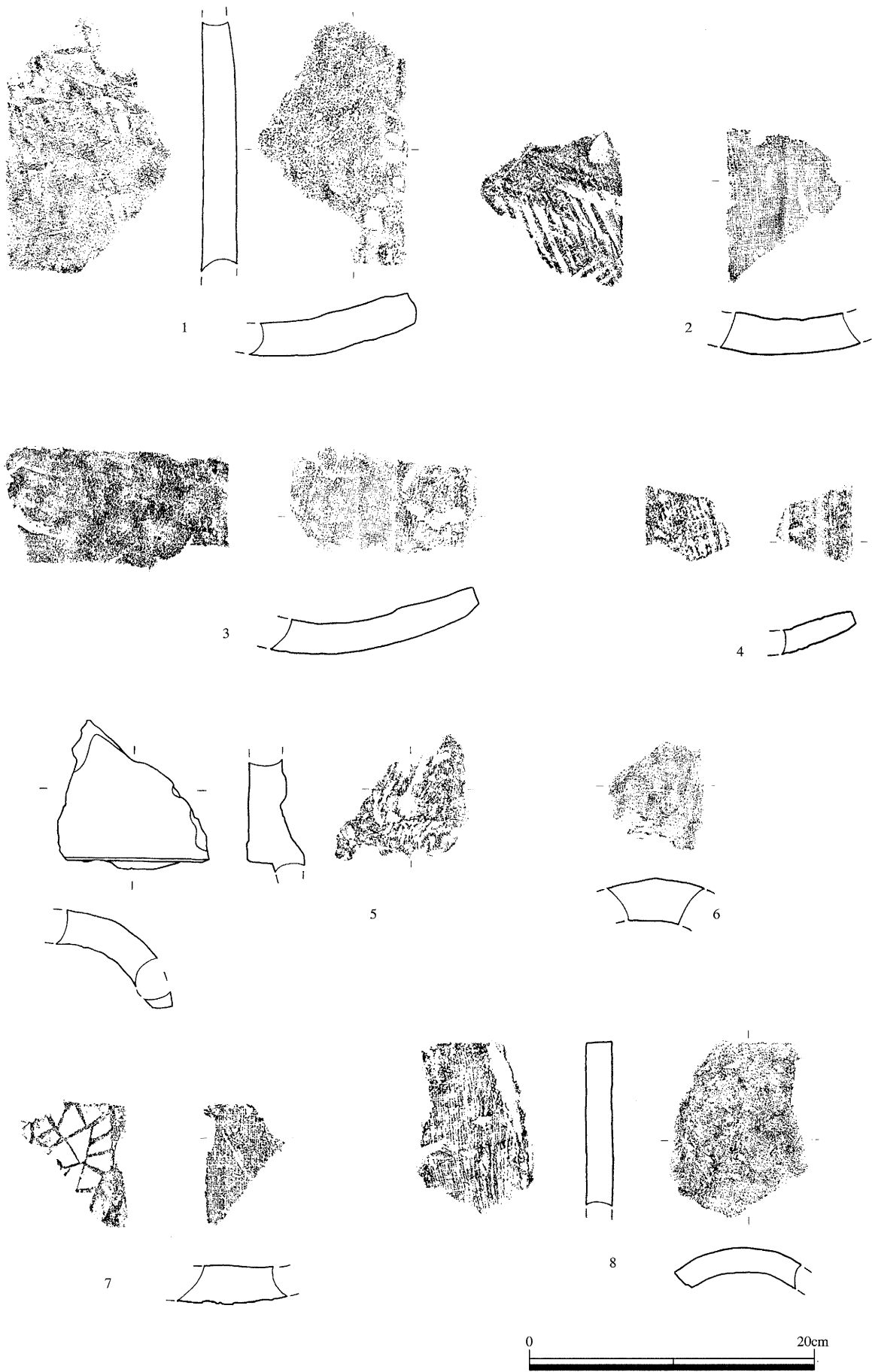
△…今回出土平瓦のうち極く少量みられる。



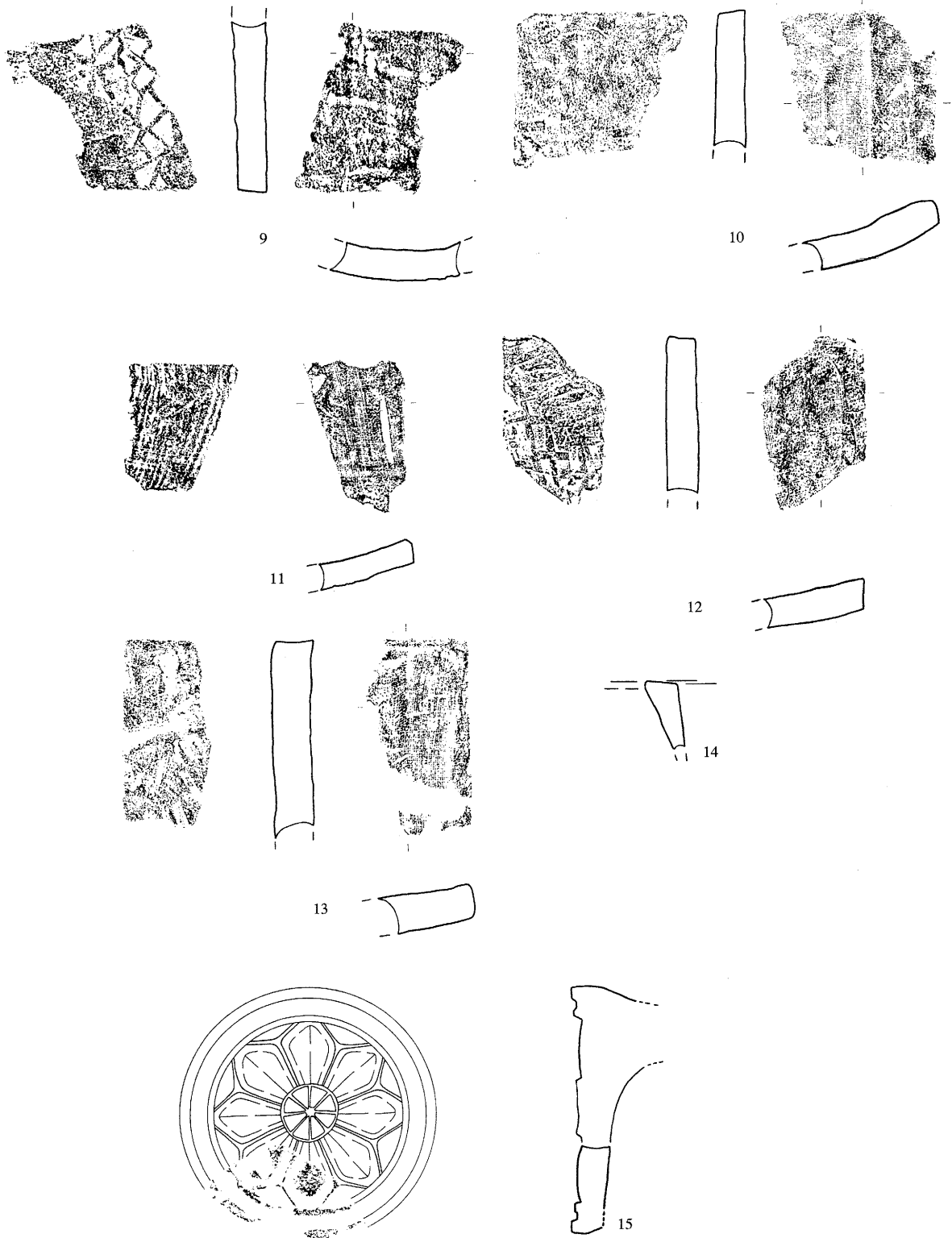
第27図 第1区出土遺物実測図 (1/4)

| 番号 | 調査区 | 出土層 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | 焼成 | 色調 | 胎土 | 調整 |
|----|-----|-------|-------------|-----|--------------------|-----|------|-----|---|
| 1 | 第1区 | 第2層 | 平瓦 | | | 硬 | 茶灰色 | やや粗 | 凸面：縄目タタキ後スリケシ 凹面：布目痕をスリケシ 側端面：ヘラケズリ |
| 2 | 第1区 | 第5-A層 | 平瓦 | | | やや軟 | 淡灰色 | 粗 | 凸面：斜格子タタキ後スリケシ 凹面：布目痕 側端面：側端面～凹面にヘラケズリ後ナデ |
| 3 | 第1区 | 第6-A層 | 丸瓦 | | | 軟 | 淡灰褐色 | 粗 | 凸面：縄目タタキ後スリケシ 凹面：布目痕 |
| 4 | 第1区 | 第6層 | 須恵器 甕又は壺 | 口縁部 | 残存高：4.0 | 硬 | 灰白色 | 精良 | 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ |
| 5 | 第1区 | 第5-A層 | 土師器 皿 | 口縁部 | 口径：12.4 残存高：1.9 | やや軟 | 赤褐色 | 精良 | 外面：横方向ナデ 内面：横方向ナデ |

第1区 出土遺物観察表



第28图 第2区出土遺物実測図(1/4)



第29图 第2区出土遺物実測図 (1/4)

| 番号 | 調査区 | 出土層 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | 焼成 | 色調 | 胎土 | 調整 |
|----|-----|-----|--------------|--------|--|-----|------|-----|--|
| 1 | 第2区 | 第1層 | 平瓦 | | | 硬 | 灰白色 | 粗 | 凸面：斜格子タタキ後スリケシ 凹面：布目痕 側端面：側端面～凹面にヘラケズリ |
| 2 | 第2区 | 第1層 | 平瓦 | | | 硬 | 淡褐色 | 粗 | 凸面：綾杉タタキ後スリケシ 凹面：布目痕 |
| 3 | 第2区 | 第1層 | 平瓦 | | | 硬 | 灰色 | 粗 | 凸面：ナデ 凹面：布目痕 側端面：側端面～凹凸面側辺にヘラケズリ |
| 4 | 第2区 | 第1層 | 平瓦 | | | やや軟 | 灰白色 | やや粗 | 凸面：縄目タタキ後綾杉タタキ 凹面：磨滅の為不明 側端面：側端面～凹凸面側辺にヘラケズリ |
| 5 | 第2区 | 第1層 | 丸瓦 | 玉縁部一部残 | | 軟 | 灰褐色 | 粗 | 凸面：縄目タタキ後ヘラ状工具によるナデ 凹面：布目痕 |
| 6 | 第2区 | 第1層 | 丸瓦 | | | 硬 | 淡灰色 | 粗 | 凸面：縄目タタキ後スリケシ、一部綾杉タタキ 凹面：布目痕 側端面：ヘラケズリ後ナデ |
| 7 | 第2区 | 第2層 | 平瓦 | | | 軟 | 淡灰色 | やや粗 | 凸面：不整格子タタキ 凹面：布目痕 |
| 8 | 第2区 | 第2層 | 丸瓦 | | | 硬 | 淡灰色 | 粗 | 凸面：縄目タタキ後スリケシ 凹面：布目痕一部スリケシ 側端面：ヘラケズリ後ナデ |
| 9 | 第2区 | 第5層 | 平瓦 | | | 軟 | 淡灰黄色 | 粗 | 凸面：不整格子タタキ後スリケシ 凹面：布目痕一部スリケシ |
| 10 | 第2区 | 第5層 | 平瓦 | | | 硬 | 淡灰色 | やや粗 | 凸面：斜格子タタキ後スリケシ 凹面：布目痕スリケシ、側辺部ヘラケズリ 側端面：糸切痕 |
| 11 | 第2区 | 第5層 | 平瓦 | | | 硬 | 淡灰色 | やや粗 | 凸面：縄目タタキ後スリケシ、一部綾杉タタキ 凹面：布目痕一部スリケシ 側端面：ヘラケズリ |
| 12 | 第2区 | 第5層 | 平瓦 | | | 硬 | 淡灰色 | やや粗 | 凸面：斜格子タタキ後スリケシ 凹面：布目痕一部スリケシ 側端面ヘラケズリ |
| 13 | 第2区 | 第7層 | 平瓦 | | | 軟 | 淡灰色 | やや粗 | 凸面：斜格子タタキ後スリケシ 凹面：布目痕一部スリケシ 側端面：ヘラケズリ |
| 14 | 第2区 | 第1層 | 瓦質土器(鉢) | 口縁部 | 口径：不明 残存高：4.3 | 硬 | 淡灰白色 | 精良 | 外面：磨滅の為不明 内面：ヨコナデ 口縁面：ヘラ切り |
| 15 | 第2区 | 第6層 | 軒丸瓦(単弁八葉蓮華文) | 瓦当部片 | 推定直径：16.6 推定弁区径：12.2 弁幅：2.4 瓦当最大厚：2.0 | 硬 | 灰色 | やや粗 | 裏面：不定方向ナデ 下端部：ヨコナデ |

第2区 出土遺物観察表

5、小結

今回の調査では第1区で、平安時代以降の堤を確認し、第2区では心合寺の瓦を多く含む堆積を確認した。さらに心合寺山古墳の第5次調査では、墳丘西側くびれ部で平安時代を下限とする瓦を多く含む土層を、墳丘最下段上面からやや上で確認している。さて、心合寺の位置についてであるが、瓦の出土位置をはじめとしたこれまでの調査成果から、少なくとも平安時代については現在の新池、観音池の位置^(註4)を推定するのが最も自然である。心合寺山古墳の最下段の裾は現在の池の中と推定されるため、たとえ周濠が存在したとしても、白鳳時代にはある程度濠を埋めて整地したことは考えられる。しかし寺院の廃絶後、この部分は再び掘り直され、灌漑用のため池として利用されたようである。その際に西側および観音池との間の陸橋部分に土が盛られ、堤が嵩上げされたということも考えられる。新池、観音池の間の陸橋状の部分は少なくとも上方部分については、平安時代以降の盛土による堤体とみられる。しかしながら、心合寺山古墳の最下段裾が現況よりかなり低い位置に想定される現段階では、古墳築造当初の陸橋部の有無の確認は、この陸橋部分を深くまで断ち割って調査しない限り、判明しないであろう。いずれにせよ、心合寺山古墳西側の周濠及び外堤と心合寺との関係、そしてその後の池の利用のありかたといった事を明らかにするには、未だ発掘調査データが不足している。今回は限られた資料からの検討を試みたが、推論を重ねたに過ぎない。今後の調査データの増加を待ちたい。

本文註

註1 今回本文を作成するにあたって以下の資料を参考にした

佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58-2 1972年

森郁夫『瓦』ニュー・サイエンス社 1986年

上田陸『藤井寺及びその周辺の古代寺院(下)』藤井寺市教育委員会 1987年

上田陸「渡来系氏族の造った河内の寺院」『渡来系氏族と古代寺院』帝塚山考古学研究所 1994年

上田陸「河内・和泉の寺院と古墳」『季刊 考古学』第60号 雄山閣1997年

花田勝広・田中久雄『鳥坂寺-寺域の調査-』柏原市教育委員会 1989年

安村俊史「柏原市域出土平瓦の叩き目について」『摂河泉古代寺院論纂』第1集 摂河泉古代寺院研究会 摂河泉文庫 1997年

道 斎「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要』7 八尾市教育委員会 1995年

原田修・久貝健・島田和子「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』第2巻第2号 通巻第6号 大阪文化財センター 1976年

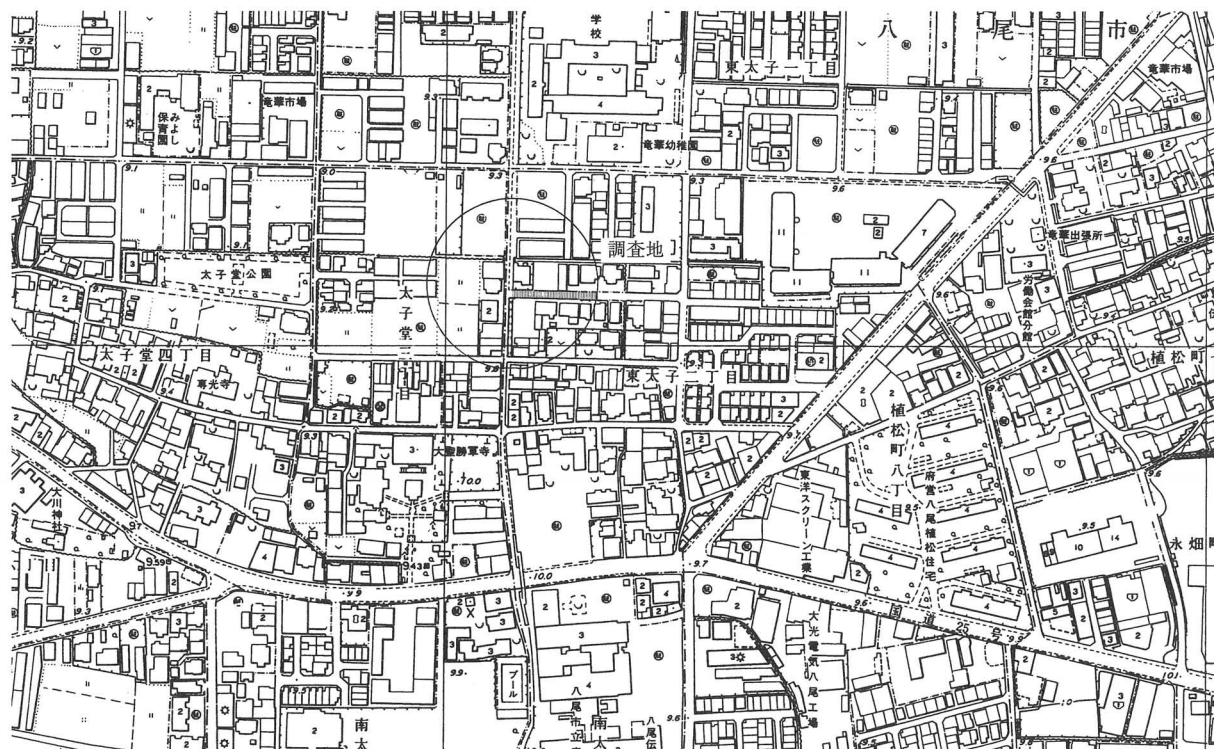
註2 『史跡心合寺山古墳第5次発掘調査-現地説明会資料-』八尾市教育委員会 1997年

註3 今回出土の軒丸瓦の所見で参考とした心合寺山古墳第5次発掘調査出土軒丸瓦については、藤井寺市教育委員会上田陸氏に実見していただきご教示をいただいた。今回の所見も氏のご教示に負うところが多い。記して謝意を表します。

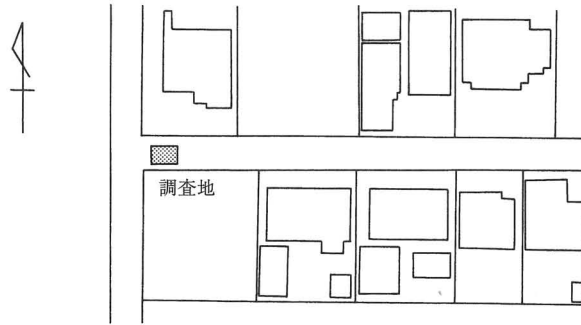
註4 心合寺の位置等について(財)八尾市文化財調査研究会原田昌則氏にご教示をいただいた。記して謝意を表します。

5. 太子堂遺跡 (96-724) の調査

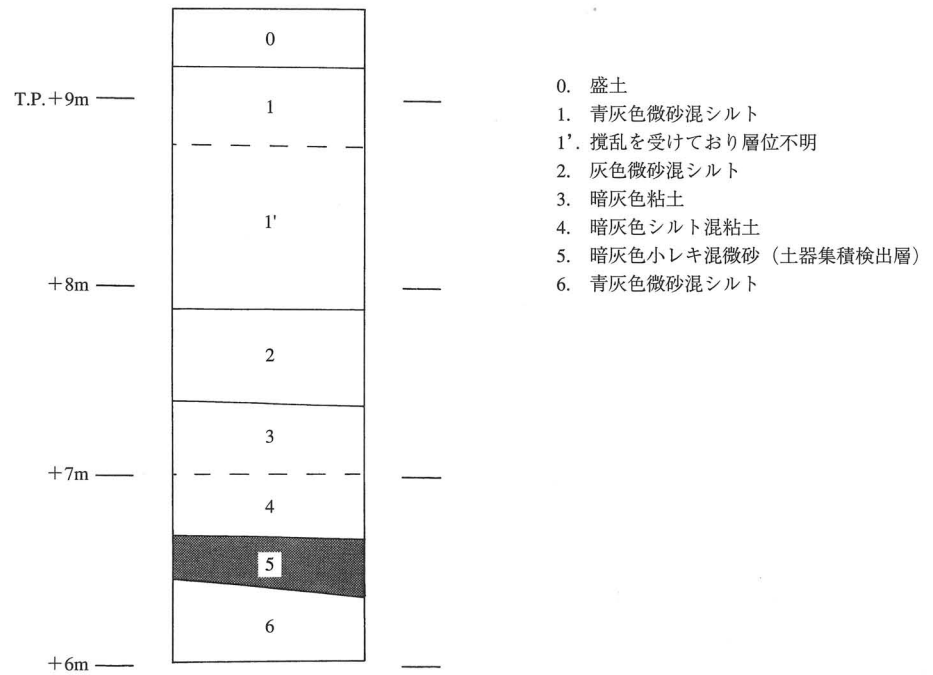
1. 調査地 東太子2丁目地内
2. 調査期間 平成9年7月29日
3. 調査方法 下水道工事に伴う人孔設置箇所について、南北1.5m×東西2.6mの範囲を地表下約3.5mまでを重機と人力掘削を併用して、遺構確認調査を行った。現地表面は、T.P.+9.45mを測る。
4. 調査概要
地表下約1.6mまでは、既設管等の攪乱を受けており、層序の確認はできなかった。そして、以下地表下1.6m～2.1mが、植物遺体等を含む灰色微砂混シルト層となる。この層からは、須恵器片や土師器片が少量出土している。おそらく、古墳時代後期以降の湿地帯等の堆積層と考えられる。
続いて、地表下約2.1m～2.8m(T.P.+7.35m～6.65m)には、土師器片を含む暗灰色粘土～シルト混粘土層があり、層境は明瞭でないものの、これらの層が弥生時代後期～庄内式期にかけての遺物包含層となると考えられる。
そして、この暗灰色粘土層の直下、地表下2.8mから3.1m(T.P.+6.65m～6.35m)の間の暗灰色小レキ混微砂層において、土器が集中して出土している。土器の出土位置は、調査区内のほぼ中央に集中しており、何らかの遺構内の土器集積と考えられる。但し、これら土器集積の出土層である暗灰色小レキ混微砂は、今回の調査区内のほぼ全面に広がっていたため、おそらく遺構内の一部の埋土を掘削したと考えられる。そのため、土器集積の帰属する遺構の性格は確認できなかったが、大きな溝等である推測される。
以下、地表下約3.5m (T.P.+6m) まで、青灰色微砂混シルト層が続く。



第30図 調査地周辺図 (1/5,000)



第31図 調査位置図 (1/600)



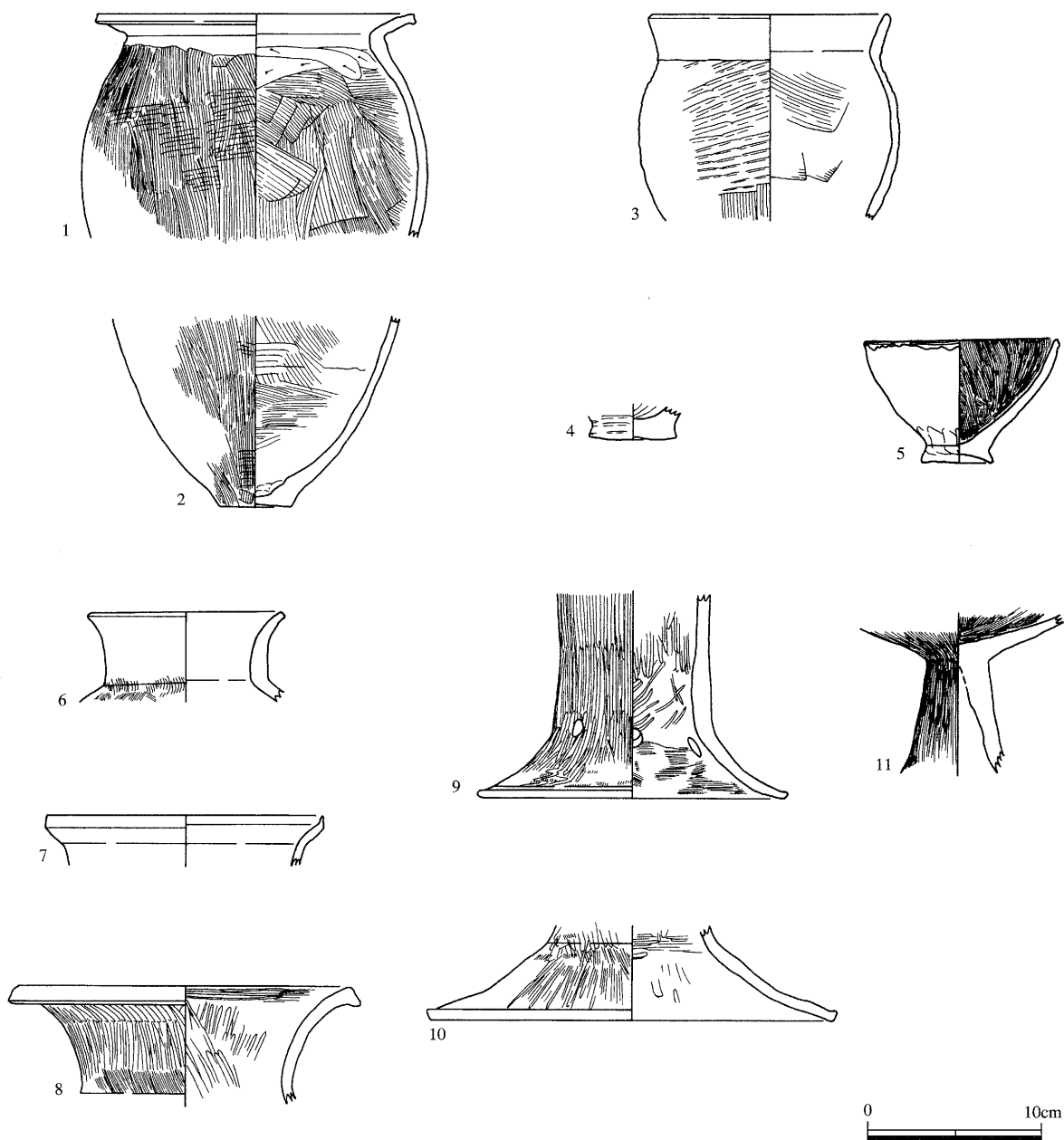
第32図 土層模式図 (1/40)

5. 出土遺物

土器集積の遺物は、少量の破片を除き、出土した11点が図化できた。

(1・2)は、甕の口縁～胴部(1)と底部(2)で、おそらく同一個体と考えられる。胴長の体部に中位より上部に最大径をもつ。外反する口縁部に、端面をもつ。外面は、やや粗目のタタキの後、全面に縦方向のハケを施す。内面は頸部下部付近をヘラケズリするものの、以下全面にハケを施す。(3・4)は、V様式系甕で、(3)は、やや小型の甕で、短い口縁部をもつ。内面はハケを施した口縁～胴部の破片である。(4)は底部の破片である。(5)は、小型鉢のほぼ完形品で、外面はナデ調整、内面はハケを施す。高台状の底部をもつ。

(6～8)は、壺の口縁部である。(6)は、直上に伸びた頸部に、やや短く口縁が外反する短頸壺である。(7)は、口縁部一部のみ残存しており、口縁部端部がつまみあがる。(8)は、口縁部が大きく外反する広口壺で、外面はヘラミガキを行う。



第33図 出土遺物実測図（1/4）

（9・10）は、円筒状の体部から裾の広がる器台脚部で、外面全体に縦方向の細かいヘラミガキを行う。

（11）は、高杯の杯部裾～脚部の破片である。外面に丁寧なヘラミガキを行う。

これら甕などの出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半の土器集積であると考えられる。

6. まとめ

今回の調査では、狭小な調査面積であったが、弥生時代後期の土器集積を検出することができた。太子堂遺跡における該期の集落が南域にも広がる一つの資料となる。

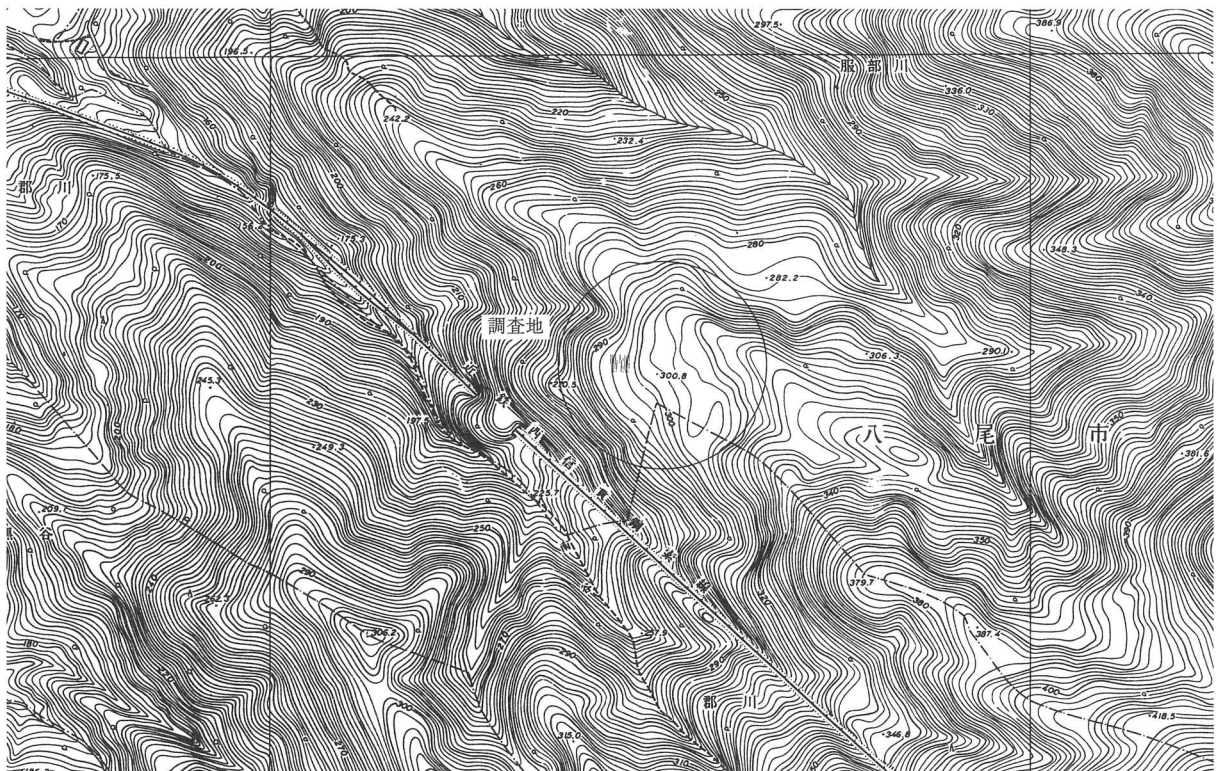
太子堂遺跡・跡部遺跡内及びその周辺は、ほとんどが市街地内にあり、大規模な調査は多くないが、中小規模な調査は数多く行われており、徐々に遺跡の内容が明らかになっている。今後、貴重な調査成果をもとに、遺跡の面的な広がりが把握できることを期待したい。

（藤井）

6. 高安古墳群 (97-12) の調査

1. 調査地 八尾市郡川728番地3
2. 調査期間 平成9年5月6日
3. 調査方法 八尾市都市整備部みどり室による「おおみちハイキング道」のバーゴラ設置に伴い、設置場所付近に1m四方の調査区を3箇所設定し、人力掘削により遺構確認を行った。

本調査地は八尾市の遺跡範囲では、高安古墳群に属するが、戦国時代末期の山城である信貴山城の出城と考えられている、高安山城関連遺跡の存在が注意される場所である。現況は高安山より北西方向に延びる尾根の先端地であり、明らかに人の手が加えられたとみられる平坦地であり、ハイキング道の休憩場所として植樹がなされている。南側の第1区では地表下0.4mで、中央の第2区では地表下1.04mで、北側の第3区では地表下1.34mで、岩盤風化状の地山である黄褐色礫混砂質土層を確認した。この上には地山の可能性もある粘質土の4層、植木の入れ土かとみられる2・3層が堆積する。第2区の3-B層より、布留式とみられる土師器小片が出土したが、混入とみられる。同区3-D層からは摩滅した土師器小片が出土した。調査区からは高安山城関連の遺物は出土しなかったが、旧地形が北東方向に急傾斜をしていることが判明した。地形測量図を観察すると、この調査地の南東側は尾根地形を人為的に削平して平坦地を造りだした、谷状のコンターラインがみえる。また現地を踏査すると尾根の南西から北西辺に沿って、幅2～6m、高さ0.5～3.0mの高まりが長さ55mにわたってみられる。これは明らかに尾根を削りだして人為的

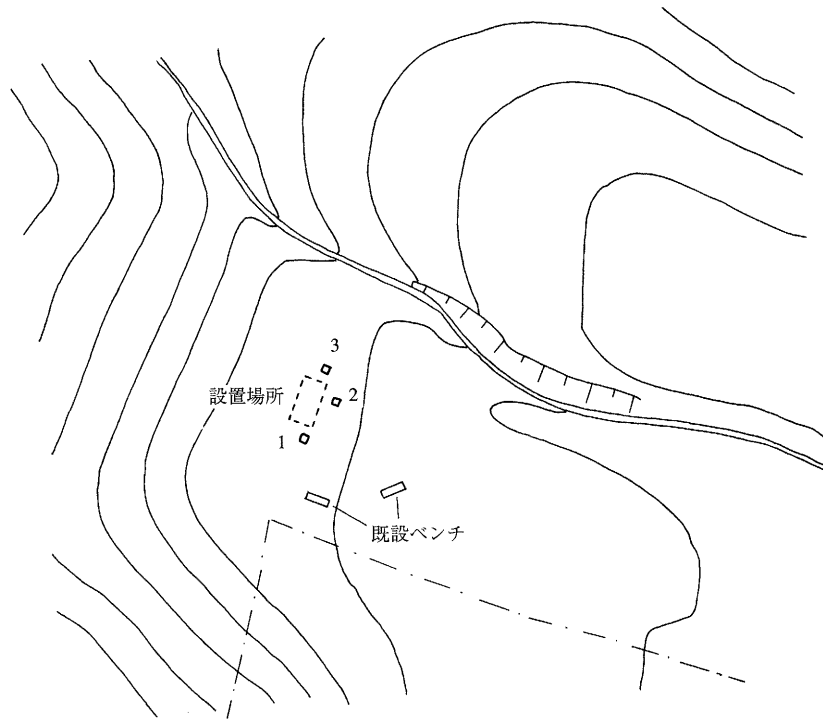


第34図 調査地周辺図 (1/5,000)

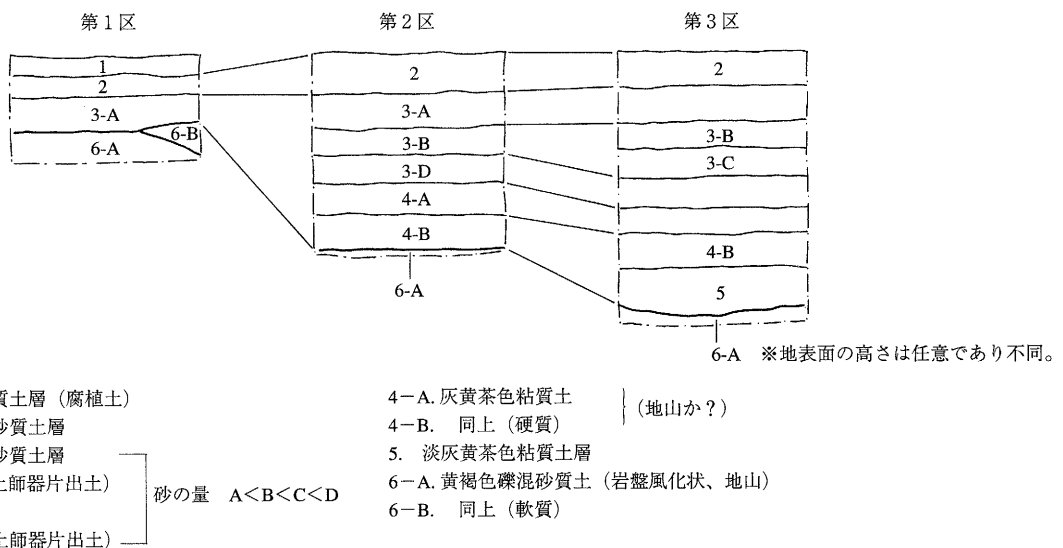
に積み上げたものである。地表面に遺物はみられなかった。

当調査地付近は「松ゴ谷」の字名が残っており、尾根の上方には「四百殿」、高安山頂には「城跡」の字名が残っている。山麓全体は終戦後の開墾が行われているとのことであるが、今回の調査地周辺の人為的な地業跡が、高安山城に関連する郭の土塁等の遺構の可能性もある。今後さらに高安山西斜面の広範囲な踏査を進めていく必要がある。

(吉田野々)



第35図 調査区設定図 (1/500)



- | | | |
|------------------|--------------------------|----------|
| 1. 茶灰色砂質土層 (腐植土) | 4-A. 灰黄茶色粘質土 | } (地山か?) |
| 2. 暗灰黄色砂質土層 | 4-B. 同上 (硬質) | |
| 3-A. 灰黄色砂質土層 | 5. 淡灰黄茶色粘質土層 | |
| 3-B. 同上 (土師器片出土) | 6-A. 黄褐色礫混砂質土 (岩盤風化状、地山) | |
| 3-C. 同上 | 6-B. 同上 (軟質) | |
| 3-D. 同上 (土師器片出土) | | |

第36図 調査区土層断面略測図 (1/40)

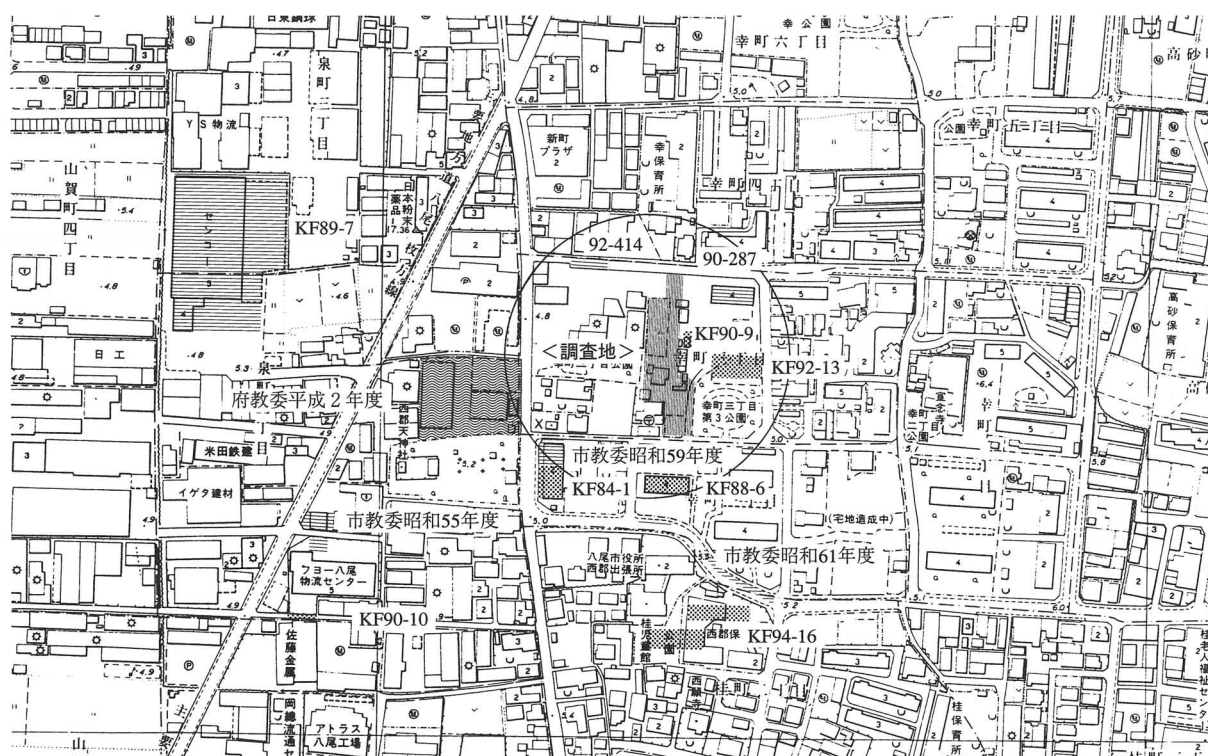
7. 西郡廃寺遺跡 (96-446) の調査

1. 調査地 幸町3丁目93-1他
2. 調査期間 平成8年12月16日～18日 (第1調査区)
3. 調査方法 平成9年1月8日・9日 (第2調査区)

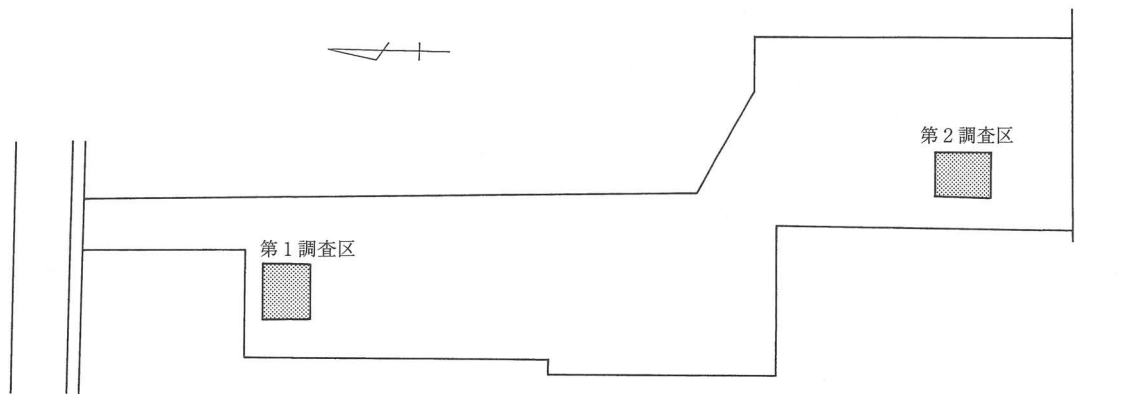
改良事業室 (現・用地第一課) の依頼に基づき、公園造成に付随する機械室及びポンプピットの設置に伴い、それぞれ2ヶ所の掘削箇所についての遺構確認調査を行った。調査を先行して行った公園予定地北側の調査区を第1調査区とし、第1調査区から南に約70m離れた調査区を第2調査区とした。[第38図 調査区設定図]

それぞれの調査区は、約4m×約3mの範囲で、地表下1m前後の盛土部分を重機で掘削し、以下地表下約1.6m前後までを人力掘削によって調査を行った。それ以下の層は、部分的に土層の確認を地表下約2.6mまで行った。なお、第1・第2調査区とも、それぞれ完結した調査区であるため、それぞれの調査区ごとに報告を行うことにする。

4. 第1調査区 層厚1m前後の盛土 (第0層・現地表T.P.+5.2m) を除去すると、旧耕土面となる暗灰色粘土 (第1層) が一部に見られた。しかし、そのほとんどが現地表までの盛土を行った時に削平を受けたと考えられ、そのため、その下層にあたる地表下1.0～1.2mの層厚約0.25mの暗青灰色粘質土 (第7層・T.P.+4.2m～4m) が調査区全域に広がっていることを確認している。そして、この上面においては、耕作等に伴うと考えられる溝状の遺構等を確認しており、[第1面] とした。さらに、このベース層中には、土師器・瓦器・須恵器・瓦・弥生土器の破片が含まれており、弥生時代後期～近世の遺物包含層となる。



第37図 調査地周辺図 (1/5,000)



第38図 調査区設定図 (1/800)

続いて、地表下1.2m～1.55mの層厚約0.25m前後の褐色砂混粘質土（第10層：T.P.+4.0m～3.7m）が〔第2面〕の遺構検出面となり、主に弥生時代後期から庄内式期の遺構を多数検出している。ただし、何時期かの遺構が重複していたと考えられ、弥生時代後期～近世の遺構をほぼ同一遺構面で検出している。

そして、この庄内式期のベース層となる褐色砂混粘質土の直下、地表下1.4m～1.75m（T.P.+3.8m～3.45m）にある暗青灰色砂質土～炭混粘土が、弥生時代後期の遺物包含層及び一部遺構の覆土と考えられる。しかし、上面の庄内式期の遺構に削平を受けており、遺構を面的に捉えることができなかった。

以下、地表下1.5m～2.7mの黄褐色細砂～灰色粗砂（第18・20層：T.P.+3.7m～2.5m）が弥生時代後期以前の河川堆積層と考えられる。今回の掘削深では、この河床は、確認できなかった。

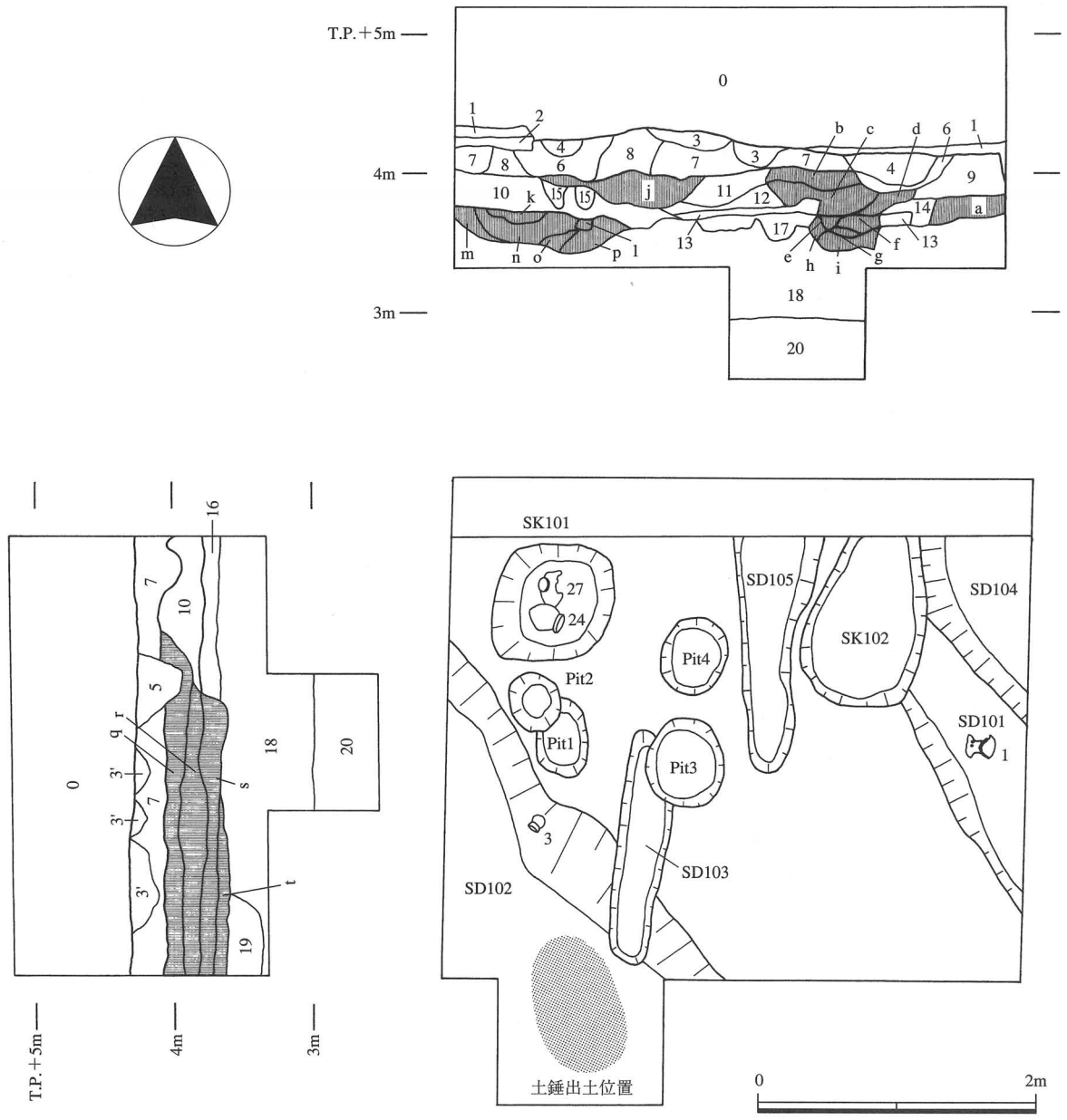
5. 第1調査区
検出遺構と
出土遺物
〔第40図〕

検出した遺構面は、主に〔第2面〕の弥生時代後期の遺構と庄内式期の遺構があるものの、同一遺構面に何時期かの遺構を確認している。そのため、時代ごとに検出した遺構について述べることにする。

・弥生時代後期 検出した遺構は、溝〔SD101〕1条のみである。その他に該期の遺物が出土したのは、遺物包含層からである。これらは、弥生土器の破片のみで、図化できるものはなかった。

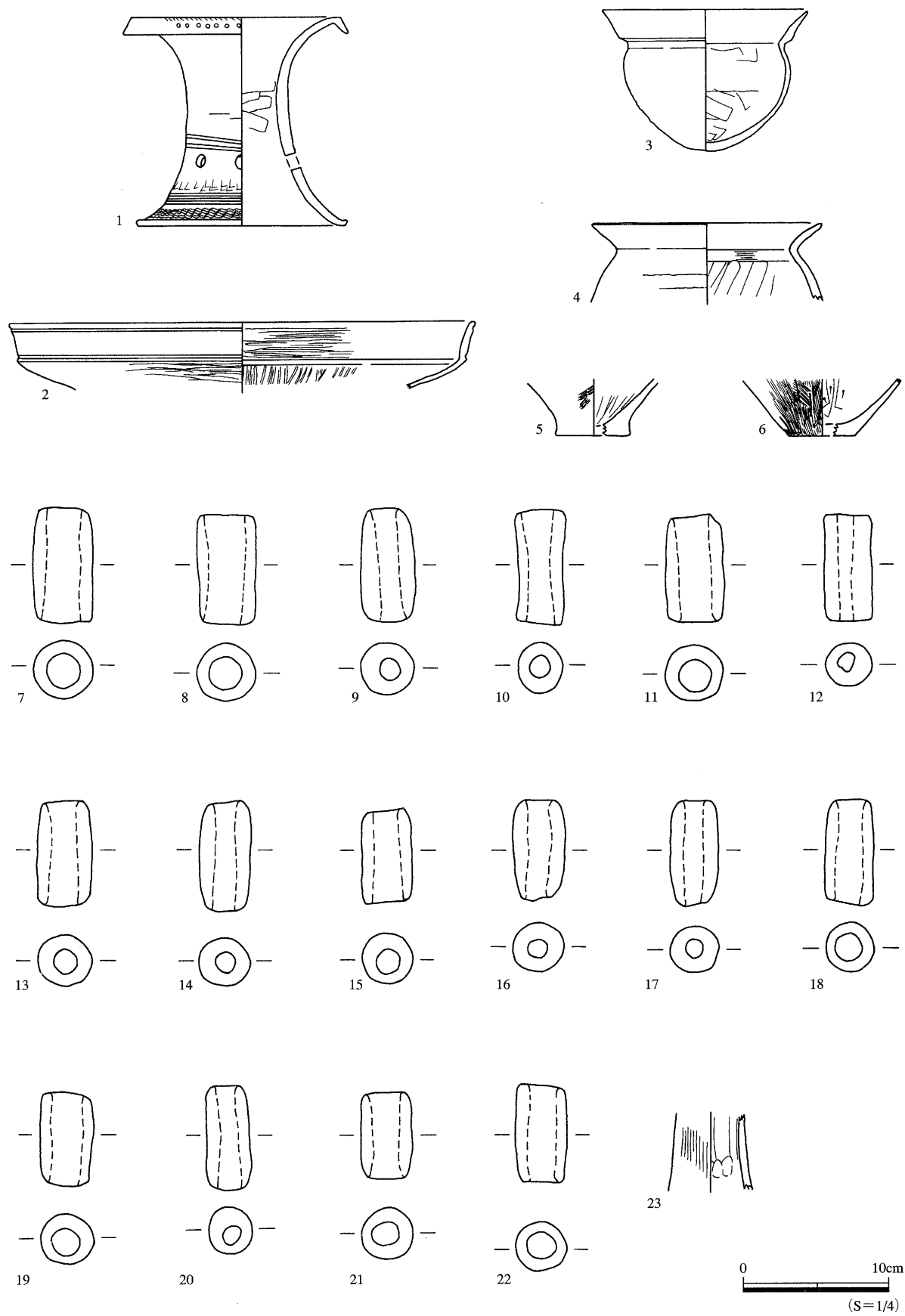
〔SD101〕：調査区東端で検出した。近世の溝（SD104）や土坑（SK102）によって削平を受けており、溝の西側肩部から底面にかけての一部を検出している。この溝の下層埋土と同様の層の一部を北壁段面においても確認しており、北西－南東方向に続く溝であったと考えられる。検出長約2.0m、残存最大幅0.75m、深さ約0.15mを測る。断面は、緩やかな逆台形状を呈し、埋土は、上層が淡青灰色粘土、下層が淡青灰色シルト混微砂であった。

出土遺物には、溝底面で出土したほぼ完形の器台（1）と高杯口縁部の破片（2）がある。（1）は、円筒状の体部から、上下に外反する形態で、そして、短く斜方向に垂下する口縁をもち、口縁部端面に刺突文・列点文を施す。胴部下半部の6ヶ所の円孔の上部にやや雑な4条の沈線を施し、裾部に向かって5条の沈線、波状文を施す。色調は赤橙色を呈す。（2）の杯部の破片は、復元径約17cmを測る。色調は、暗褐色を呈す。これら2点の出土遺物から、弥生時代後期の溝であると考えら



- | | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 0. 盛土 1. 暗灰色粘土 2. 暗褐色シルト混粘土 3. 青灰色粘土 (Fe混) 3'. 暗青灰色砂混粘土 4. 淡褐色砂混粘土 (赤褐色粒混) 5. 暗灰色砂混粘土 6. 黒灰色シルト 7. 暗青灰色砂混粘質土 (Fe混) 8. 暗褐色シルト混粘土 9. 淡青灰色シルト混粘土 [SD104] 埋土 10. 褐色砂混粘質土 (Fe混) 11. 淡青灰色粘質土 12. 淡青灰色微砂シルト 13. 淡青灰色微砂質土 14. 淡明褐色微砂 (Fe混) 15. 青灰色粘砂 16. 暗青灰色砂質土 (褐色粒混) 17. 灰色微砂 18. 黄褐色細砂 19. 灰色細砂 20. 灰色粗砂 | <ul style="list-style-type: none"> a. 淡青灰色シルト混微砂 [SD101] 埋土 b. 暗青灰色微砂質土 c. 黒褐色砂質土 (Fe混) d. 淡灰色粘砂 (Fe混) e. 暗青灰色微砂シルト f. 暗青灰色粘砂 (Fe混) g. 黒色粘性シルト h. 淡青灰色微砂 i. 黒色炭混粘性シルト [SK102] 埋土 j. 黒褐色シルト (Fe混) [北壁土坑] 埋土 k. 灰褐色粘土 l. 明灰色シルト m. 青灰色シルト n. 暗青灰色炭混粘土 o. 淡灰色細砂 p. 暗青灰色炭混粘土 [下層土坑] 埋土 | <ul style="list-style-type: none"> q. 淡青灰色粘質土 r. 淡青灰色砂混シルト (淡褐色粒混) s. 暗灰色炭混粘性シルト t. 淡灰色微砂 [SD102] 埋土 |
|---|--|--|

第39図 土層断面図・遺構平面図 (第1調査区・1/50)



第40図 出土遺物実測図（第1調査区その1）

れるが、庄内式期の溝とした〔SD102〕と検出した方向がほぼ平行であることから、庄内式期の溝である可能性もある。

・庄内式期 検出した遺構は、溝〔SD102〕、土坑〔SK101・SK102〕、ピット〔Pit1/Pit2〕がある。

〔SD102〕：調査区西端で検出した北西－南東方向の溝である。断面は逆台形状を呈す。北東側の肩部のみ検出しており、南西側の肩部は調査区外に続くと考えられる。検出長約3m、検出幅約1.5m～1.8m、深さ約0.4m～0.6mを測る。埋土は、上層から淡青灰色粘質土、淡青灰色砂混シルト、暗灰色炭混粘性シルト、淡灰色微砂である。そして、溝南端付近では、管状土錘16個体（7～22）と製塩土器1片（23）が集積して出土している。出土層位は、上層の淡青灰色砂混シルトである。また、北東側肩部より小型壺（3）の完形が1点出土している。

〔SD102〕の出土遺物： 溝の出土遺物には、図化できたものとして小型壺（3）、弥生土器の甕口縁（4）、底部の破片（5）・（6）、集積の管状土錘（7～22）、製塩土器片（23）がある。その他に、庄内式甕、V様式系甕の破片などが含まれている。これら出土遺物から、弥生時代後期の土器は含まれているものの、庄内式期の時期の遺構であると考えられる。

小型壺（3）は、斜上方に直線的に伸びる口縁部を持ち、体部は球形ながら、底部はやや尖り気味である。外面調整は、剥離が激しく不明である。色調は、赤褐色を呈す。焼成はやや軟質である。

管状土錘（7～22：第1表 管状土錘法量表 参照）は、形状と重量から、100g前後以上（7～12）、90g～80g（13～18）、70g前後（19～22）に分けられる。出土状況からは、使用形態等は判断できなかった。

第1表 〔SD102〕管状土錘法量表

| 実測No. | 長さ (cm) | 最大径 (cm) | 最大孔径 (cm) | 重量 (g) |
|-------|---------|----------|-----------|--------|
| 7 | 8.1 | 4.2 | 2.5 | 115 |
| 8 | 7.6 | 4.2 | 2.4 | 110 |
| 9 | 8.0 | 3.8 | 1.6 | 105 |
| 10 | 8.1 | 3.7 | 1.6 | 100 |
| 11 | 7.5 | 4.1 | 2.2 | 100 |
| 12 | 7 | 3.3 | 1.4 | 98 |
| 13 | 7.5 | 4.0 | 1.7 | 90 |
| 14 | 7.8 | 3.6 | 1.4 | 88 |
| 15 | 6.7 | 3.6 | 1.7 | 80 |
| 16 | 7.1 | 3.8 | 1.3 | 80 |
| 17 | 7.4 | 3.4 | 1.3 | 80 |
| 18 | 7.2 | 3.4 | 1.8 | 78 |
| 19 | 6.8 | 3.8 | 2.0 | 70 |
| 20 | 7.3 | 3.3 | 1.2 | 69 |
| 21 | 6.1 | 3.6 | 1.8 | 69 |
| 22 | 6.9 | 3.65 | 1.9 | 70 |

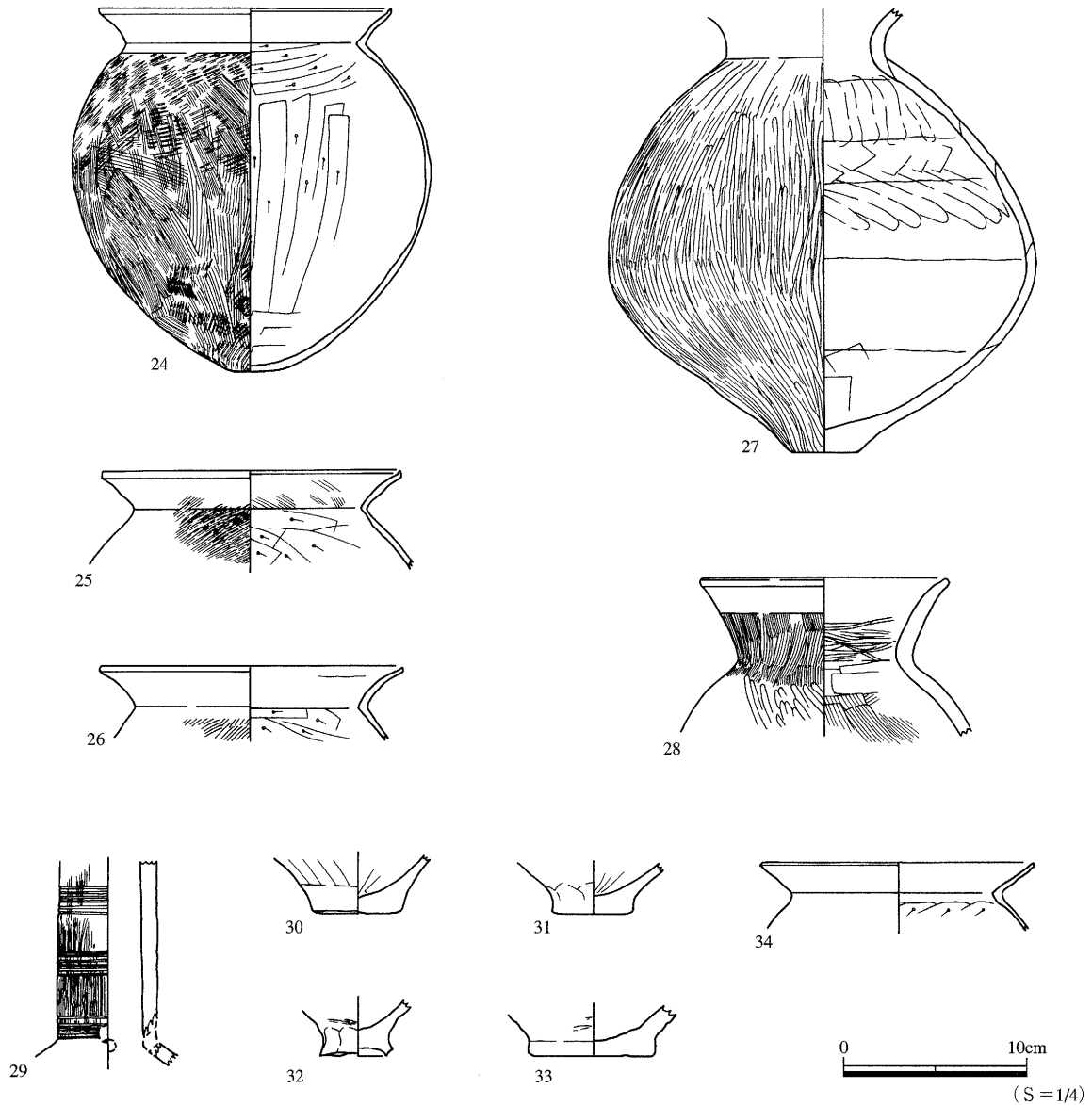
〔SK101〕：SD102の北東側で検出した。

直径約0.9m～0.95m、深さ約0.3～0.35mの隅丸方形の土坑である。埋土は暗灰色炭混粘質土（Fe粒混）である。土坑中央部には、庄内式甕（24）と短頸壺（27）の2点の完形品が据えられていた。その他埋土下層からの出土遺物には、庄内式甕の口縁部（25・26）、直口壺（28）の口縁部破片がある。

庄内式甕（24）は、体部中位よりやや上に最大径をもつ。底部は、やや尖り気味の小さな平底である。外面調整は、右上がりのタタキの後、中位より下部はハケを施す。

短頸壺（25）は、頸部はすべて残っていなかったものの、ほぼ完形である。下膨れの器形に平底を持つ。外面全体に縦方向のヘラミガキを施す。

これら出土遺物の特徴から庄内式期Ⅱ－Ⅲの時期の土坑であると考えられる。



第41図 出土遺物実測図（第1調査区 その2）

[SK102]：北壁土層にて、断面確認した不定形の土坑状の遺構である。上面では幅約1.1m、底面では幅約0.35mがあり、深さ約0.6mを測る。この土坑は、湧水層まで掘り込まれていることから、井戸の可能性もある。

出土遺物には、図化できたものでは、埋土最下層の黒色炭混粘性シルトより高杯の柱状脚の破片（29）、底部の破片（30～33）があり、すべて弥生時代後期の遺物であるが、その他の出土遺物の中に、庄内式甕の破片があったことから、庄内式期の遺構と考えられる。

[Pit1]：SK101の南側で検出した東西幅約0.4m、南北幅約0.55mの楕円形のピットで、Pit2に先行する。深さは、約0.3mある。埋土は、暗青灰色粘砂である。

出土遺物は、ほとんどが細片で壺体部の破片などがあったが、1点だけ図化できた。甕の口縁の破片（34）で、口縁の形状は、庄内式甕に似るものの、外面調整にタタキを行わず、ヨコナデが見られる。

[P i t 2] : P i t 1を一部切る形で掘り込まれている、直径約0.4 m、深さ約0.2mのピットである。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は、土器細片少量のみであった。

・中世～近世 検出した遺構は、溝 [SD 1 0 3・SD 1 0 4・SD 1 0 5]、土坑 [SK 1 0 2]、ピット [P i t 3 / P i t 4] がある。埋土の状況から、[SD 1 0 3] (中世?) 以外は、ほぼ同一の時期 (近世以降) の遺構であると考えられる。

[SD 1 0 3] : SD 1 0 2の上面で検出しており、一部重なる部分がある。検出長約1.7m、幅約0.35m、深さ0.1mを測る。埋土は黒灰色粘砂である。土器は出土していないが、棒状の鉄塊片が出土している。

[SD 1 0 4] : SD 1 0 1を削平している北西-南東方向の溝で、調査区北東部隅で検出した。深さ約0.3m埋土は淡青灰色シルト混粘土である。出土遺物には、陶磁器・須恵器・土師器などがある。

[SD 1 0 5] : 調査区中央北側で検出した幅約0.65m～0.3m、検出長約1.7m、深さ約0.3mの溝である。埋土は、暗青灰色粘砂である。遺物は出土していない。

[SK 1 0 2] : SD 1 0 5の東側で検出した東西長約0.9m、南北長約1.2m、深さ約0.25mの土坑である。埋土は、暗青灰色粘砂である。出土遺物には、細片ながらV様式系甕、弥生土器がある。おそらく、SD 1 0 1を削平した時の遺物であると考えられる。

[P i t 3] : P i t 3の南側で検出した一部SD 1 0 3に重なる直径約0.6m、深さ約0.3mのピットである。埋土は、暗青灰色粘砂である。出土遺物には、V様式の高杯杯部の破片がある。

[P i t 4] : SD 1 0 5の西側で検出した直径約0.5m、深さ約0.1mのピットである。埋土は、暗青灰色粘砂である。遺物は出土していない。

6. 第1調査区の まとめ

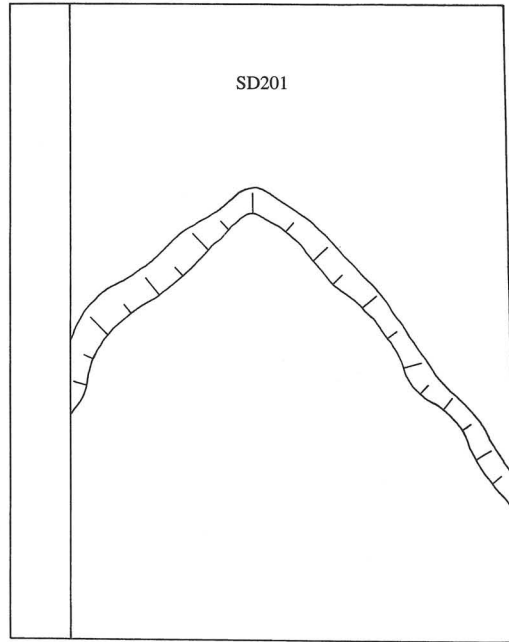
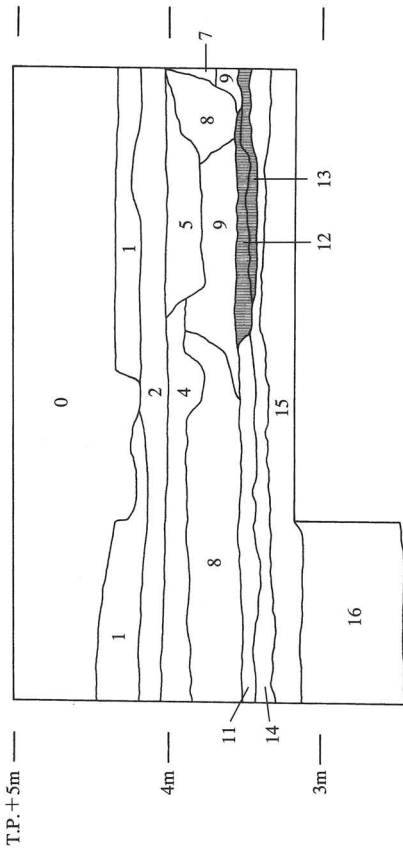
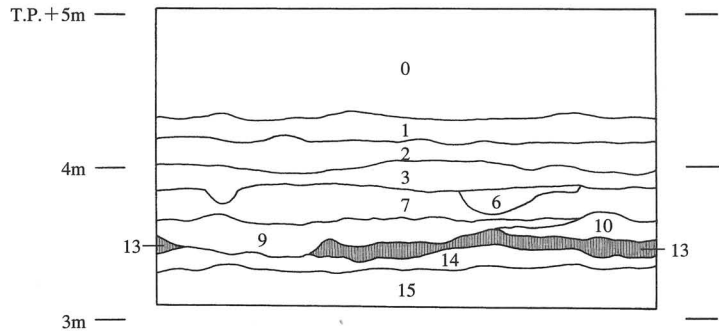
第1調査区では、T.P.+4.0m前後において、庄内式期を中心とした遺構を多数検出した。これら遺構面は、弥生時代後期の遺物包含層・遺構面の上面に形成されており、弥生時代後期から引き続いて、庄内式期においても集落域の中心であったと考えられる。庄内式甕などの完形品が埋設された土坑や管状土錘の集積が検出された溝など、今後、西郡廃寺遺跡における該期の集落の広がりを考える上で重要な資料となろう。

ただし、この調査区では、遺跡の名称となる「西郡廃寺」に関連する遺構等は確認できず、数点の平瓦小片が上層で出土したのみであった。今後の周辺での調査に期待したい。

7. 第2調査区 基本層序 [第42図]

層厚約0.6m～0.7mの盛土 (第0層・現地表T.P.+5.05m) を除去すると、旧耕土面となる暗灰色シルト混粘質土 (第1層:T.P.+4.3m) ・淡灰色シルト質粘土 (第2層:T.P.+4.15m) が層厚約0.36mで見られた。また、一部に公園造成以前の建物の基礎等の攪乱層がある。

以下、地表下1.2m前後 (T.P.+3.85m) から南側に落ち込んでいく明褐色シルト質粘土 (第8層) から、須恵器・土師器の破片が出土している。この層は、西壁でのみ確認しており、遺構の覆土の可能性が高い。時期については、おそらく、古墳



- 0. 盛土
- 1. 暗灰色シルト混粘質土
- 2. 淡灰色シルト質粘土 (褐色粒混)
- 3. 淡青灰色砂混粘土
- 4. 淡茶褐色シルト質粘土
- 5. 暗青灰色シルト混粘砂
- 6. 暗灰色粘砂
- 7. 暗青灰色微砂質土
- 8. 明褐色シルト質粘土 (Fe混)
- 9. 暗灰褐色シルト質粘土 (青灰色混・Fe若干含む)
- 10. 暗茶褐色粘質土
- 11. 暗褐色シルト混粘質土
：弥生時代後期ベース面
- 12. 暗褐灰色シルト質粘土
- 13. 暗褐色シルト混粘土
〔12・13層 SD201 埋土〕
- 14. 暗灰色シルト混粘土
- 15. 淡青灰色粘性シルト (褐色粒混)
- 16. 明青灰色微砂混シルト

第42図 土層断面図・遺構平面図 (第2調査区・1/50)

時代後期以降であると考えられる。

そして、落ち込みのベース層となる地表下1.2m～1.4m (T.P.+3.85m～3.65m : 層厚約0.2m) の暗灰褐色シルト質粘土 (第9層) が、弥生時代後期の遺物包含層となり、弥生土器の破片が含まれている。そして、地表下1.4mの暗褐色シルト質粘土 (第11層 : T.P.+3.65m) をベースとして、遺構面を検出している。検出した遺構は、落ち込み状遺構 [SD201] がある。

以下、遺構・遺物ともに確認できず、今回の調査における最下層である地表下1.9m～2.6m (T.P.+3.15m～2.4m) の明青灰色微砂混シルト (第16層) があって、第1調査区のように河川堆積層は確認できなかった。

8. 第2調査区
検出遺構と
出土遺物
[第43図]

検出した遺構は、弥生時代後期の遺構である [SD201] のみである。

[SD201] : 調査区のほぼ全域を占める落ち込み状の遺構で暗褐色シルト質粘土をベースとして、調査区北西から北側―南東側にかけて落ち込んでいき、断面は皿状を呈す。深さ約0.1m～0.15mを測る。検出した平面プランによると、やや直角に屈曲し、調査区外に続いていくようであった。一辺約2.5m以上の方形周溝墓の溝・及び削平された墳丘面である可能性も考えたが、出土遺物の状況等から現状では、落ち込み状の遺構であると考えたい。

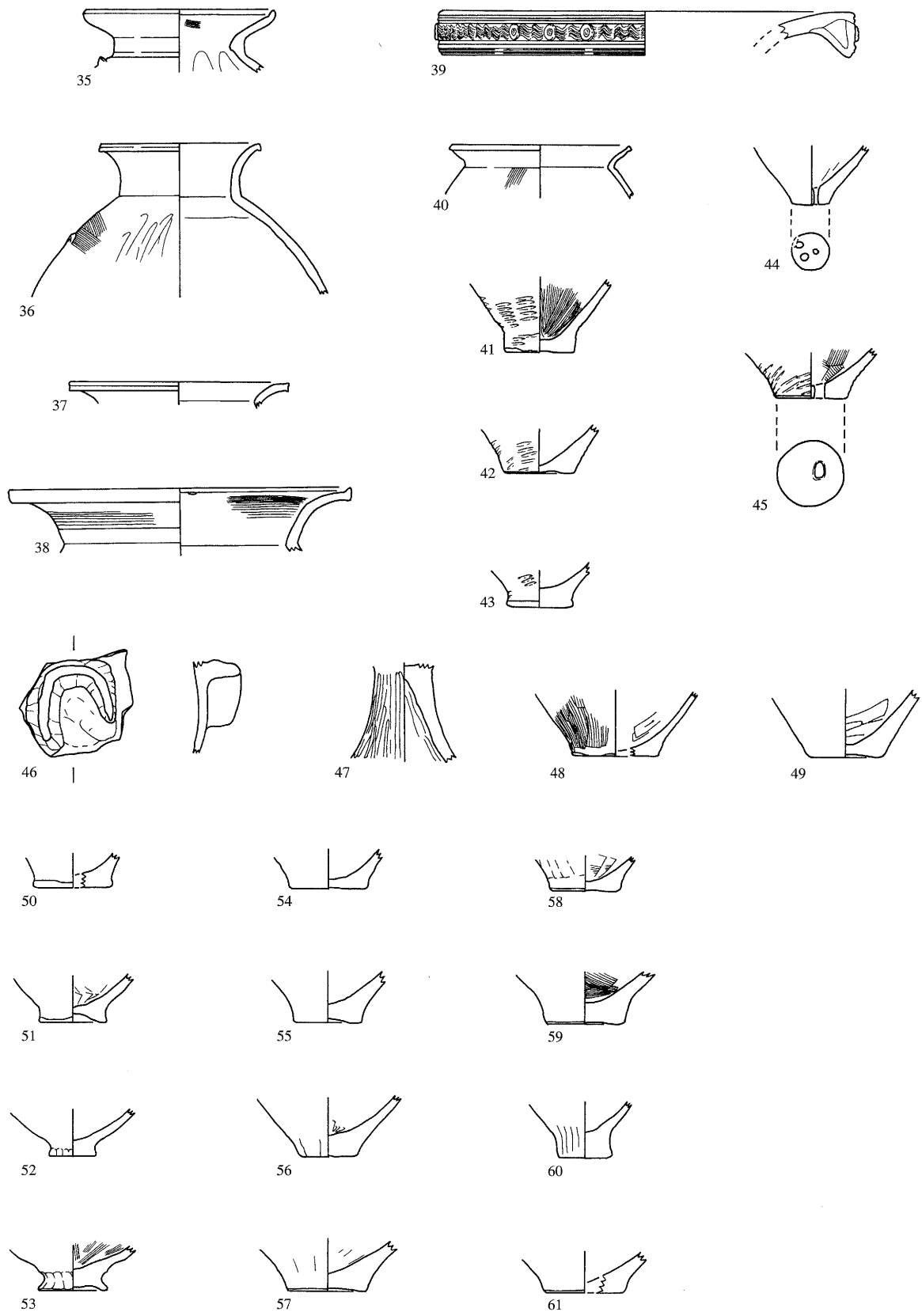
埋土は、上層は暗褐灰色シルト質粘土 (第12層)、下層では暗褐色シルト混粘土 (第13層) である。検出した落ち込みの埋土中のほぼ全域に土器が広がっており、これら2層から、V様式の弥生土器の破片が多数出土している。ほとんどが破片であったが、そのうち図化できたのが、27点ある。

[SD201] の出土遺物 : 出土遺物には、完形品は含まれておらず、底部等の破片がほとんどであった。その量は、コンテナ1箱ほどになる。このことから、[SD201] は土器の廃棄場であった可能性が高い。その中で図化できたのが、広口壺の口縁部 (35～39)、甕 (口縁部 : 40・底部 : 41～43)、有孔鉢の底部 (44・45)、二次焼成を受けた大型鉢の把手の部分 (46)、高杯脚柱部 (47)、その他底部の破片 (48～61・甕? : 50・51, 小型鉢 : 52・53) がある。

(35) は、短い頸部から外反し端部を摘み上げる口縁部をもつ。(36) は、直立した頸部から短く外反する口縁部をもつ。また体部肩部に粘土塊の痕跡を残す。外面調整はハケである。(37)・(38) は、口縁部の破片で、外反する口縁端部をもつもの (37) と短く口縁端部を摘み上げるもの (38) とに分けられる。(39) は、加飾された口縁部である。端部外面は、凹線紋の間に波状文を施し、円形浮文をつける。また、端部上面にも波状文を施す。色調は、暗褐色を呈す。

甕の口縁部 (40) は、やや薄い器壁に、外反する口縁部をもつ。外面調整はハケであった。V様式系甕の底部には、突出するもの (41) もあったが、タタキが底部にまで及ぶ突出しないもの (42・43) がほとんどであった。有孔鉢 (44・45) においても突出しない底部をもつものであった。そして、内面調整には、ハケを施すもの (41・45) が一部見られた。その他に、甕の破片の中には、内面をヘラケズリを行うものが含まれている。

[SD201] は、これら出土遺物から、弥生時代後期末の遺構であると考えられる。



0 10cm
(S=1/4)

第43図 出土遺物実測図 (第2調査区)

9. 第2調査区のまとめ 第2調査区では、T.P.+3.6m前後において弥生時代後期末の遺構面を検出した。検出したのは、落ち込み状遺構 [SD201] のみであったが、その出土遺物には、破片が大部分であるものの多数の出土を見た。

調査地周辺には、該期の集落が広がっていると考えられ、その中で土器の廃棄場ともいふべき遺構の存在は、第2調査区南約40mで行われた萱振遺跡第6次調査((財)八尾市文化財調査研究会1996)で検出された弥生時代後期後半の焼失竪穴住居群と合わせて、興味深い資料となろう。集落の範囲は不明であるが、おそらく今回の調査区は北端に位置していると考えられる。

第1調査区のように庄内式期の遺構は確認できなかったものの、第2調査区や周辺の既往の調査から考えて、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落はかなりの範囲に広がることが予想できよう。

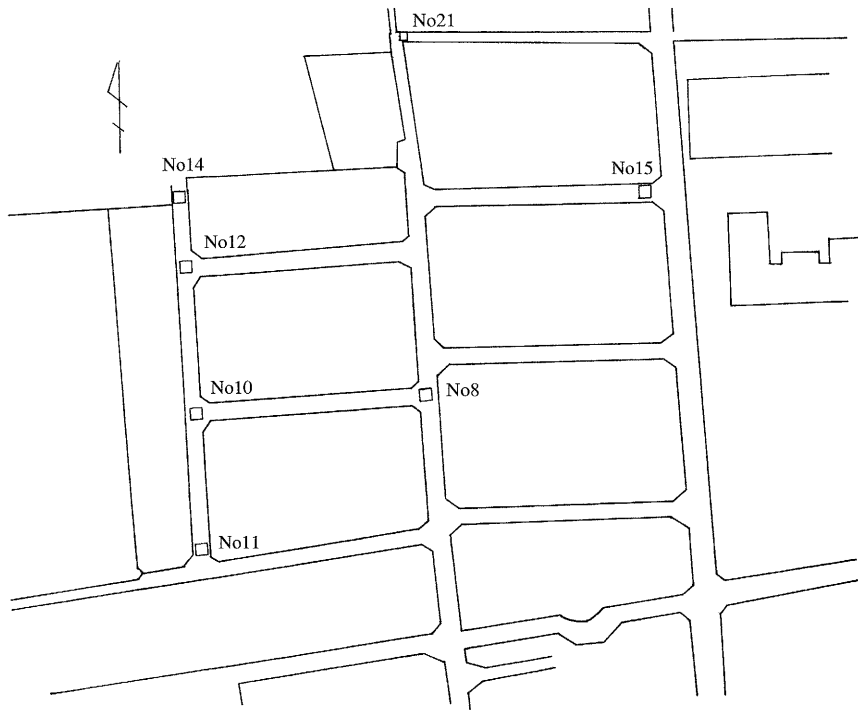
(藤井)

【参考文献】

八尾市教育委員会 1991「萱振遺跡(90-287)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書I』

(財)八尾市文化財調査研究会 1991「Ⅲ. 萱振遺跡(第9次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告32』

(財)八尾市文化財調査研究会 1996「Ⅰ. 萱振遺跡(第6次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究報告52』



第45図 調査位置図 (1/1,000)

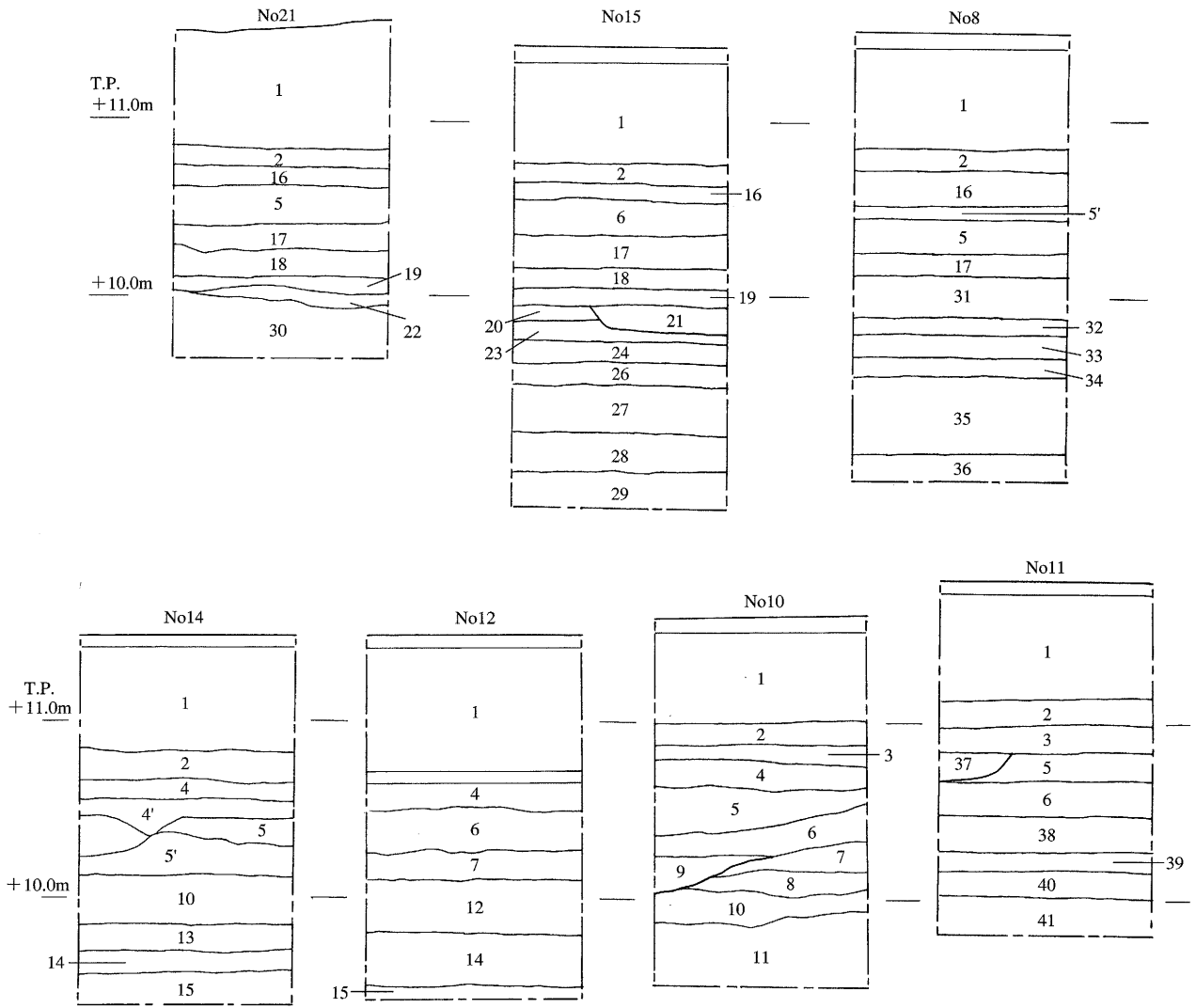
師器の細片をわずかに含む⑬層暗灰色微砂混粘土を検出したが、植物遺体が混じっており、沼状地帯に近接していることが推定される。

No14人孔…現地表T.P+11.49m。地表下0.95m～1.2m (T.P+10.54～10.29m) の④'層淡褐色粘砂及び⑤層茶灰色粘砂で土師器小片がみられた。そして⑤層と⑤'層の北側では、これを削る砂質土の堆積を確認したが、既設のガス管があったため人為的なものかどうかは明確にはしえなかった。

No12人孔…現地表T.P+11.50m。地表下1.24m (T.P+10.26m) の⑦層明オリーブ灰色粘質土で羽釜、土師器片が出土し、T.P+10.15mの⑫層淡オリーブ灰色砂質土で南北方向の溝を検出した。深さ0.3mを測り、埋土は茶灰色～青灰色粘土で羽釜片や土師器片が出土している。包含層及び溝出土遺物などからみて平安時代末～鎌倉時代初頭の時期が考えられる。

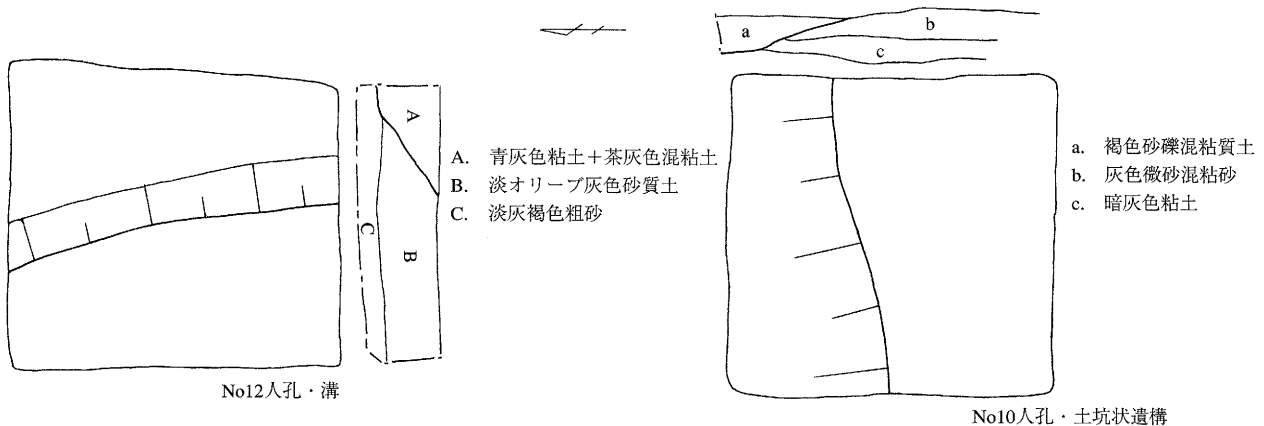
また、遺構のベースである⑫層中には土師器鍋の把手、鏝甕や須恵器の壺などの破片が含まれており、奈良～平安時代の包含層となっている。しかし、下部T.P+9.84mの⑭層灰色微砂混シルト上面では遺構は検出できなかった。

No10人孔…現地表T.P+11.61m。地表下1～1.24m (T.P+10.61～10.37m) の⑥層褐色粘質土に瓦器、土師器の細片が含まれている。そして下部の⑦層 (T.P+10.33m前後) を切り込む形で、調査区の北側部分で東西方向に⑨層褐色砂礫混粘質土が固くしまった状態で堆積していた。確認できた最深部で0.2mを測り、砂礫中に丸瓦やⅣ-1期の瓦器碗片が混じっている。堆積中の砂礫はベース上面などではみられず、人為的に砂礫を粘質土に混ぜて構築したものであることが推定される

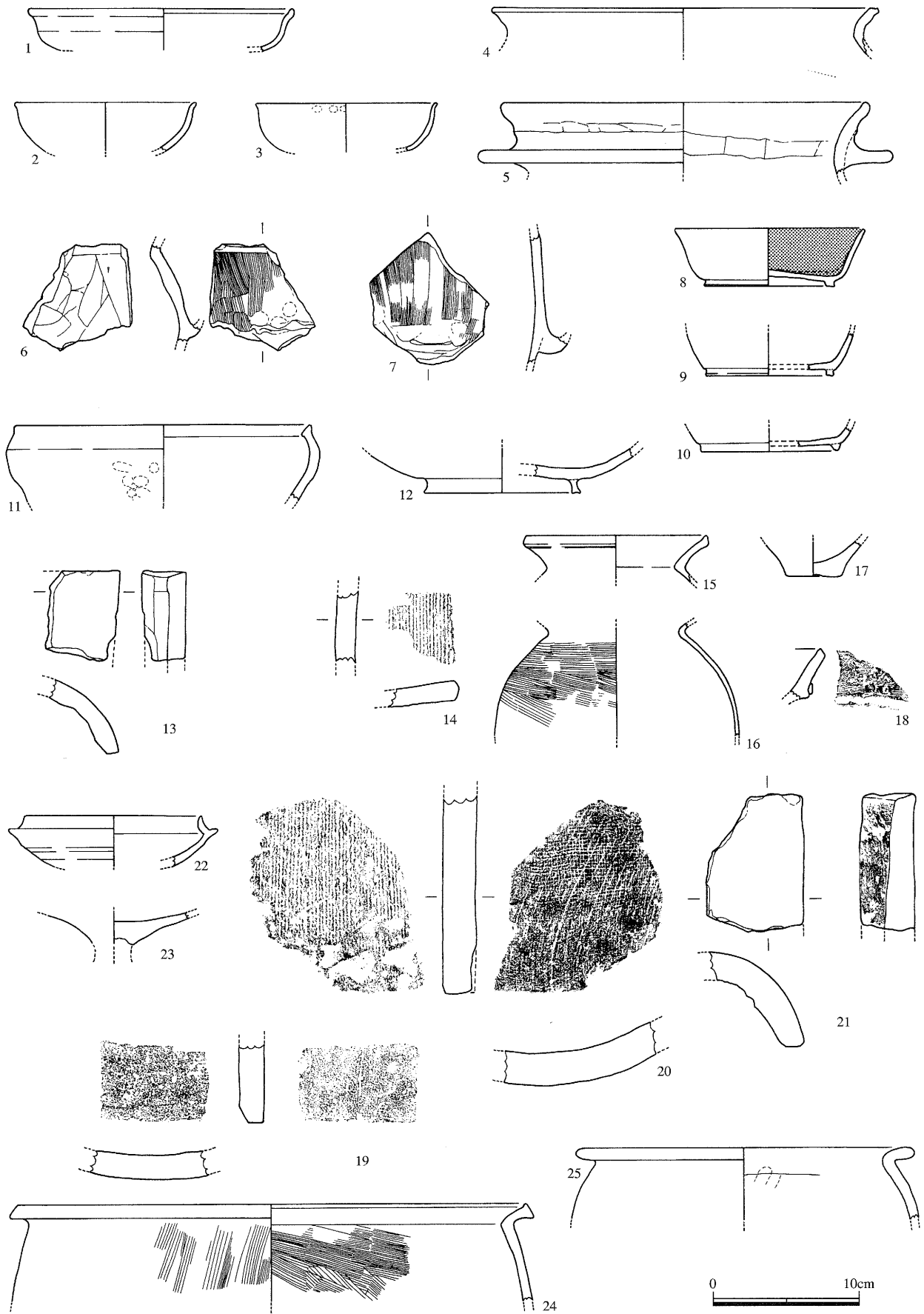


- | | | | |
|--------------------|------------------|-----------------------|---------------------|
| 1. 盛土 | 10. 灰色微砂混粘砂 | 21. 暗灰色砂混粘砂 (土坑状遺構) | 33. 暗灰色小礫混粘土 (植物遺体) |
| 2. 旧耕作土 | 11. 暗灰色粘土 | 22. 暗灰色微砂混粘質土 | 34. 灰色粘土 |
| 3. 淡黄灰色粘砂 | 12. 淡オリーブ灰色砂質土 | 23. 灰白色細砂 | 35. 暗灰綠色粘砂 |
| 4. 淡黄褐色粘砂 | 13. 淡灰褐色粗砂 | 24. 青灰色微砂混シルト | 36. 暗灰色粘質土 |
| 4'. 淡褐色粘砂 | 14. 灰色微砂混シルト | 25. 灰白色微砂 | 37. 茶褐色細砂混粘質土 |
| 5. 茶灰色粘砂 | 15. 暗灰色粘質シルト | 27. 暗灰茶色粘土 | 38. 黄灰色細砂質土 |
| 5'. 茶灰色粘砂砂混粘砂 | 16. 淡緑灰色粘砂 | 28. 淡灰黑色粘土 | 39. 灰褐色細砂混粘砂 |
| 6. 褐色粘質土 | 17. 淡灰褐色微砂質土 | 29. 暗灰緑灰色シルト混粘土 | 40. 暗青灰色粘土 |
| 7. 明オリーブ灰色粘質土 | 18. 灰色シルト～細砂混粘質土 | 30. 暗灰色粘砂 | 41. 暗青灰色粘質シルト |
| 8. オリーブ灰色微砂混粘質土 | 19. 暗灰色粗砂混粘質土 | 31. 暗灰色微砂混粘質土 (Feを含む) | |
| 9. 褐色砂礫混粘質土 (遺構埋土) | 20. 淡緑灰色粘砂 | 32. 暗灰色微砂混粘土 | |

第46図 柱状断面図 (1/40)



第47図 遺構平面及び断面図 (1/40)



第48図 出土遺物実測図 (1/4) (8の網目は漆痕を示す)

が、その性格については明確ではなく、ここでは土坑状遺構としておきたい。

さらに地表下1.65m前後 (T.P+9.96m) の⑪層暗灰色粘土では凸面に縄目をもつ平瓦が1点見つかった。

No11人孔…現地表T.P+11.80m。地表下1.53m (T.P +10.27m) ⑳層灰褐色細砂混粘砂では6世紀後半に比定できる土師器片や須恵器杯を主体として出土しているが、弥生土器の甕口縁が含まれている。また、下部の㉑層青灰色粘土中 (T.P +10.15m) にも極細片ながら土師器やV期の埴輪などが見つかった。このなかで㉑層中の弥生土器片の存在はこの層が整地された可能性を示唆している。

5. 出土遺物 について

いずれの調査区からも遺物は出土しているが、図化可能なものはNo15 (1~18) 、No21 (19~21)、No11 (22~24) 、No8 (25) の各人孔で見つかったものである。

No15人孔のうち1~14が土坑、15~18が㉒層より出土した。土師器杯Aで、復元口径18.8cm、残存器高3.0cmで、調整は表面剥離のため明瞭ではないが、外面はナデ、内面には放射線状暗文と連弧文が微かにうかがえる。2は土師器碗で、復元口径12.8cm、残存器高3.5cm、内外面の調整はナデ。3も土師器碗で、復元口径13.0cm、残存器高3.4cm、ナデ調整を行う。4は土師器甕Aの口縁部で、復元口径27.4cmを測る。ナデ調整。5は土師器鏝付き甕で、復元口径26.2cmで、内外面ナデ調整。土師器甕Bは、大きさの異なる6・7が出土している。8~10は須恵器杯Bで、とくに8は、器内面には底部から口縁端部にかけて漆が付着していた。口径13.3cm、器高4.1cmを測る。11の須恵器鉢は復元口径21.0cmを測る。12は須恵器壺底部である。瓦片も出土しており、13の丸瓦や14の平瓦がある。

15は庄内甕の口縁部で、復元口径13.2cm。16は甕体部で、外面ハケ、内面板状工具によるナデを行う。頸部の屈曲部はナデで鋭さに欠ける。17甕底部は、外面調整不明、内面はイタナデ。18は二重口縁壺の口縁端部で、外面を波状文と円形浮文で飾る。

No21人孔すべて㉒層から出土したものであり、ここでは瓦が主体となる。19は凹面・凸面いずれにも全体に釉薬が付着しており、施釉瓦の可能性をもつ。ただし、平城京あるいは大和の寺院で見られるような緑釉瓦ではなく、灰釉である。あるいは『七大寺巡礼記』の西大寺の条にあるように「貞観の旱魃の時、皆悉く消滅し流れ落ちおわんぬ」とあるように太陽熱で傷んでしまったものかも知れない。凹面は板状工具によるナデ、凸面はナデ、端面はヘラケズリを行う。20は凹面を1cm/4目の粗い布目痕、凸面は縄目叩き。21は丸瓦で、欠損しているが玉縁式である。凹面は縄目痕とヘラケズリ、凸面はナデと指押え痕が残る。

No11は㉒層から出土であるが、須恵器杯身22や土師器高杯23に混じって弥生土器甕24が見つかった。須恵器の形態から7世紀代のものであろう。

No8は㉒層からは土師質羽釜の口縁部が出土している。

6. まとめ

以上の土器や瓦を概観すると庄内式期の包含層が一部ではあるが、確実に存在しており、当地の最も古い営みを示すものであろう。しかし、No11人孔で見つかったように弥生土器がみられた。近接する中田遺跡あるいは東弓削遺跡内でも南東部分では弥生中期の遺構面の存在を確認しており、今後調査地周辺で生活面が見

つかることも十分予想し得る。

次に古墳時代後期の遺物であるが、これは東弓削遺跡内で須恵器とともに埴輪片が多数出土しており、墓域を中心として集落が存在していたことを示すものである。

そして、8～9世紀において、当調査区近辺で瓦片が出土していることから、寺院を含めて建築物があったことが推定される。今回の出土遺物で注目されるのは漆が内面に付着している須恵器杯Bと施釉瓦の可能性をもつ平瓦の存在である。また、近接地では平成6年度に軒丸瓦や製塩土器などが出土しており、今回の調査結果との関連性が高く、公の施設があったことが示唆される。

(消)

〔参考文献〕

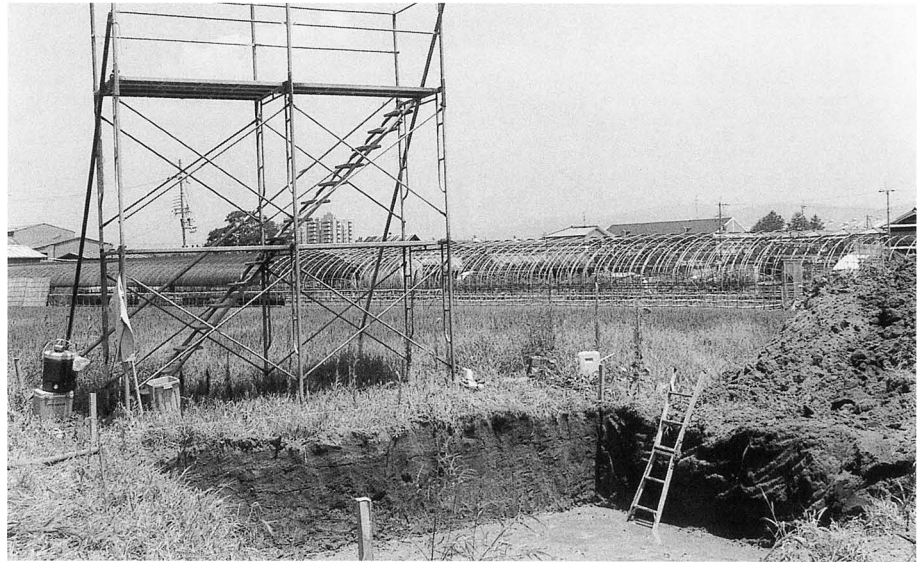
吉田野乃「東弓削遺跡(94-484)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会1995

消斎「東弓削遺跡(94-298)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会1995

山本昭『東弓削遺跡』八尾市教育委員会1974

图 版

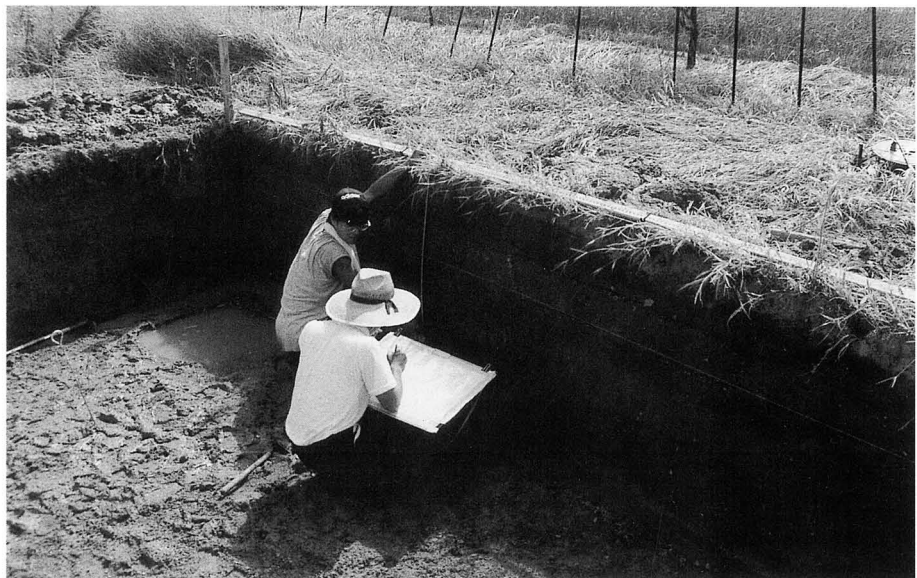
調査風景
その1
(第7区)



調査風景
その2
(機械掘削)



調査風景
その3
(実測風景)



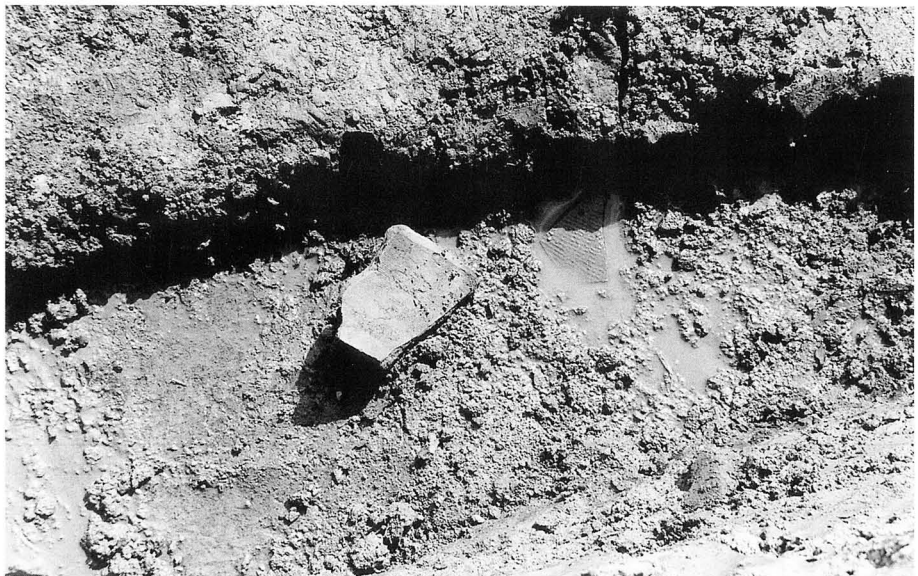
遺構検出状況
(第6区)



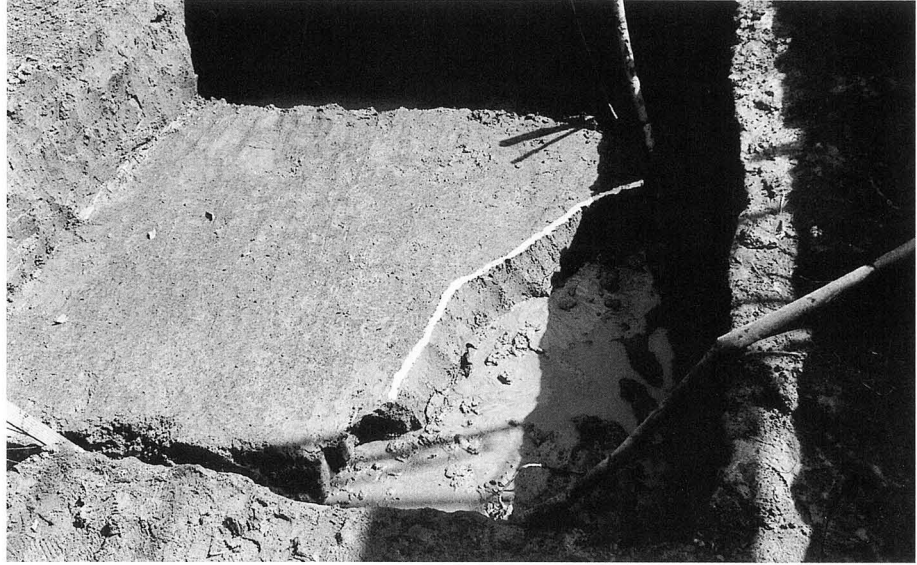
調査風景
その4
(第11区)



SX1101
瓦出土状況
(第11区)



遺構検出状況
(第14区)



須恵器器台・甗
出土状況
(第14区)



羽釜出土状況
(第14区)



第1遺構面
(西より)



第2遺構面
(西より)



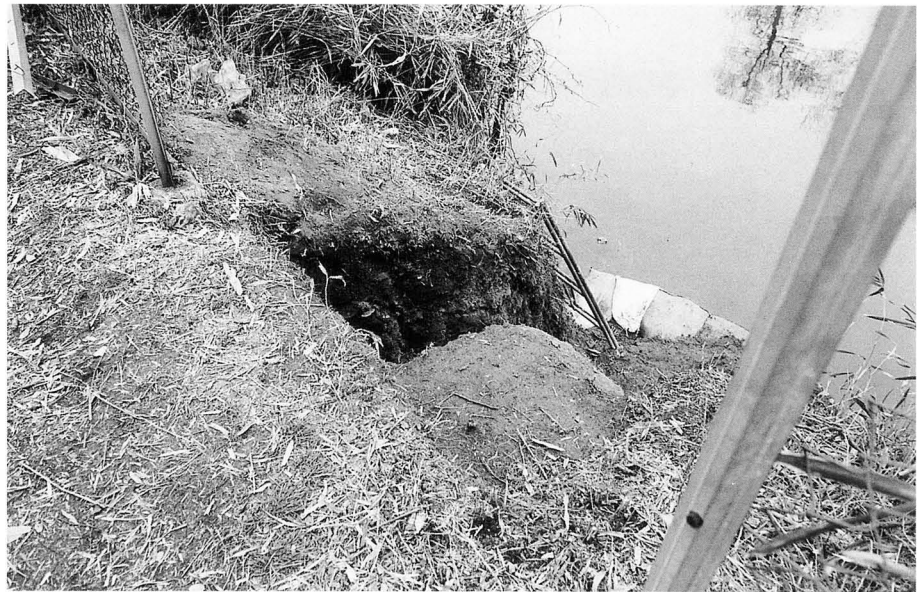
第3遺構面
土坑3-3
軒丸瓦出土状況



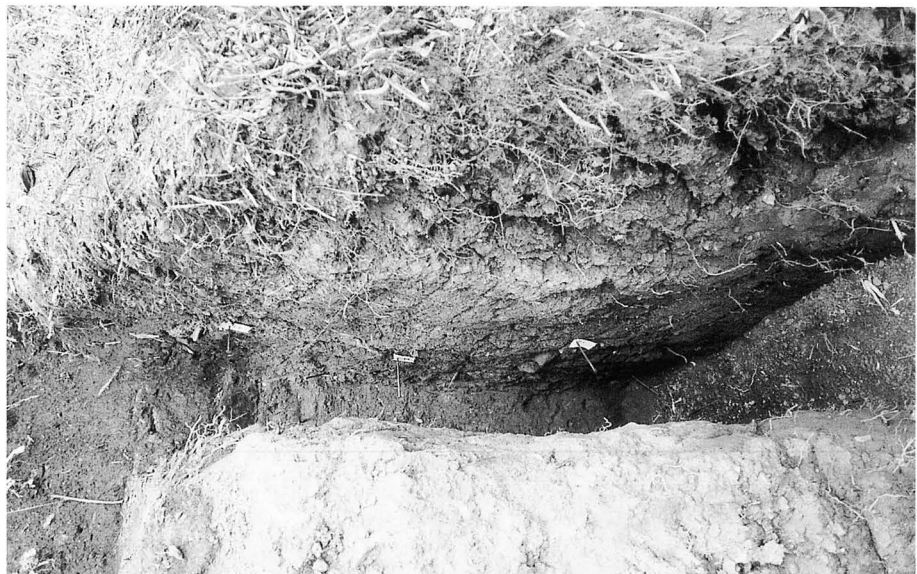
調査区より
心合寺山古墳
を望む



調査区
(南西より)



調査区北壁断面
(東より)

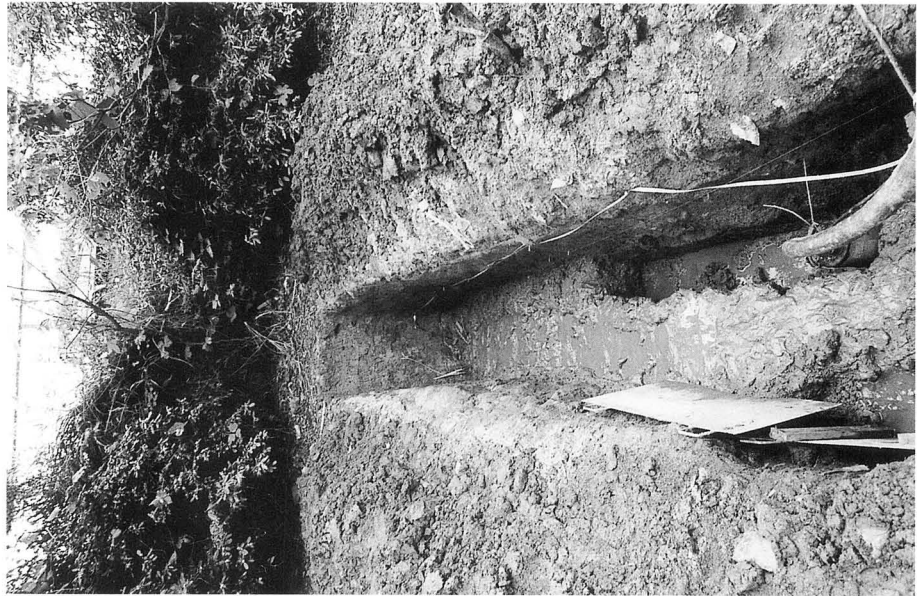


(天)

調査風景
(東より)



調査区
(北より)



調査区
土層断面
(南より)



調査風景
(機械掘削)



SD101
器台出土状況
(第1調査区)



SK101
土器出土状況
(第1調査区)



SD102
土錘出土状況
(第1調査区)

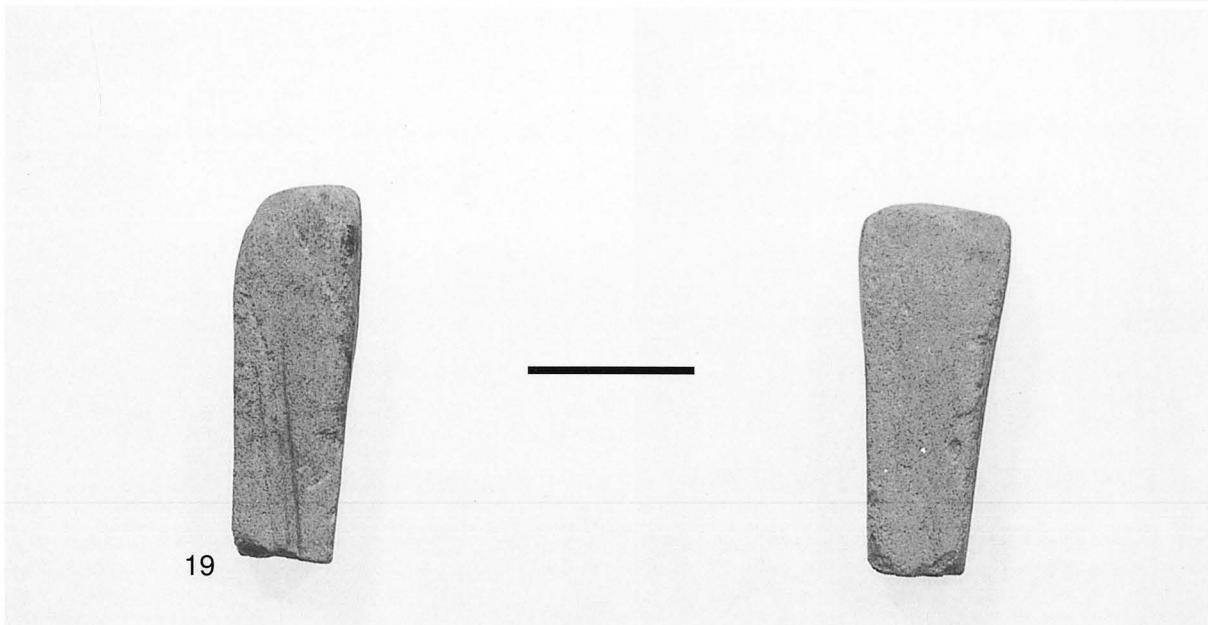
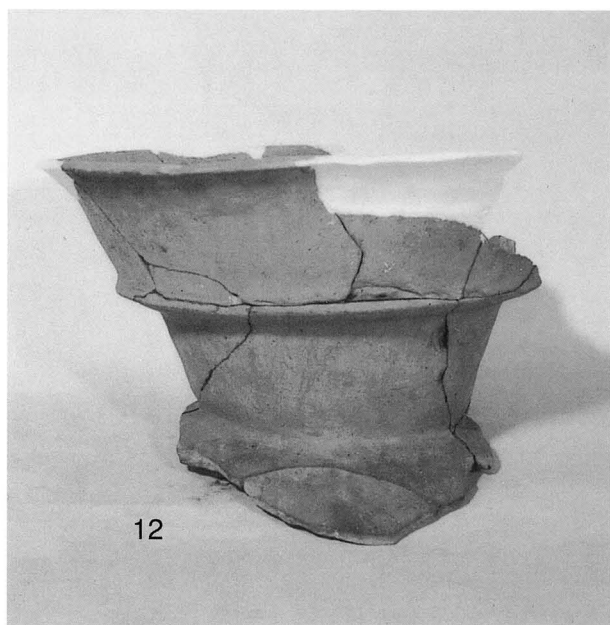


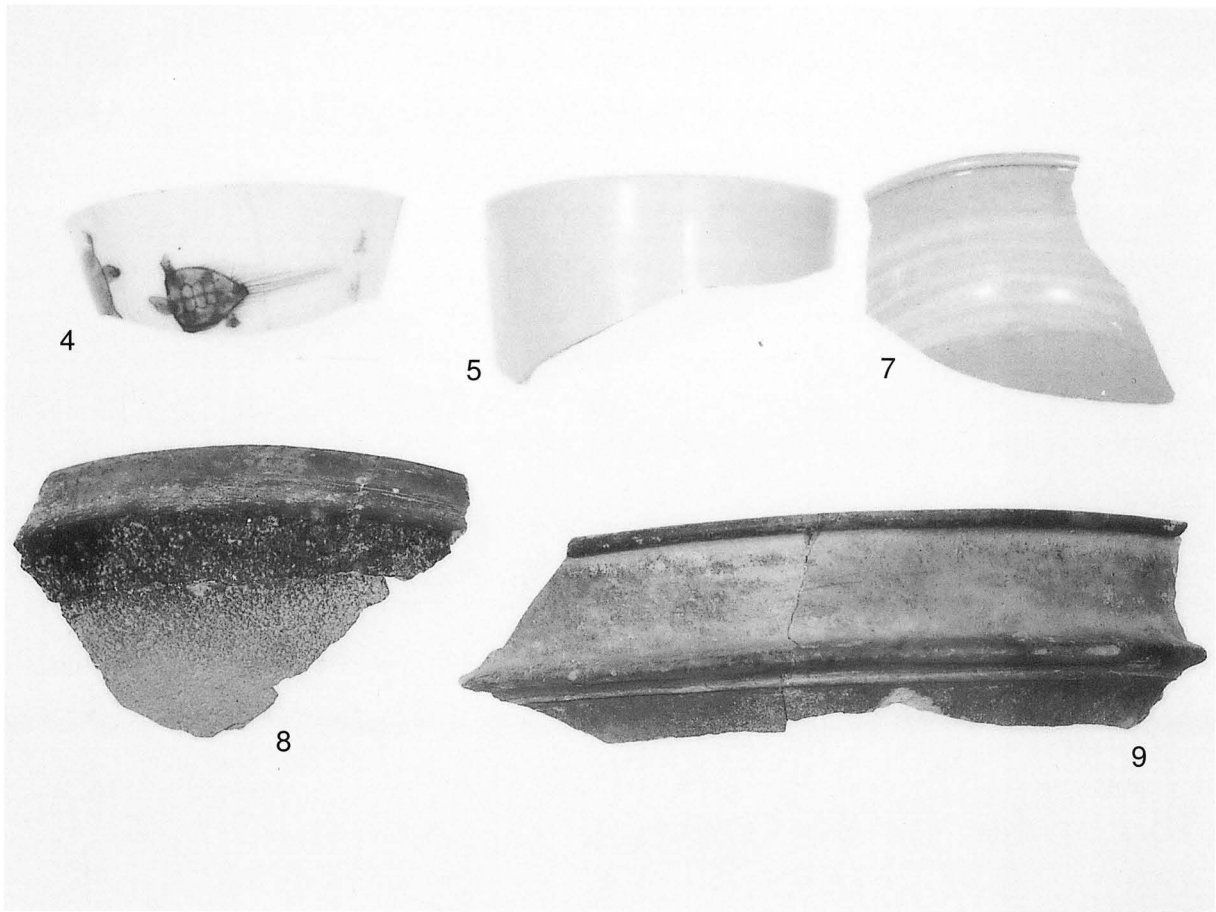
SD102
小型丸底壺
出土状況
(第1調査区)



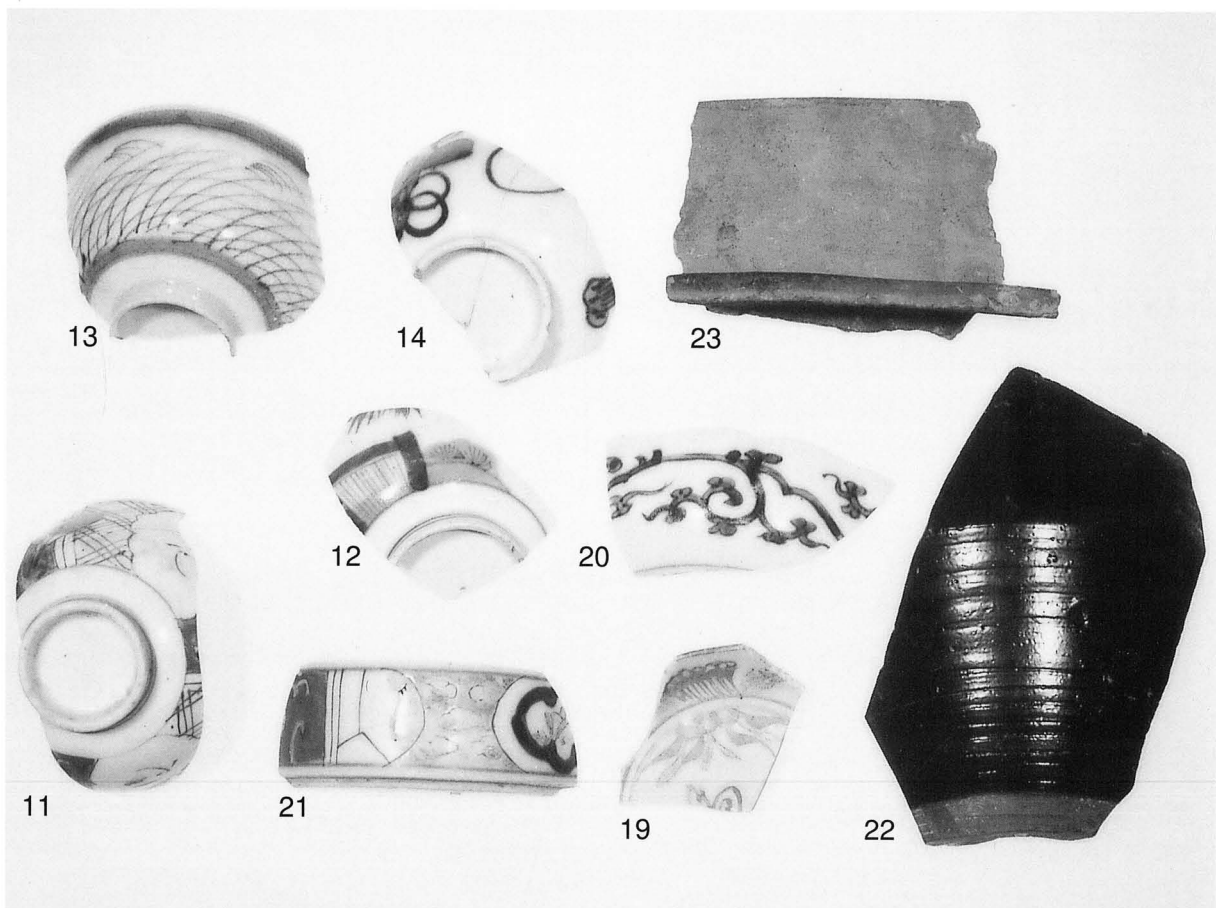
SD201
検出状況
(第2調査区)







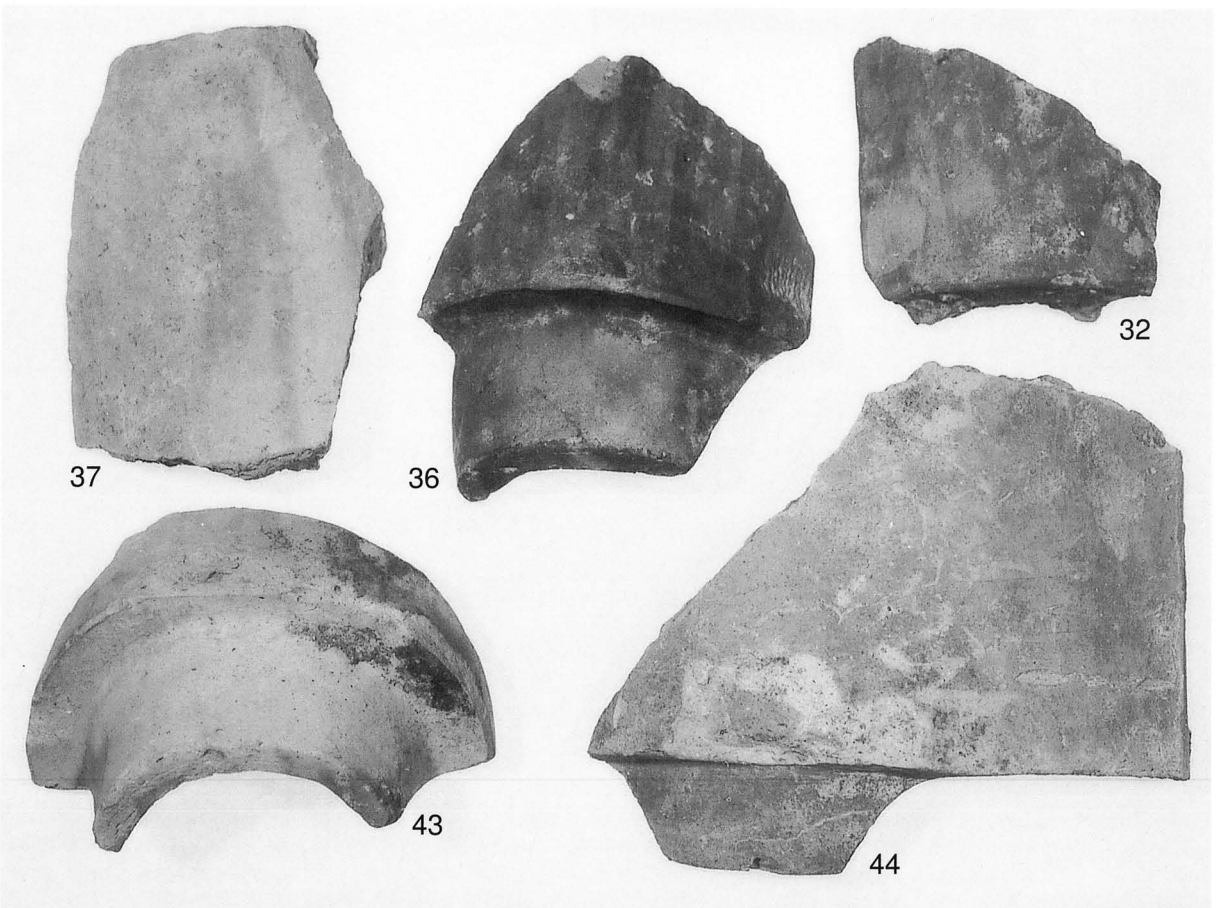
土坑 1-2・1-4 出土遺物



土坑 1-6 出土遺物



出土遺物



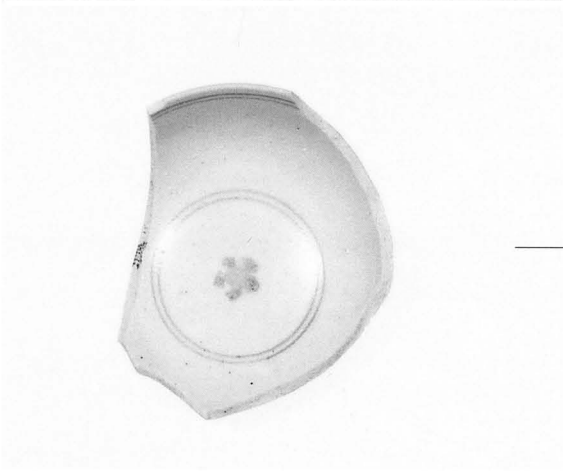
出土瓦



1



3



2



29



34



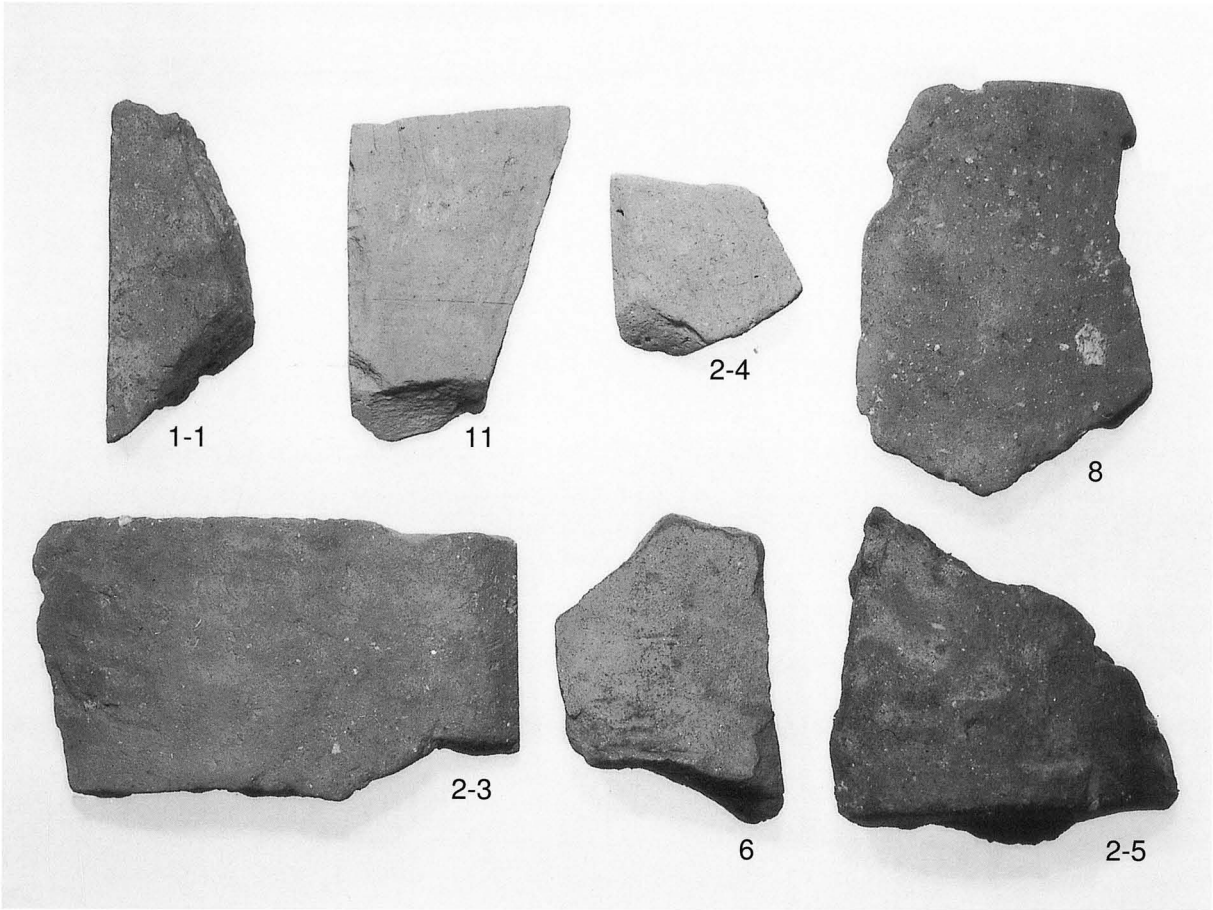
188-8



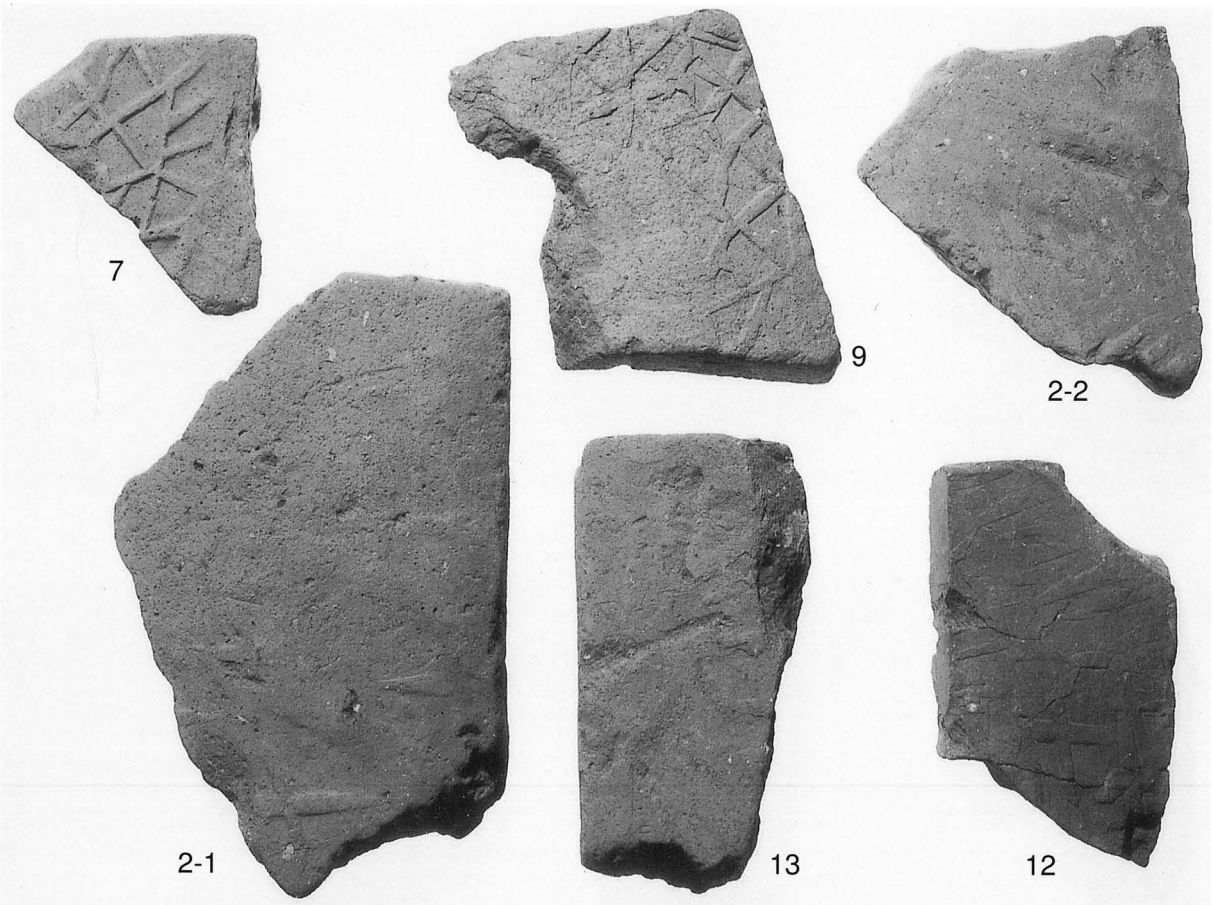
心合寺跡 (96-576) 軒丸瓦 (1)



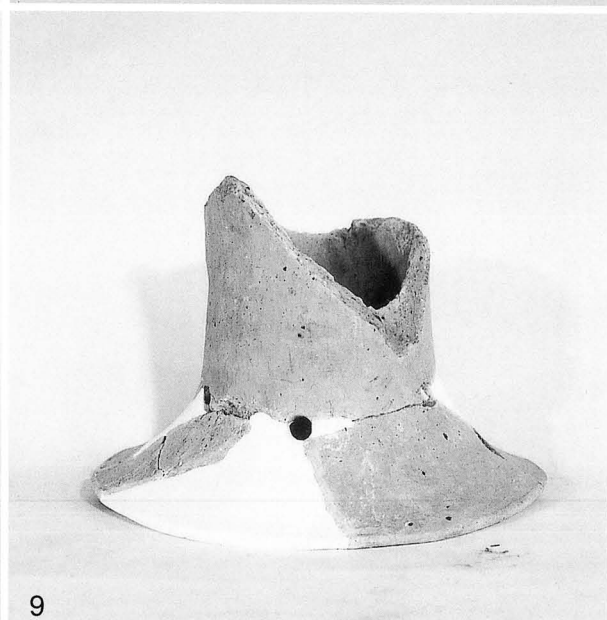
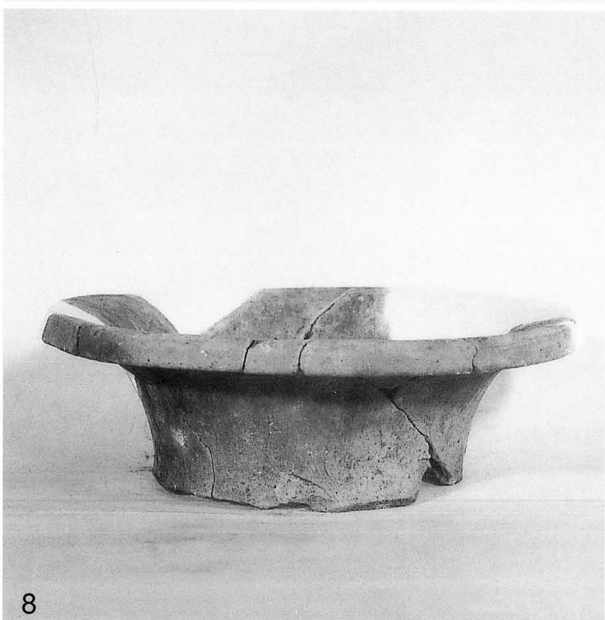
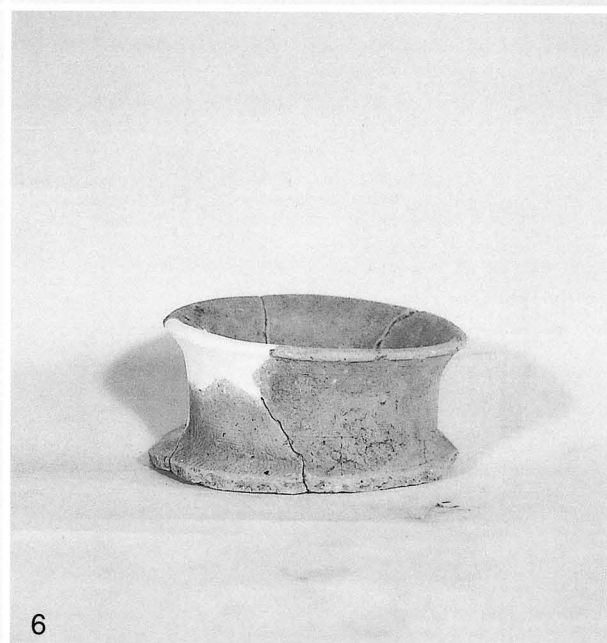
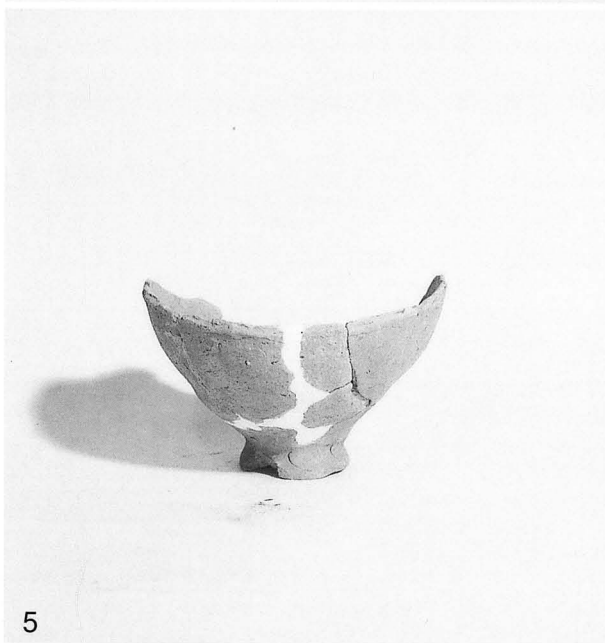
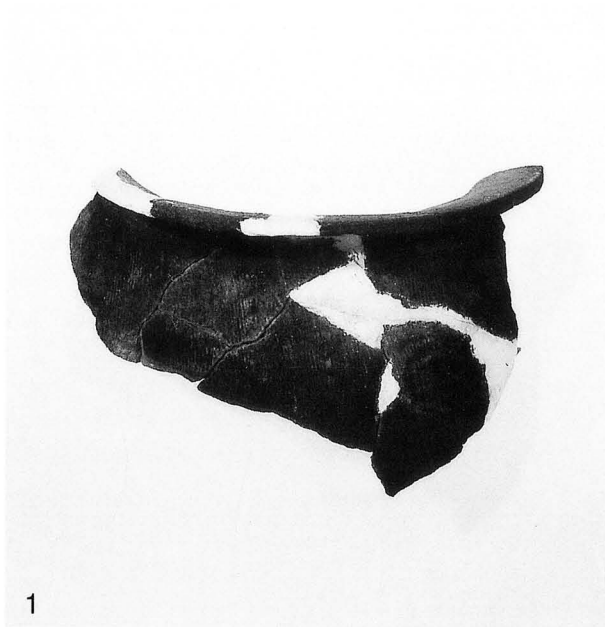
心合寺山古墳 (新池) 軒丸瓦 (13)

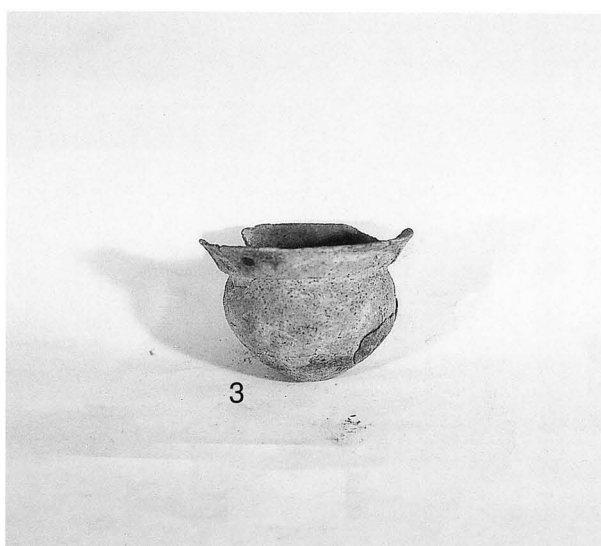


平瓦・丸瓦

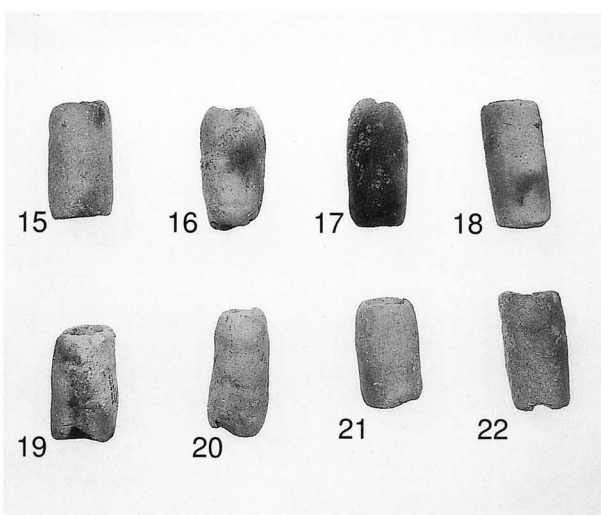
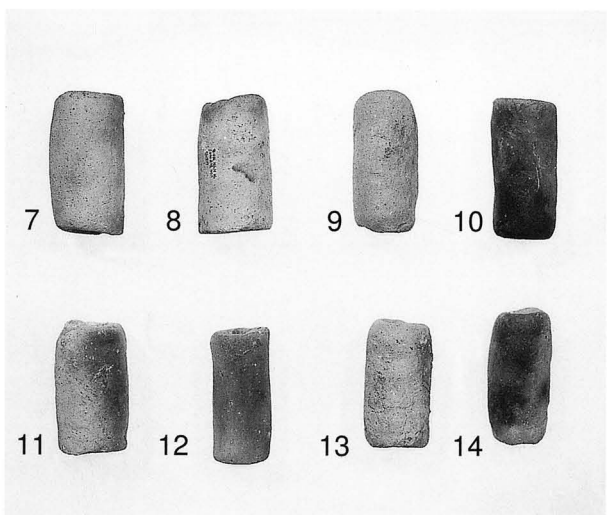


平瓦

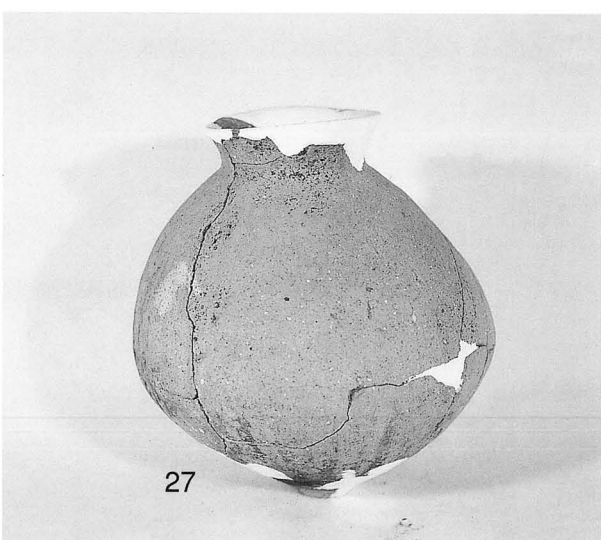




[SD102]

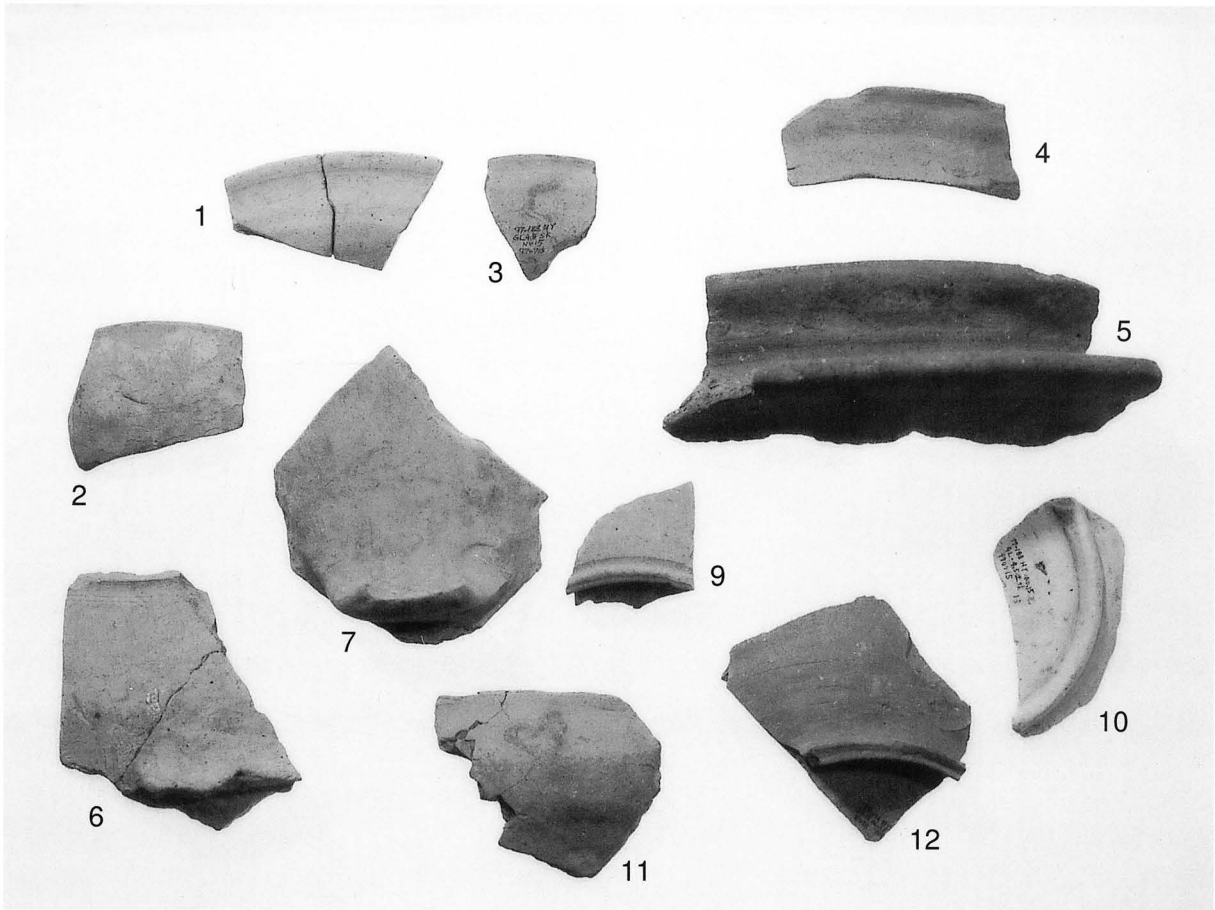


[SD102]

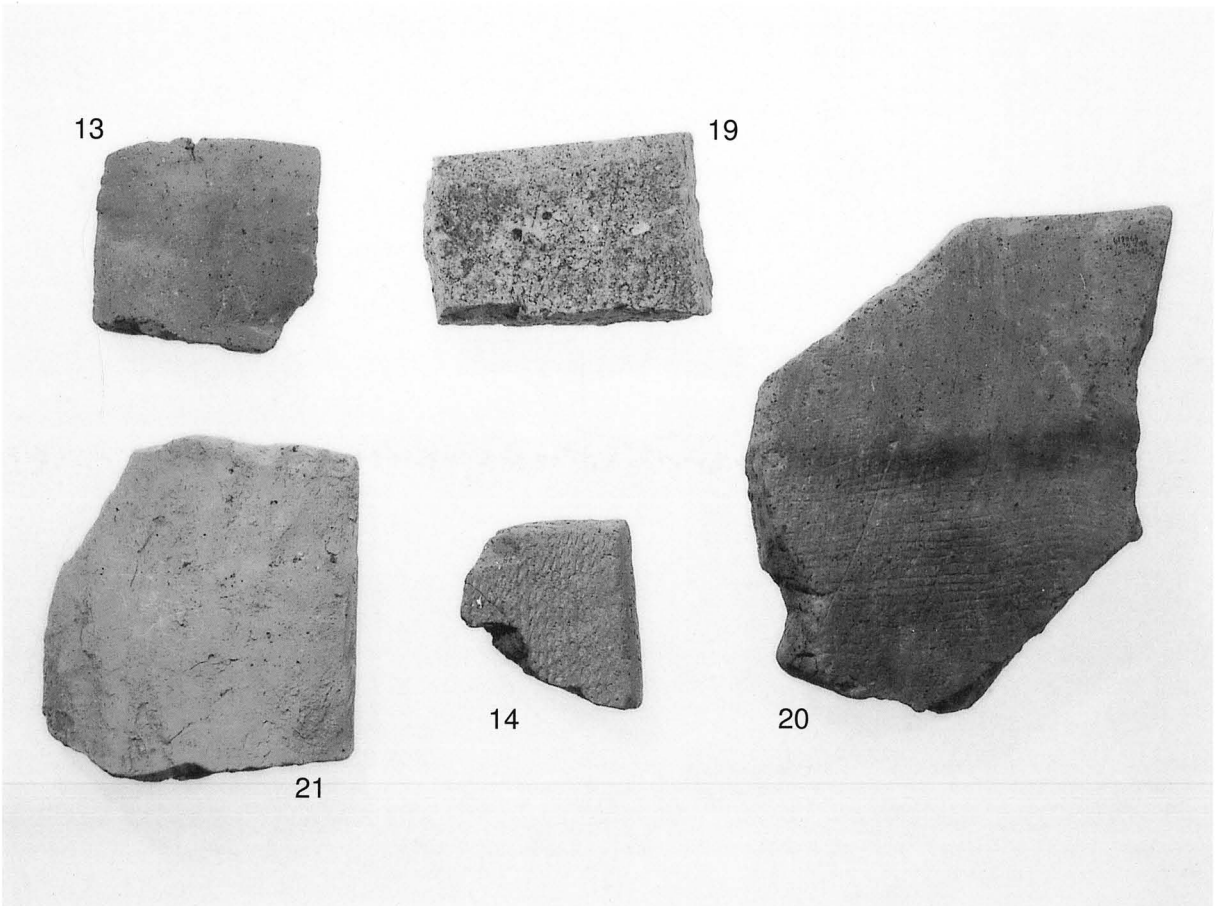


[SK101]

図版 17 東弓削遺跡 (97-188) 出土遺物



出土土器



出土瓦

報 告 書 抄 録

| | | |
|---------|------------------------------------|--|
| ふりがな | やおしないいせきへいせい9ねんどはつくつちようさほうこくしよ | |
| 書 名 | 八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅱ | |
| 副 書 名 | 平成9年度公共事業 | |
| 巻 次 | | |
| シリーズ名 | 八尾市文化財調査報告 | |
| シリーズ番号 | 39 | |
| 編 著 者 名 | 米田敏幸・消斎・吉田野乃・吉田珠己・藤井淳弘 | |
| 編 集 機 関 | 八尾市教育委員会 | |
| 所 在 地 | 〒581 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎0729-91-3881 | |
| 発行年月日 | 西暦1998年3月31日 | |

| 所収遺跡名 | 所 在 地 | コ ー ド | | 北 線 ° ' " | 東 径 ° ' " | 調 査 期 間 | 調 査 面 積 (m ²) | 調 査 原 因 |
|--------|---------------------|-------|------|-------------------|--------------------|--|------------------------------|--------------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 久宝寺遺跡 | 大阪府 八尾市 南久宝寺・浜川町 | 27212 | | 34° 37' 20" | 135° 35' 35" | 19970701 ~19971106 | 500 | 区画整理事業に伴う遺構確認調査 |
| 久宝寺寺内町 | 八尾市 久宝寺 | 27212 | | 34° 37' 26" | 135° 35' 25" | 19970602 | 6 | 研修・展示施設建設に伴う遺構確認調査 |
| 心合寺跡 | 八尾市 大竹 | 27212 | | 34° 38' 09" | 135° 38' 40" | 19970224 | 8.5 | 道路改修工事に伴う遺構確認調査 |
| 心合寺山古墳 | 八尾市 大竹 | 27212 | | 34° 38' 10" | 135° 38' 38" | 19971006 1007 | 9.7 | 新池改修工事に伴う遺構確認調査 |
| 太子堂遺跡 | 八尾市 東太子 | 27212 | | 34° 36' 39" | 135° 35' 34" | 19970729 | 3.9 | 公共下水道工事に伴う遺構確認調査 |
| 高安古墳群 | 八尾市 郡川 | 27212 | | 34° 36' 47" | 135° 39' 11" | 19970506 | 3.0 | 休憩施設設置に伴う遺構確認調査 |
| 西郡廃寺遺跡 | 八尾市 幸町 | 27212 | | 34° 38' 40" | 135° 36' 33" | 19961216~18. 19970108~09 | 24 | 公園造成工事に伴う遺構確認調査 |
| 東弓削遺跡 | 八尾市 八尾木 | 27212 | | 34° 36' 20" | 135° 37' 07" | 19970619,25 0715, 0909,12, 0916 | 28 | 公共下水道工事に伴う遺構確認調査 |

| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特 記 事 項 |
|------------------|-------------|------------------|-----------------|---------------------|---------|
| 久宝寺遺跡 | 集落 | 弥生~近世 | 溝・土坑・ピット | 弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦 | |
| 久宝寺寺内町 | 集落 | 中世~近世 | 土坑・ピット | 瓦・焙烙・火燈・陶磁器 | |
| 心合寺跡 | 寺院跡 | 奈良時代~ 平安時代 | 包含層 | 瓦 | |
| 心合寺山古墳 (心合寺跡) | 古墳 (寺院跡) | 古墳時代・白 鳳~平安時代 | 包含層 | 土師器・須恵器・埴輪・瓦 | |
| 太子堂遺跡 | 集落 | 弥生時代 | 土器集積 | 弥生土器 | |
| 高安古墳群 | 古墳 | 不明 | 包含層 | 土師器 | |
| 西郡廃寺遺跡 | 集落 | 弥生時代 古墳時代 | 溝・落ち込み 溝・ピット | 弥生土器 古式土師器 | |
| 東弓削遺跡 | 集落 | 庄内期・奈良 時代~中世 | 土坑・溝 | 庄内式土器・土師器・須恵器 ・瓦 | |

八尾市文化財調査報告39
平成9年度公共事業

八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告Ⅱ

発行日 1998年3月

発行所 八尾市教育委員会

印刷 (株)近畿印刷センター

<八尾市刊行物番号H9-83>

